小説
ヨコハマ買い出し紀行
―見て、歩き、よろこぶ者―
著者 香月照葉
原作 芦奈野ひとし

小説
ヨコハマ買い出し紀行
―見て、歩き、よろこぶ者―
著者 香月照葉
原作 芦奈野ひとし

CONTENTS

小説

ヨコハマ買い出し紀行

―見て、歩き、よろこぶ者―

イラスト／芦奈野ひとし
デザイン／中村忠朗（ARTEN）

プロローグ

緑色の炎に似た草の海を、少年が一人、渡ってゆく。

だぶついたシャツから伸びる細い腕が、頑丈な茎を、がむしゃらにかき分け続ける。そのわずかな隙間に割り込んでいく、コバルトブルーの髪におおわれた、小さな頭。ぼさぼさに伸びた前髪からのぞく瞳は、真夏の空を映した藍色だ。

草の丈は高く、少年の華奢な体を、ほとんど呑み込んでしまっている。草原の中に細々と続いていた街道は、いつの間にか消えてしまった。少年はただ、直感だけを頼りに進み続ける。追われるように、前へ、前へ。引き返す術はもうない。元来た道が分かったところで、少年にはもう、帰る場所がない。

剃刀のような鋭い草の葉が、むき出しの肌を容赦なく切りつける。そのたび刻まれる、赤い傷跡。柔らかな頬をかばいもせず、少年は進み続ける。ささいな痛みにはもう馴れた。それに小さな切り傷くらいなら、少年の特別な肌は、まばたきする間に消してしまう。

むせかえるような草いきれと、強烈な暑さ。少年の視界が、だんだんかすみはじめた。もうどれだけの時間、先の見えない草むらを歩き続けたろう。どこまで行けば、抜け出せるのだろ

う。

ほんのわずか気がゆるんだ隙に、絡んだ草に足を取られた。もんどり打って倒れたとたん、少年の視界を、真っ白な光が満たす。

少年――名前を、オメガという――は、ゆっくりと起き上がって、目を凝らした。草むらはふいに途切れて、すぐ目の前が、ゆるい崖のふち。見下ろせば、一面の白い花園が、強い風に波打ちながら、はるか遠くまで広がっている。漂ってくる、甘くて柔らかい独特の香り。

――コーヒーの花だ。

オメガは崖のふちに腰を下ろして、ホッと息をついた。優しい香りをまとった風が、勢いよく吹き上げてくる。華奢な体には大きすぎる、大人用のシャツと半ズボンが、風をはらんでふくらんだ。ふわりと全身が軽くなる。このまま飛べるんじゃないかと思うくらいだ。

けれども、たまりにたまった疲労はおもりのように両足に絡みついて、オメガをずっしりと地上にしばりつけていた。荒れ果てた街道を、地図もないままに何ヵ月も歩き続けたせいだ。街道とは言っても、ほとんどが道とは呼べない代物で、さっきのように、道筋を見失って迷ったときには特に、不安が疲れに輪をかける。

座り込んだまま、うとうとと眠り込みそうになったとたん、腹の虫が大きな音を立てた。もう二日くらい、何も食べていない。

もう少し時期が遅ければよかったのに、と、オメガはうらめしそうな目でコーヒーの野原を

見つめた。花が終わって実がなっていれば、あの甘くてみずみずしい実が、うんざりするほどたくさん採れるはずなのに。

——気の早いヤツが、実をつけてたりしないだろうか？

広い野原に、注意深く視線を走らせた。かざした腕のずっと向こう、遠い花々のうねりの中に、一瞬何かが見えた気がして、オメガは藍色の目をパッと見開く。

——建物？

コの字の塀に囲まれた小さな屋根が、波のあわいに浮かぶ小島のように、ちらちらと見え隠れしている。

——あれは、まさか……。

オメガはあわてて崖を滑り降りた。着地しそこねて派手に尻もちをつく。痛みを感じる間もなく跳ね起きて、屋根の見えた方へ駆け出した。

——落ち着け、まだそうと決まったわけじゃない。

何度もそう自分に言い聞かせながら、それでもはやる気持ちを抑えきれずに、オメガはコーヒー花の茎の間を、躍起になって走り続けた。

——かながわの国、と呼ばれた土地の海辺に、旅人を待ち続けるロボットがいるらしい。

そう宇布見が話してくれたのは、ハママツの海に近い廃工場の中、二人きりで焚き火を囲んで、コーヒーの実を食べていたときだった。もっとも、二人の他に、生きて口をきく者は誰もいなかったのだけれど。

真っ赤な実は、オメガの拳ほどの大きさだ。弾力のある果肉はとても甘くて美味しいけれど、実のあちこちに固い種が紛れ込んでいて、上手く食べるのには少しコツが要る。

小さな種を二つ三つ器用に吐き出して、宇布見は続きを語った。

「そのロボットは、コーヒーの種から何か特別なやり方で飲み物を作って、それで旅人をもてなすって話だ」

オメガは、床に散らばった種に目をやった。コーヒーと言えば実を食べるものに決まっている。ただ邪魔なだけの種から飲み物を作るなんて、想像もつかない。

「……どうやって？」

オメガは恐る恐る切り出した。宇布見はとにかく気むずかしい。下手に話しかければどやされるが、しゃべりたがっているときには上手に相手をしなければ、機嫌を損ねてしまう。

「さあな。やり方を知ってるのはそのロボットくらいなもんだろう。それも、まだ生きていればの話だ」

「ロボットなのに、その人、死ぬの？」

「死なないロボットはお前だけだ、オメガ。何しろ俺の最高傑作だからな」

宇布見は顔を上げてにやりとオメガを見すえた。生体ロボットの究極の形、永遠に生き続ける不死鳥(フェニックス)。エタノールに酔うたび、宇布見は何度も繰り返す。かつては優秀な技師だったという宇布見が、不死のロボット、オメガを創(つく)り上(あ)げたのは、かれこれ五年ほど前のことだ。

「そのロボットはかなりの年代物だっていうからな……。人間よりはずっと長生きだろうが、どのくらい生きられるのかは創った奴らにだって分からなかったろう」

生きていてくれればいいのに、と、オメガは願わずにいられなかった。そのロボットは、いったいどんな姿をしているだろう？　オメガの胸の内で、想像がふくらみはじめる。髪の色は？　目の色は？　宇布見みたいな、大人なんだろうか。それとも自分と同じ、子供の姿をしているだろうか。

それにしても、どうしてわざわざ手間のかかる飲み物なんか作って、旅人を待ったりするんだろう、とオメガは首をかしげた。もしかすると、その飲み物を飲んだ旅人は、機嫌がよくなるんじゃないだろうか。オメガはそのたわいない思いつきに、ぱっと瞳を明るくする。宇布見だって、ひっきりなしに飲んでいるエタノールじゃなくて、その飲み物を飲むようになれば、笑顔になって、オメガにも、もっと優しくしてくれるのかもしれない。そう考えると、少しだけ、胸が軽くなる気がした。

「……飲み物の作り方、分かればいいのにな……」

ほとんどひとり言のようにつぶやいたオメガの足下に、いきなり工業用アルコールの瓶が飛

んできた。派手な音を立てて破片が飛び散る。

「分からねえって言ったばっかりだろう」

怒鳴られて、ぎゅっと身を縮めた。虫の居所が悪くなると、決まってアルコールの瓶が飛んでくる。答えようのない質問を投げてしまったときなら、なおさら。

ごめんなさい、と小声でつぶやいて、オメガはそろりと壁際に寄った。胸ポケットのボタンを開くと、丸めた布きれを取り出して、小さな手のひらの上で、そっと広げてみる。

中から現れたのは、親指の先くらいの大きさをした、ガラス玉だった。

透き通った緑色のそれは、物心ついたときには、もうオメガのポケットの中にあった。どうやって手に入れたのかは分からない。けれども、それがとても大切なものだということだけは、はっきりと憶(おぼ)えている。

宇布見を怒らせてしまったとき、オメガはいつも、このガラス玉を眺めることにしていた。ひんやりとした緑の色に触れていると、いつの間にか心は静まって、重たい胸が、少しだけ楽になる。

そのままオメガは、横になって、コンクリートの上で丸まった。宇布見の独り言の向こうで、ハママツの海の波音が、眠りを誘うように、繰り返し響いていた。

翌朝、コンクリートの上に仰向けに寝ころんだまま、宇布見はいつまでたっても眠りこけて

いた。脇に、空になったアルコールの瓶が転がっている。
こんなとき、無理矢理起こしたりすればこっぴどく怒鳴られる。オメガはそっと宇布見のかたわらに腰を下ろし、目覚めるのを待った。けれども太陽が空高く昇り、やがて西の方へ傾きかける頃になっても、宇布見はまるで動かない。痺れを切らしたオメガは、起こすときいつもそうするように、そっと手を伸ばし、髭だらけの頬に触れてみる。
宇布見の肌は、ひやりとして、こわばっていた。
オメガは驚いて手を引っ込めた。冷たい汗が、全身にどっと噴き出してくる。
——どうしよう……！
叱られるのを覚悟で、オメガは必死に、宇布見の体を揺り動かす。冷え切った手をさすってみる。けれどもそれは石膏みたいに固まっていて、中途半端に折れ曲がった指の形は、オメガが触れても一ミリも動かない。
『俺が眠ったまま、何をしても目覚めなくなったら……』
石のような手を握りしめたまま、わなわなと震えるオメガの脳裏に、いつだったか、宇布見に言い聞かされたことが、蘇ってきた。
『動くこともなく、息もせず、体がこわばって固まってしまったら、それは俺が、死んだ、ということだ』
死んだ、という言葉がよぎった瞬間、オメガの胸の底から、ひどい衝撃が突き上げてきた。

その衝撃がなんなのか、オメガにはまるで分からない。ただ、そのショックを感じ続けていては危ない、ということだけが、直感的に分かる。
震える手が無意識に、ポケットのガラス玉を探っていた。オメガは必死で、宇布見の言葉の続きを思い出す。余計なことは何も、考えないように。
『俺が死んだら、お前はすぐに、俺の体を海の見える丘の上に埋めなきゃならない。それがお前の一番大切な仕事だ。それさえ済めば、あとは好きにしろ。どこへ行っても構わない』
——言われたとおりに、しなくちゃ。
ずっしりと重くなった宇布見の体を、オメガは渾身の力を込めて引きずり出した。廃工場の外には、丘へ続く坂道。ひび割れて乾いた砂の上に、引かれてゆく宇布見の両足が、二本の浅い溝を刻んでいく。
——何も、考えちゃ、だめだ。
丘の上に着いた頃には、西の空にたなびく雲が、赤黒く変色していた。前もって置いてあったシャベルを、オメガは拾い上げる。いつだったか宇布見が、このときのためにと用意しておいたものだ。大人にも重すぎるそれをぎこちなくふるって、オメガはなんとか宇布見の体が入るだけの、細長い穴を掘った。穴の脇に寝かせた体を、シャベルの柄をテコにして、穴の中へ転げ落とす。
ようやく土をかぶせ終わった頃には、すっかり夜が更けていた。疲れ果てたオメガは肩で息

をしながら、土まんじゅうのかたわらに、仰向けになって崩れ落ちる。

満天の星だった。遠く、近く、波音が寄せてくる。くたくたになった体の熱は冷たい土に吸い込まれて、背中が心地よく冷えはじめる。

張りつめていた緊張の糸が、ふっとゆるんだ。その、瞬間。

——もう、誰もいない。

ふいに、奇妙な声が、どこからともなく響いてきた。

オメガは跳ね起きて、辺りを見回した。わけもなく、鼓動が速まってくる。

その声には確かに、聞き覚えがあった。

——もう、誰もいないぞ。

また声が響く。そんなはずはない、と、激しくかぶりを振りながらオメガは耳をふさぐ。

それは誰の声でもない、オメガ自身の声だったのだ。

——誰もいない誰もいない誰もいない誰も……

自分の声なのに、コントロールがきかない。黙らせることができない。口をふさいでも、耳をふさいでも、その声は頭の中に、直接入り込んできて、しゃべるのを決して止めようとはしないのだ。

鉛でも呑み込んだように胸が重くなる。喉が詰まって吐き気がする。たまらず口を大きく開いて思い切り息を吸おうとする。けれども空気の入ってくる感覚がまったくない。息ができな

い。オメガの頬から見る見る血の気が引いていく。息が、できない！

——誰もいないもうお前以外にはこの地上にもう誰一人いない誰も……

たまらずに胸をかきむしった拍子に、ガラス玉のふくらみが指先に触れた。すがりつくように握りしめる。そのとたん、冷えきった胸の奥に、ほんのわずかだけれども、温かみが戻る。

オメガは全身の力を振り絞って、腹の底から叫び返した。

「違うぞ！」

声が出た！　オメガは思い切り息を吸い込むと、不吉な囁きを払い除けるように、もう一度渾身の力を込めて叫んだ。

「東の国に、ロボットがいるぞ！　今でも、誰かが来るのを待ってるんだ！」

荒れはじめた波音の中に、奇妙な声の返事はなかった。いつの間にか、体の震えが止まっている。

東の国にいるはずの、もう一人のロボットに会いたい。オメガは切実に、そう願った。出会うことさえできれば、もう二度と、あの恐ろしい声を聞かずに済むかもしれない……。

クモの糸のようにか細い望みを胸に、オメガは夜明けも待たず、ハママツを後にしたのだ。

遠い昔の街道の跡を埋め尽くして、青白く光る街灯の木をたどりながら、ひたすら東へ、東へと向かう。いったいどこからがかながわの国なのか知る術もなかったから、滅びた町の跡を通りかかるたび、海辺の建物は片っ端から調べて回った。けれども、生きて動くものの気配は

まるでない。誰もいない、がらんどうの部屋を見るたびに胸が詰まって、あの奇妙な自分の声に追いつかれそうになる。そのたびにオメガは、胸ポケットのガラス玉を取り出しては、じっとそれを眺めて、心が落ち着くのを待った。ガラスに映る自分の姿が、ぐにゃりと歪んで、ふいに、東の国で待っているロボットの姿を映し出す。それは、逆光の中の影のようにぼんやりとした想像図だったけれども、それでもオメガには、十分すぎるほどの慰めになった。

富士の山を迂回し、湘南湖を過ぎて、海沿いに南へ下る経路をたどる。ハママツを出てから数ヵ月。実のところ、まるっきり見当違いな場所を歩いてきたんじゃないか、そんな不安に揺れはじめた矢先に、いかにもそれらしい建物を見つけたのだ。今度こそはと、オメガは躍起になって、コーヒー花の草むらを走り続ける。

五分ほどかかって、やっと塀の端までたどり着いた。北側の壁は苔むして、いくつか大きな亀裂が走っている。ゆっくりと土を踏みしめながら、オメガは塀の表へ回った。じっとりと手のひらに汗がにじんでくる。コンクリートで固めた敷地の端に、こぢんまりとした平屋根の建家があった。そのガラス戸の奥に見えるのは……。

——人影!?

オメガは転がるように建物に駆け寄って、ノブに手をかけた。かすかにきしみながら、ほこりに焼けてすっかり曇ったガラス戸が開く。

丸椅子がいくつかとカウンターがあって、その向こうに、頬杖をついたまま幸福そうな笑み

を浮かべて眠り込んでいる女性の姿が見えた。深い翠色の、うっすらとツヤを帯びた髪。ロボットを見分けるための徴だという、滴形の赤いイヤリング。

やっと見つけた。東の国のロボットを。

そう思ったとたん、その場に崩れ落ちそうになった。

胸の内側から叩きつけるように、鼓動が高まってくる。宇布見以外の誰かに会うのは初めてだから、何と言って話しかければいいのか見当もつかない。

とりあえず、宇布見を起こすときそうしていたように、眠っているそのロボットの頬に、そっと、震える手を触れてみる。

その瞬間、オメガは弾かれたように手を離し、後ずさった。

なめらかな頬はすでに、ひんやりと、冷たくなっていたのだ。

恐る恐るもう一度、手を伸ばす。何かの間違いであってほしいと祈りながら、かすかに触れてみる。

それでもそこに、生きている肌のぬくもりを感じ取ることは、できなかった。

——間に合わなかったんだ。

オメガは腰が抜けたように、コンクリートの冷たい床に座り込んだ。

——やっと、会えたと思ったのに。

もう、立ち上がる力すら、湧いてこなかった。そのまま、砂でざらつくコンクリートの上

に、オメガはゆっくりと倒れ込む。
見る間に、息が苦しくなってくる。冷や汗がにじんで、動悸がひどくなる。例の発作が起こりかけているのだ。どこからともなく、あの奇妙な声が、近づいてくるのが分かる。今あの声に追いつかれたら、たぶんもう、二度と逃げ出せない……！
溺れかけた者が船べりに手を伸ばすように、オメガはとっさに、目の前のカウンターにすがりついた。
死んでしまった翠の髪のロボットは、カウンターの向こうの椅子に腰掛けたまま、ゆったりと頬杖をついて、目をつむっている。白く透き通るような頬に浮かぶ、幸福そうな笑み。まるで暖かい陽射しの中で、昼寝でもしているようだ。
しばらくその顔を眺めているうちに、不思議と、心が静まってきた。胸ポケットのガラス玉に触れたときのような、安らいだ気分だ。
――どうしてこんなに、幸せそうに見えるんだろう。
それがオメガには不思議だった。
こんなに寂しい場所で、誰にも気づかれないまま、このロボットはうち捨てられて、静かに死んでいったのに違いない。
それなのに、どうして微笑んでいるんだろう。
訊きたいことが、たくさんあった。コーヒーの種から、飲み物を作る方法も、どうしてずっ

に、オメガはゆっくりと倒れ込む。

見る間に、息が苦しくなってくる。冷や汗がにじんで、動悸がひどくなる。例の発作が起こりかけているのだ。どこからともなく、あの奇妙な声が、近づいてくるのが分かる。今あの声に追いつかれたら、たぶんもう、二度と逃げ出せない……！

溺れかけた者が船べりに手を伸ばすように、オメガはとっさに、目の前のカウンターにすがりついた。

死んでしまった翠の髪のロボットは、カウンターの向こうの椅子に腰掛けたまま、ゆったりと頬杖をついて、目をつむっている。白く透き通るような頬に浮かぶ、幸福そうな笑み。まるで暖かい陽射しの中で、昼寝でもしているようだ。

しばらくその顔を眺めているうちに、不思議と、心が静まってきた。胸ポケットのガラス玉に触れたときのような、安らいだ気分だ。

——どうしてこんなに、幸せそうに見えるんだろう。

それがオメガには不思議だった。

こんなに寂しい場所で、誰にも気づかれないまま、このロボットはうち捨てられて、静かに死んでいったのに違いない。

それなのに、どうして微笑んでいるんだろう。

訊きたいことが、たくさんあった。コーヒーの種から、飲み物を作る方法も、どうしてずっ

と、旅人を待ち続けていたのかも……。

微笑んで眠るロボットの、ほとんど赤みを失った唇。

柔らかな陽射しの中で沈黙している口元を、じっと眺めているうちに、ふと、思い出すことがあった。

いつだったか、宇布見が教えてくれたのだ。ロボットには、互いの記憶や思いを鮮やかに伝えあうためのインターフェースがある。相手のことを知りたければ、ただ手をつなぎ、舌先を触れ合わせるだけでいいのだと。

――もしも、彼女の中の記憶装置が無事なら……。

オメガはおずおずと手を伸ばして、カウンターの上に投げ出された彼女の左手を、そっと握った。唇の位置を合わせ、舌先を滑り込ませる。

とたんに、ぐん、と眉間を押されるような感覚が返ってきた。

――彼女の記憶は、生きている！

オメガの胸の内に、希望がふくらみはじめた。五十年か、百年か、遠い昔の世界に生きた彼女の姿を、この目で見ることができるかもしれない。

唐突に、全身が底のない海へ墜ちていくような感覚に襲われて、オメガは身を縮めた。意識だけが体を離れて、彼女の中のはるか深い場所へと、濃い霧の中を、果てしなく降りてゆく。

やがて、分厚い雲の中から抜け出したように、突然視界が晴れ渡った。はるかに広がる一面

の青。海だ。さざ波立って所々銀色に輝きながら、瞳を刺すように鋭い色彩が、水晶体にあふれかえって、眼球の底から流れ込んでくる。

――こんなに鮮やかな色を、僕は知らない。

オメガは面食らった。ハママツで見た海は、いつだって重く沈んだ灰色だったのだ。これが、彼女の時代の海なのか、それとも、彼女の意識を通して見るから、鮮やかに映るのか。

海の中に、頼りなげに飛び出した岬が見える。燃え上がるような緑の絨毯の中に、白い屋根が鋭く輝いて、目を惹いた。記憶の主がそこにいるのだと、直感で分かる。

オメガの意識は細い光の矢になって、その屋根の下へと、吸い込まれていった。

1　夕凪の色

テラスの端に立てた風見魚が、海風を食んで、勢いよくプロペラを回している。

店の窓越しにこうして見上げていると、さかなは、白い羊雲の合間をぬって、空の青の中を泳いでいくみたいだ。

風見『鶏』を作ろうと言い出したのは、確か、オーナーだった。好きなように描いてごらんと、板切れと一緒に鉛筆を渡された私は、なぜか鶏ではなくて、空飛ぶ『さかな』の絵を描いたのだ。オーナーはひとしきり笑って、それから私の描いたとおりに、板を削りだし、プロペラと支柱をつけて、風見魚を作ってくれた。

それももう、ずいぶん昔のことだ。

窓の外から、暖かな陽射しの差し込む店内へ、視線を戻した。南に向いた大きな窓が二つ。そのかたわらに、一つずつ並んだテーブル。カウンターの向こうの小さなキッチン。正面に入り口、奥にはトイレ。たったそれだけの、こぢんまりとした喫茶店。

風見魚と一緒に、オーナーが私に預けていった大切なもの、私の、居場所。カフェ・アルファだ。

オーナーは、――お店だけじゃなく、ロボットである私のオーナー、という意味でもあるのだけど――、お店を私に任せて、ふらりと旅に出たきり、もう何度も季節がめぐったのに、未だに帰ってこない。今頃どこで、何をしているのやら。

母屋の脇に建て増した、このささやかな空間は、初めのうち物置だったのだけど、私がここへ来る少し前に、オーナーが自分の手で改装して、喫茶店にしたらしい。お店とはいっても、お客さんは、一日に一組あるかないかで、私はほとんどの時間を、空を眺めたり、木の細工物を作ったりして、のんびり過ごしている。大きな街道からはずいぶん離れた、こんなに人気のない場所に、オーナーはどうしてカフェなんか作ったんだろう。時々、そんな疑問が湧いてくる。

仕事らしい仕事なんてほとんどないけれど、唯一大変なのは、コーヒー豆を確保すること、かもしれない。コーヒー豆なんて贅沢品は、にぎやかな市場のある南町まで出るか、そこになければ、この岬からずっとずっと北東の方にある大きな町、ヨコハマまで買い出しに行かなければ手に入らないのだ。

向こうの雑貨屋で、買い出しのついでに手に入れてきた新しい地図を、テーブルの上に広げてみた。古地図の上から、沈んだ土地を青い絵の具で塗りつぶしてある。

読み書きを勉強していた頃のこと、古い地図をなぞりながら『横浜』と書いてみせたら、オーナーが静かに、かぶりを振ったのを思い出した。

——その町は、海の底へ沈んで、消えたんだ。今は、沈まなかった丘の上あたりが、新しい町になっているんだよ。

そう言ってオーナーは、私が書いた漢字を二重線で消して、かたわらに「ヨコハマ」と、カタカナで書き入れたのだ。

オーナーが子供の頃、海はもっと遠いところにあったらしいのだけど、それがどういうわけかどんどん地面を呑み込んでいったのだという。今残っているのは、昔、丘や山だった高台だけだ。ヨコハマへ向かう街道も、海岸に近いものはみんな、沈んで消えてしまった。通れるのは、尾根筋の山道だけ。

昨日走ったばかりの帰り道を、そっと人差し指でたどってみる。指先からたちまち蘇ってくる、道のでこぼこ、しょっぱくてぬるい、風の匂い。バイクと一緒になって、地上一メートルを滑っていく、空飛ぶさかなみたいな、あの感覚。

ドアに吊したカウベルの音で、我に返った。今日初めてのお客さんだ。

「いらっしゃいませ！」

半分開いたドアの向こうから、ぬっと、白髪交じりのボサボサ頭が覗く。

「よう、また、来たよ」

近所の丘の上の、ガススタンドのおじさんだ。お互いに商売が暇なものだから、しょっちゅう行き来しているうちに、すっかり顔なじみになってしまった。いつも手ぶらなのに、今日は

珍しく、破れかけのナップザックを肩に引っかけている。

「なんですか？　それ」

私が尋ねると、おじさんは日に灼けてくしゃくしゃになった顔で、ヒヒヒ、と笑ってみせた。

「おう、あとでなぁ」

「もう、もったいつけないでくださいよお」

テーブル席に着いたおじさんと入れ違いに、私はカウンターの裏に回った。初めてこのキッチンに立った日から、もう何百杯淹れたんだろう。コーヒーなら目をつむっていたって出せる自信がある。

手早くポットにお湯を沸かし、朝のうちに煎っておいた豆を、ミルでゴリゴリ挽き砕く。サーバーの上にセットしたドリッパーに布を敷いて、少し油を含んだコーヒーの粉を、零さないようにするりと流し込み、ゆすって表面をならす。お湯は沸騰のほんの少し手前。すかさず火を止めてポットを上げると、注ぎ口から細く、透明な糸をつむぐように、そっと湯を落とす。ふくらみながら、蟹みたいに泡を吹く粉。もう一度、お湯の糸を一回し。むくむくと立つ泡がドリッパーからあふれそうになる。その次の一回しで、サーバーの底へゆっくりと落ちはじめる、黒い滴。闇夜に沈む海のような漆黒の液体が、ゆっくり、ゆっくりと溜まっていく。

豆の煎り加減、お湯の沸かし加減。それからお湯を注ぐときには決して、焦らないこと。何

もかも、オーナーが教えてくれたことだ。大切なのは、一つ一つの手順を慈しみながら、じっくり楽しむことだよと言われたのを、なんだか妙にはっきりと憶えている。したたるコーヒーの滴を見つめている静かな時間が、今でもこんなに楽しいのは、そのせいだろうか。

二人分のコーヒーをお盆にのせて、私はおじさんの向かい側に陣取った。お客さんが一人のときは、相手が誰でも、一緒にコーヒーを楽しむことにしている。初めてのお客さんにはちょっと驚かれるけれど、断られたことは、まだ一度もない。たぶん、誰かとたわいもない世間話をすることが、贅沢になってしまった今だからなのだろうけど。

「どうです？」

おじさんがゆっくりと、カップを傾ける。午後の日の差し入ってくる、しんと静まりかえったカフェの中に、波音の合間をぬって、間の抜けたトンビの声が、かすかに響き入ってくる。

渋紙色の顔を覗き込むと、にやり、と、開いているのか閉じているのか分からない細い目が、笑った。

「旨え」

「やった！」

「けど、ちっとばかし酸っぺえかな」

おじさんの舌はごまかせない。実は私も、そんな気がしていた。

「それ、別の農場の豆なんです。前のところ、作るの止めちゃったらしくて」

ヨコハマくんだりまで出張っても、豆の供給はとても不安定だ。そもそも『コーヒーモドキ』は、トマトにそっくりなあの赤い実を食べるためのもの。種なんかをわざわざ集めて乾燥させ、飲料用にした『コーヒー豆』は、農家の人たちが手の空いたときに作る贅沢品だ。品質も出回る量も一定しない。オーナー曰く、世界がこんなふうになる前には、遠い海の向こうで、食用ではない、本物のコーヒーが栽培されていたらしい。陸づたいに隣の国へ行くのも一苦労の今ではもう、海の果ての国との交易なんて、すっかり夢物語になってしまったけれど。

「もう少し、深煎りにした方がいいのかなぁ……」

何度も味を確かめながら考え込んでいると、おじさんがいきなり、ぽん、と膝を叩いてつぶやいた。

「いけねぇ、忘れるとこだった」

やにわに振り向くと、椅子の背もたれに引っかけたナップザックを、ごそごそ引っ張り出す。

「あ、それ、何なんです？」

「見てのお楽しみだよ」

半分くらいバカになったファスナーのすき間から出てきたのは、ちょうど両手にのるくらいの、少し横長の段ボール箱だった。

「おととい、南町の集荷場へ行ったら、アルファさん宛の荷物が届いてたからよ。受け取って

きたわ」
「すみません、わざわざ。……誰からなんでしょうね？」
「伝票見たら送り主の欄に初瀬野ってあったからな、初瀬野先生じゃねえか」
「オーナーが!?」
気づいたら、一も二もなくテーブルの上の包みに飛びついていた。おじさんが面食らって飛び退く。
「あわてねえでも荷物は逃げねえよ……。まぁ、ゆっくし見んだ」
ゆっくり見ろ、なんて、無茶な話だ。かけてある紐を夢中でほどいて、湿気のせいで少しへたった段ボールのフタをいそいそと開ける。
幾重にも詰めてある藁半紙の中から出てきたのは、見たこともない、片手にのるほどの小さな器械だった。
すべすべとして白い素材は、プラスチックだろうか。なめらかに丸っこいフォルムが、手のひらにしっくりとなじむ。先端にあるまん丸い突起が気になっていじっていると、突然カバーがぱちんと開いて、レンズのようなものが現れた。
「……カメラ？」
「アルファさんよぉ、これ」
おじさんが箱の底から取り出したのは、藁半紙を束ねてホッチキスで留めただけの冊子だっ

た。表紙には「Aの1・取扱説明書」と書いてある。製造番号にしては、ずいぶんシンプルだ。
「もう、なんでお土産がカメラなんだろう。変な人ですよね」
口ではそう言いながら、どうにも笑いが止まらない。オーナーからのプレゼントなんて、いったい何年ぶりだろう。
説明書どおりに付属のコードを本体に差して、反対の端を口にくわえる。舌の先の端子でコードに触れると、とたんにカメラを通した景色が私の中に流れ込んできた。自分の目で見ている景色と混ざって、頭がクラクラする。あわてて両目を閉じた。
カメラの視点は、私の腕の先にある。手を動かすと、視界も揺れる。ぶうん、ぶうん、と腕を振り回すと、小型飛行機にでもなったような気分で部屋の中を飛び回れる。たぶん私の仕草があんまり子供じみていたんだろう、肩を揺すって笑っているおじさんの表情に狙いを定めて、シャッターを押してみた。ちゅん、と小鳥のさえずるような音がして、窓際の席でコーヒーカップを手に、少し戸惑ったようなおじさんの像が、わずかの間、固定される。
「たぶん、撮れた、かな？」
「そのレンズよぉ……」
私の声には答えずに、おじさんがつぶやいた。
「アルファさんの目にそっくりだな」

えっ？　とコードをはずして両目を開くと、カメラを自分の方に向けた。自分の顔なんてそうまじまじと見ることはないから気づかなかったけれど、言われてみれば確かに、レンズは私の目にそっくりだ。むらさき色の私の目玉と、カメラの中の藍色の目玉。そっくりというより、まるっきり同じものに見える。

　少し、怖いような気がした。自分のとそっくりな目玉が、ぽつんと一つきりで機械にはめ込まれているのは、とても妙な感じだ。

「それでよ。どうやって写真、見るんだ」

「ああ、そうですね。何に出力するのかな」

　取扱説明書のページを行ったり来たりして、撮ったものを現像する方法を探した。けれど、どこにもそれらしい項目はない。

「私はコードをくわえれば撮った写真を見られるんだけど……」

「あんだえー。アルファさんしか見られねえのかよ。妙なカメラだなあ」

　おじさんの、ちょっと不機嫌そうな声。私は吹き出しそうになるのを、あわててこらえた。おじさんのしゃべり方は、オーナーが教えてくれた言葉とは微妙に違っていて、面白い。この土地独特のものなんだそうだ。

「ほんと、妙ですよねぇ？　みんなで見られなきゃ意味がないのに」

　何気なく説明書を裏返してみて、あっ、と、小さく声を上げる。

　よく見れば、裏表紙だけがこっそり二つ折りになっていて、見返しに小さく、『アルファへ』と宛名書きがあった。ここだけ、オーナーの字だ。

「これ……、もしかして、手紙？」

　カメラをゆっくりと、箱に戻す。手紙だ、と気付いたとたん、辺りがほんのり、明るくなった。少し、瞳孔が開いたんだろう。私の瞳は、ヒトのものより、ちょっと大げさに動くらしい。猫みたいだと、オーナーが笑っていたっけ。私は、その生き物を知らないけれど。

　そっと、折り畳まれたページに指をかける。

「ちいっと、テラスに出てみんわ」

　おじさんはカップを片手に、さりげなく出ていった。私の目は、藁半紙の上に鉛筆で刻まれた懐かしい文字に、釘付けになる。ハネのはっきりした、右上がりの大きな字。

　――アルファへ。元気でやっているか。

　オーナーの、少しくぐもって、穏やかな声音が、とたんに蘇ってくる。ふっと、胸の奥に、温かいものが込み上げる感覚。

　――しばらくは、帰らないと思う。

　予想はしていたけれど、実際にそう言われてみると、たった今まで温まっていた胸の辺りに、ぽっかりと穴を開けられたような気分になる。

　――だから、気にせずに外へ出て、まわりを見て歩くことを勧める。長い年月を生きてゆく

君にとっては、十年も一日もさして違うことはないのかもしれないが、それでもいつか、懐かしく思う事柄もできるだろう……。
「懐かしいことくらい、ちゃんと、あるもん……」
オーナーは今でも、私のことを、昨日あったことは忘れちゃうような、幼いロボットだと思ってるんだろう。今の私を知らないんだから、仕方のないことだけど。苦笑して頬杖をついた拍子に、ふと、指先が耳元に触れた。赤い涙形のイヤリングが、弾かれて揺れる感触が伝わってくる。この家に着いた朝、一番はじめに、オーナーが私にくれた物。
カフェの制服も、髪を束ねる黄色いリボンも、コーヒーを淹れる道具の一切合切、何もかも、オーナーの手の触れなかったものはない。私は、オーナーの残していった気配の中で、暮らしてる。
だから、折に触れて思い出す。こめかみ辺りに白髪の交じった、豊かな髪のこと。大きいけれどどこか繊細な、温かい両手のこと。それから、凪の海のように静かな、両の瞳のこと。
何もかもまだ鮮やかに思い出せるのに、その人だけがいない。
すっかり放心して、心が宛もなくさまよい出しそうになったとたん、ゴン、ゴン！　とガラスを叩かれる音で、頭をはたかれたみたいに我に返った。窓の向こう、テラスにいるおじさんが、西の方を指差して、出てこい、と手招きしている。
カップを持って、いったん玄関を出てから、テラスの階段を上がった。

おじさんは煙草を吹かしながら、じっと西の空を見ていた。淡い水色の空を背景に、一面に広がる刷毛ではいたような薄雲が、淡い橙色や桃色に染まって、ゆっくりと流れていく。さやかな風に、夕凪の気配。夕空と同じ色に染まった海を挟んで、対岸には大きく欠けた富士山の影が、淡く浮かび上がっている。
「きれい……」
振り向いたおじさんが、ふっと笑った。その拍子に、小さな煙の輪っかが漂い出す。
「なんか、おかしいですか？」
「いや、今日初めて見ましたって顔しててんから。見飽きるほど見たべ」
「昨日のとは、違いますもん」
おじさんの隣の椅子を引いた。潮風のせいか、テラスの椅子も、そろそろ傷みはじめている。
「あんまし分かんねえけど、そんなもんかよ」
「毎日、少しずつ違うんですよ」
首をひねりながらしばらく夕空を眺めていたおじさんは、やがて諦めたように、ちびた煙草をもみ消した。すかさず二本目を取り出して、火をつける。
「ここは、落ち着く」
ゆっくりと煙を吐き出しながら、おじさんがしみじみとつぶやく。

「私も、落ち着くんです。おじさんの煙草の匂い」
へぇ、とおじさんは笑って、すっかり黄色く染まった陶器の灰皿に、無造作に灰を落とす。
「煙草の匂いなんてのは、昔はずいぶん嫌われたもんだけどな」
「でも私、この匂いがすると、おじさんがいるんだって、安心します」
「そうかよお」
ちょっと照れたような返事の後に、ゆっくりと降りてくる、穏やかな沈黙。
おじさんはしばらく西の空を眺めてから、ぽつりとつぶやく。
「初瀬野先生、ここを出て、ずいぶんになるな」
「今頃、どこで、何してるんでしょうね」
「寂しかねえか」
ぱたぱたと灰を落としながら、何気なくおじさんは言った。手紙を手に、ぼうっとしていたところを、やっぱり見られてたんだろうか。
「全然って言ったら、嘘ですけど。でも……」
すっかりぬるくなったコーヒーを一口飲んで、私は言葉をつないだ。
「私、ロボットでよかったと思ってます」
「あんでよ？」
「だって、いくらでも待ってられますから」

おじさんの視線が、ふと、私の左手に止まった。
「宝物だな」
「え？」
「それ、その、カメラ」
言われて初めて気がついた。私はいつの間にかさっきのカメラを持ち出して、片手にしっかり握りしめていたのだ。
「ただの、カメラですよ」
「いや、宝物だ」
にんまりと、おじさんが笑う。照れくさくて、私も笑う。静かに傾いてゆく太陽の光が、真っ白なカメラのボディを、ほんのりと暖かい茜色に染め上げていた。

優しい夕暮れの光景が、灰色の靄の中へ、ひっそりと消えていく。
宙を舞うように軽やかだった意識が、体の中へ戻ってくるのが分かった。とたんにずっしりと、体の重たさを感じる。
オメガはゆっくりとまぶたを開き、アルファさん、と呼ばれていた目の前の女ロボットか

ら、唇を離した。

いったい、何を見てきたのだろう。オメガはじっくりと、思い返してみる。

数は少ないが、あちこちに点在しているらしい人々。ハママツのような大きな町が、他にも存在したようだ。人々にはまだ、嗜好品（しこうひん）を楽しむ余裕があった。あの『煙草』や『コーヒー』が、たぶんそうだろう。温かに輝く楽園のような時が、ゆったりと、人々の間を流れてゆく。

夕凪の時代。

いつか、宇布見がそう呼んでいた、『人の夜』が訪れる前の、幸福な時代。自分が見たのは、その頃の光景ではないだろうか。

宇布見が折に触れてぽつりぽつりと語ってくれたこの世界の過去を、オメガはぼんやりと思い出した。

いつとははっきり分からないが、ずいぶん昔のこと。今は『怒りの日』と呼ばれている、冬のある一日を境に、人口は劇的に減りはじめ、入れ違いに、海面は上がりはじめた。いったい何が原因だったのか、詳しいことは、何も伝わっていない。

地に満ちていた人間たちは、遠からず自分たちが滅びることを知った。パニックの末に無政府状態を引き起こして、不毛な殺し合いのあげく自滅した国が、西の方にはいくつもあったらしい。

けれども、オメガが生まれたしずおかの国や、かつて東の都と呼ばれたむさしの国、そしてかながわの国の辺りでは、混乱の時期を乗り越えて、人々は概ね（おおむ）、穏やかに消えていくことを選んだようだった。ハママツの町にはささやかながら、自動車やプロペラ機の工場が造られ、広場には市場が立ち、人々は荒れ地を開墾して芋や野菜を作りながら、多くを望まず、心平らかに、日々を淡々と生きたという。まるで、智慧（ちえ）の実に手を出す前の、原初の人類のように。

滅亡の手前に現れた、奇跡のような牧歌（パストラル）の日々。それが、夕凪の時代だ。

話を聞いたときには、到底信じられないと思った。けれども、今読み出した記憶の中には、確かに、オメガの知らない世界がある。世界を彩る鮮やかな色も、温かな空気も、まったく、オメガの触れたことがないものばかりだ。会話を交わす相手がいる世界。投げかけた言葉が受け止められて、柔らかに投げ返されてくる、そんな世界。

——もう一度、触れてみたい。

オメガはおずおずと、舌をつなぐ。灰色の靄の向こうに、何かが見えはじめる……。青々とした芝草に囲まれた、白いペンキ塗りの家。あのカフェを外から見ているのだ、とオメガは気づいた。足下にはいくつか、大きな水たまり。そこに映る自分の姿に、オメガは目を見張った。水たまりの前に立っているのは、アルファでもない、オメガでもない。見知らぬ少年だったのだ。

2　蒼い影

勇気を出して、ドアノブを回した。お腹の底から、思いっきり声を張り上げる。

「アルファ！　こんちは！」

窓際のテーブルで木の細工物をいじっていたアルファが、びくり！　と顔を上げた。

「なんだ、タカヒロかぁ……。もう、おどかさないでよ」

アルファはエプロンの紐を直しながら、カウンターの向こう側へ入っていった。じいちゃんと一緒に何度も来たことのある店だけど、今日はなんだか、緊張する。椅子を引いて座る、たったそれだけのことで、もうドキドキしてる。

「一人で来たの？　珍しいね」

僕はうなずいてみせる。そう、ここに僕一人で来るのは、今日が初めてだった。じいちゃんと来ると、僕はおまけ扱いで、アルファとはあんまりしゃべれない。今日こそはどうしても、一対一で話がしたかった。

「いつものヤツでいいかな？」

「メイポロなんかいらないよ。コーヒーを飲むんだ」

へえ！　とアルファはちょっと大げさに驚いてみせた。じいちゃんはまだ僕にコーヒーを飲ませてくれない。けれど、僕だってもう十歳だ。コーヒーぐらい飲めなきゃ情けない。甘ったるいメイポロの汁なんかくそくらえだ。

テーブルには、アルファの大好きな、さかな形をした小さな彫刻。またキーホルダーでも作ったんだろうか。削りかすを無造作に払ってテーブルにコーヒーカップを置きながら、アルファは心配そうに僕の顔を覗き込む。

「タカヒロにはまだ、無理じゃないかな？」

「そんなことないよ」

僕は少しむっとして、ぐいっと一口、コーヒーを口に流し込んだ。とたんに、やめときゃよかった、と後悔で胸がいっぱいになる。苦いばっかりで、舌が痺れそうだ。みんなやたらと飲みたがるから、よっぽどおいしいもんだろうと思ってたのに。

「メイポロ混ぜれば、だいぶ飲みやすくなるよ。入れる？」

僕は渋々うなずいた。こうなるのが分かってたんだろう。アルファは甘いメイポロの汁をすぐに出してくれた。

シロップを注ぐ指先がほっそりとして、桜色の爪が陽射しに淡く光る。半袖のシャツから伸びた、白い腕の、なめらかさ。伏せた睫の長さ。ふいにこっちを見るむらさきの瞳の、澄んだ光。

アルファがこんなにきれいなのは、やっぱり、人間じゃないから、なんだろうか。
「何かついてる？」
僕はあわてて首を振った。見とれてる場合じゃない。今日はアルファに、訊かなきゃならないことがあるんだった。
「アルファ、あのね……」
「うん、何？」
「僕、怖いもの、見ちゃったんだ……」
ニコニコしてた顔が、いっぺんに引きつる。アルファは怖い話が苦手だってことぐらい、僕だって知ってる。でも、じいちゃんは村のおじさんたちと飲みに行ったっきり全然帰ってこないし、相談できる大人は、アルファしかいない。必死で頼み込んで、僕は話しはじめた。
「昨日の夕方、小網代の入り江で、アサリを取ってたんだ。他に誰もいなくって、すごくいっぱい取れた。ずーっと掘ってたから疲れちゃって、僕、うんと伸びをしたんだ。ちょっと離れた辺りで、魚の群れが動いて、水がサラサラって、光ったのが見えた。
そしたらいきなり、後ろの方からすごい速さで、何かがすっ飛んできた。それは、バシャーン！　バシャーン！　って、飛び石みたいに何度も波にぶつかって、さっき魚が光った辺りまで飛んでったんだ。とびきりでっかい水しぶきが上がったと思ったら、そいつはブーメランみ

たいに、波をけっ飛ばしながら戻ってった。
僕、びっくりして振り向いたんだ。そしたら、入り江の隅っこの、大亀岩の上に、四つん這いになった人がいて、こっちを見てた。女の人なのに、素っ裸なんだよ。アルファみたいに手も足も細くって、すらーっと長いんだ。顔も体も真っ黒に日焼けしてて、びしょびしょに濡れた髪の毛は、クロマツの皮みたいな濃い色で。
はじめは、人間なのかな、って思ったけど、よく見たら……。片っぽの手にボラを下げてて、中指と薬指が、エラにがっちり食い込んでるんだ。そこから、真っ赤な血が、ぼたぼた垂れてる。
その人、僕を見て、にやり、って笑ったんだ。そしたら、笑った口元から、尖った牙が二本、ギラリって、光ったのが見えて……。
ものすごく怖くなって、逃げて帰った。アサリも道具も全部忘れてきちゃったけど、それどころじゃないよ。心臓が破れそうなくらい走って、やっと家に着いたけど、追っかけてきてたらどうしようって、僕、怖くてたまらなかった。こんなときに限って、じいちゃんは全然帰ってこないし……。僕、布団をかぶって、朝までじっと隠れてたんだよ」
アルファはコーヒーカップを唇の手前で止めたまま、きょとん、と僕の顔を見つめていた。
「あれって、いったいなんだったんだろう……。アルファ、分かんない？」

「……ミサゴ、だ……」
アルファは目を丸くしたままつぶやいた。
「ミサゴ？」
アルファがうなずく。
「オーナーから、聞いたことがあるよ。小網代の入り江に、魚を捕って暮らす不思議な女の人が住んでるって。大人がいると出てこないんだけど、子供が一人でいると、姿を現すっていうの」
「子供を食べに来るの？」
タカヒロは怖がりだなぁ、と自分のことは棚に上げてアルファが笑った。腹が立つよりも、なんだか情けない気分になったのはどうしてだろう。
「子供が好きで、遊びに来るんだろうって、オーナーは言ってたよ。オーナーも、子供の頃に見たんだって」
「本当？」
「うん。オーナーはね、入り江でボラを釣ってたんだけど、魚籠（びく）に入れたお魚、全部持っていかれちゃったんだって。でも後で、ちゃんと返してくれたって言ってたよ。ミサゴは、いたずらが好きなんだね」
ふうん、とうなずきながら、僕は、なんだか変だぞ、と思った。

「ねえ、それって、いつの話？」
「うーん、オーナーがタカヒロぐらいの年の頃だから……。三十年、じゃなかった、四十年くらい前かな」
「やっぱり変だよ！　ミサゴって、アルファと同じくらいの年に見えたもん。そんなに前なら、きっとまだ、生まれてないよ！」
アルファはちょっと考えてから、困ったように笑った。
「ミサゴはたぶん、ずーっと、同じ姿のままなんだね」
「それ、どういうこと？　……ミサゴは、年をとらないの？」
たぶんね、とアルファがうなずく。
「そんなの、変だよ！」
アルファはくすっと吹き出した。
「変だって言われると、困っちゃうなぁ。タカヒロ、私も年を取らないんだよ」
僕は、ぽかん、と口を開いたまま、固まってしまった。
「だって私は、ロボットだもの。ロボットっていうのはね、ほとんど年を取らないんだよ。人の目には全然分からないくらい」
「……じゃ、じゃあ、アルファはずっと、今の姿のままなの？」
「そうだよ」

「十年経っても、二十年経っても？」
「う～ん、たぶんあんまり変わらないだろうなぁ」
「すごいや！　アルファはずっと……」
　きれいなまんまなんだ、と、口が滑りそうになって、あわてて言葉を呑み込んだ。
「べつに、すごくはないと思うけどなあ」
　アルファは照れくさそうに頭をかくと、ふっと、窓越しに空を見上げた。さっきまで真っ青だった空に、いつの間にか、入道雲が立ちはじめている。
「どうして？　アルファは何年経っても腰が曲がったりしないんだろ？　うちのじいちゃんみたいに、しわくちゃになったりしないんだろ？」
　アルファはちらっと横目で僕を見て、おどけたように笑う。ちょっとした表情がいちいち印象的で、僕はそのたびにわけもなくドキドキする。
「しわくちゃでも、腰が曲がってても、私はおじさんのことがちょっと羨ましいけどな。おじさんだけじゃなくて、タカヒロも、村の人たちも。みんなのことが、なんだか羨ましいみたいな気がするよ」
「なんで……？　村の人たち、いっつも肩が凝るとか腰が痛いとか、そんな話ばっかりしてるよ。年を取るのが羨ましいなんて、おかしいよ」
　アルファはふっと、優しい目で僕を見る。アルファがそんなふうに僕を見るから、僕はじー

んとして、ふんわりと、あったかいものに包まれたような気分になる。
「だってさ、たとえば、タカヒロやおじさんたちは、みんな、同じ船に乗ってるようなもんだから」
「同じ船って？」
　意味が分からなくて、僕はアルファの言葉をオウム返しにした。
「年を取る人たちはみんな、同じ時間の流れの上に乗ってる。腰が曲がっても痛くなっても、季節がめぐるたんびに、みんな一緒に、一つずつ年を積み重ねていく。……タカヒロはまだ子供だから、これからどんどん背が伸びて、いつか大人になるんだよね。それはたぶん、とっても素敵なことだよ」
　アルファは一口、コーヒーをすすると、少しかげってきた窓の外へ、視線を投げた。
「私は、今はたまたまみんなと一緒にいるけど、同じ時代の人だって言えるのかどうか、分からないしなぁ……。私は、みんなの船を、岸辺で眺めてるだけなのかもしれない」
　最後の方は、なんだかひとり言みたいだった。どう返事をしていいのか分からなくって、僕はメイポロが入ってた小さな容れ物を、手元でもじもじいじり回すばっかりだ。アルファはすらりとした腕を伸ばして、うつむいてた僕の頭をくしゃくしゃと撫でる。
「ごめん、ちょっと難しかったかな？」
　それはいつもどおりの、元気なアルファの声だったけれど、優しいむらさきの目が、どうし

てだか、一番星が出る頃の、寂しい空の色に見えて、なんだか胸に焼きついて離れなかった。

タカヒロだけでも、いつでもおいで、とアルファは手を振って送り出してくれた。テーブルの上にあった、削りたてホヤホヤの木のさかなを、お土産に持たせてくれる。夕立が近いから寄り道しちゃだめだよ、と釘を刺す声が、背中越しに聞こえて、僕は振り向かないまま手を振った。

でも僕は結局、帰り道の途中、入り江の見える丘の上で自転車を放り出して、こうして芝生に寝っ転がっているのだ。家に帰ると、手伝いしろだの勉強しろだの、じいちゃんがあれこれうるさいし、一人でいるうちに、どうしても、じっくり考えておきたいことがあったから。

——どうすれば、アルファを『同じ船』に乗せられるんだろう？

たとえば、どうすればボラじゃなくてスズキを釣れるか、とか、アサリをいっぺんにたくさん取る方法はないか、とか、そういうことなら、この丘に来ればいつだって、いいアイディアが閃いた。けれども、今日のはお手上げだ。そもそも、『同じ船に乗る』ってことがどういうことなのか、それが分からないんだから。アルファのさかなを握りしめたまま、僕は空に向かって思いっきりため息をつく。

ぽつんと、大粒の雨が鼻先を叩いて、僕ははっと起き上がった。気がつくと、空は一面、真っ黒な雲で埋まってる。しまった、と思った次の瞬間、もう雨は降り出してた。雨足はものす

ごく強い。入り江があっという間にかすんで見えなくなる。僕はあわてて自転車に飛び乗ると、がむしゃらにこいで雨宿りできそうな場所を探した。しばらく走ってやっと、煙幕みたいな雨の向こうに壊れかけの納屋が見えた。自転車ごと突っ込んで、びしょ濡れになった服を脱ぎ捨てる。山積みになった藁の中に座り込んで、膝を抱えて縮こまった。

冷たい風が吹き込んで、濡れた体を冷やしていく。冷蔵庫の中にいるみたいだ。雨も風も、どんどん強くなっていく。しばらくすると、ブルブル全身が震えだした。ちっとも歯の根が合わない。こんなに寒いのに頭だけがカッと熱くて、だんだん視界がぼやけてくる。

僕は倒れた自転車に引っかかったズボンのポケットから、アルファがくれたさかなを取り出して、握った。なんでもいいから、優しい誰かに、つながってるものが欲しかった。

「じいちゃん……」

つぶやいた声がかすれてた。もしもこのまま、雨が止まなくて、誰も見つけてくれなかったら……。

「アルファ……」

僕は目を閉じて、自分で自分を抱きしめた両腕に、顔を埋めた。そのとき。

突然、ふわりと柔らかい何かが、僕の体を包んだ。

人の肌のぬくもり。すらりと長い腕と足が、冷え切った僕の体を挟み込む。柔らかい頬が、僕の額にギュッと押しつけられる。びっくりして、僕は振り向いた。まさか本当に、アルファ

が……。

驚いて、声も出なかった。

ミサゴ。

震える僕を抱きしめているのは、ミサゴだった。ぽっかり口を開けたままの僕に、ミサゴはニッ、と笑いかけてくる。尖った牙が唇の端から覗いてるけれど、今はどうしてだか、全然怖いと思わない。

——オマエ、スキ。アソボウ。

頭の中にぼんやりと、声が響いたような気がした。ミサゴの言葉だろうか。

……いや、今のは『声』じゃない。ミサゴは口を閉じたまま笑ってる。唇は全然、動いてないじゃないか。

ミサゴの言葉は、耳で聞くものじゃなくて、頭の中に直接入ってくるものなんだ。

——オマエ、ナカマ。イッショ、コイ。

「どこに、行くんだよ」

喉が痛くって声が上手く出ない。返ってくる、ミサゴの言葉。

——ニンゲン、イナイ、トコロ。

こいつ、何言ってるんだ？　なんだか少しおかしくなる。

「僕だって、人間だよ」

——オマエ、コドモ。ニンゲン、チガウ。

「……えっ？」

——ニンゲン、キライ。ニンゲン、コワイ。コワイ、コワイ、コワイ……

ミサゴは『コワイ』って、そればっかり繰り返す。聞いてるうちに、僕もだんだん、何かが怖いような気分になってくる。まるでミサゴの考えてることが、うつっちゃったみたいだ。

「やめてよ、ミサゴ！　なんでもいいから、楽しい話をしてよ」

ミサゴの声が、ふっつり止んだ。柔らかな腕が、しっかり僕を抱きしめ直す。ミサゴは、僕の頭に、自分のおでこをぴたりとくっつけた。何か、とてもきれいなものが流れ込んでくる。

小網代の入り江の、夕暮れ。風が止んで、鏡みたいに静かになった水面に、夕焼け空が映って、淡い橙色や桃色が、クレパスを溶かしたみたいに流れ出す。優しい色、優しい景色。まだほんのりと暖かい岩場に寝転がって、時が止まったように静かな入り江を眺めている、その瞬間の、心の底から安らいだ気持ち。……なんて、心地いいんだろう。

全部、ミサゴが見せてくれてるんだ。

——タノシイ、トテモ。タノシイ、イツモ。

また、ミサゴの言葉が響いた。

——ダカラ、オマエ、コイ。

ミサゴの体から染み込んでくる、浮き浮きする感じ。頭が熱でぼんやりして、だんだんミサ

ゴの方に、引きずられそうになる。
けれどもそのとき、握りしめた拳の中の感触に、僕はハッと、夢から覚めたみたいな気分になった。
カフェの帰り際にもらった、アルファの、さかな。
じいちゃんやアルファの顔が、まぶたの裏にはっきりと映る。入れ違いに、ミサゴの見せる風景が、だんだんかすんで消えていく。
「だめだよ」
自分でもびっくりするくらいきっぱりと、僕は答えていた。
「……楽しそうだけどさ、一緒には、行けない」
そう答えた瞬間、僕の背中にくっついた、ミサゴの胸の辺りから、ふわり、と透き通った蒼い光が湧いてきて、僕を包んだ。真っ暗な納屋の中が、海の底みたいな色に染まる。
ミサゴの言葉は、もう何も感じられない。ただ、ひんやりとした寂しさだけが、水風船みたいに広がって、僕を包み込んでいる。ひとりぼっちの、かわいそうなミサゴ。ずっと、年を取らないままで、ただあの水辺で、季節が何度も繰り返すのを、たった一人で眺めてる……。
――私は、みんなの船を、岸辺で眺めてるだけなのかもしれない。
急に思い出したのは、ミサゴの言葉じゃなくて、アルファの声だった。そのとたんに、あんなに考えても分からなかった『同じ船』の意味が、やっと分かったような気がした。

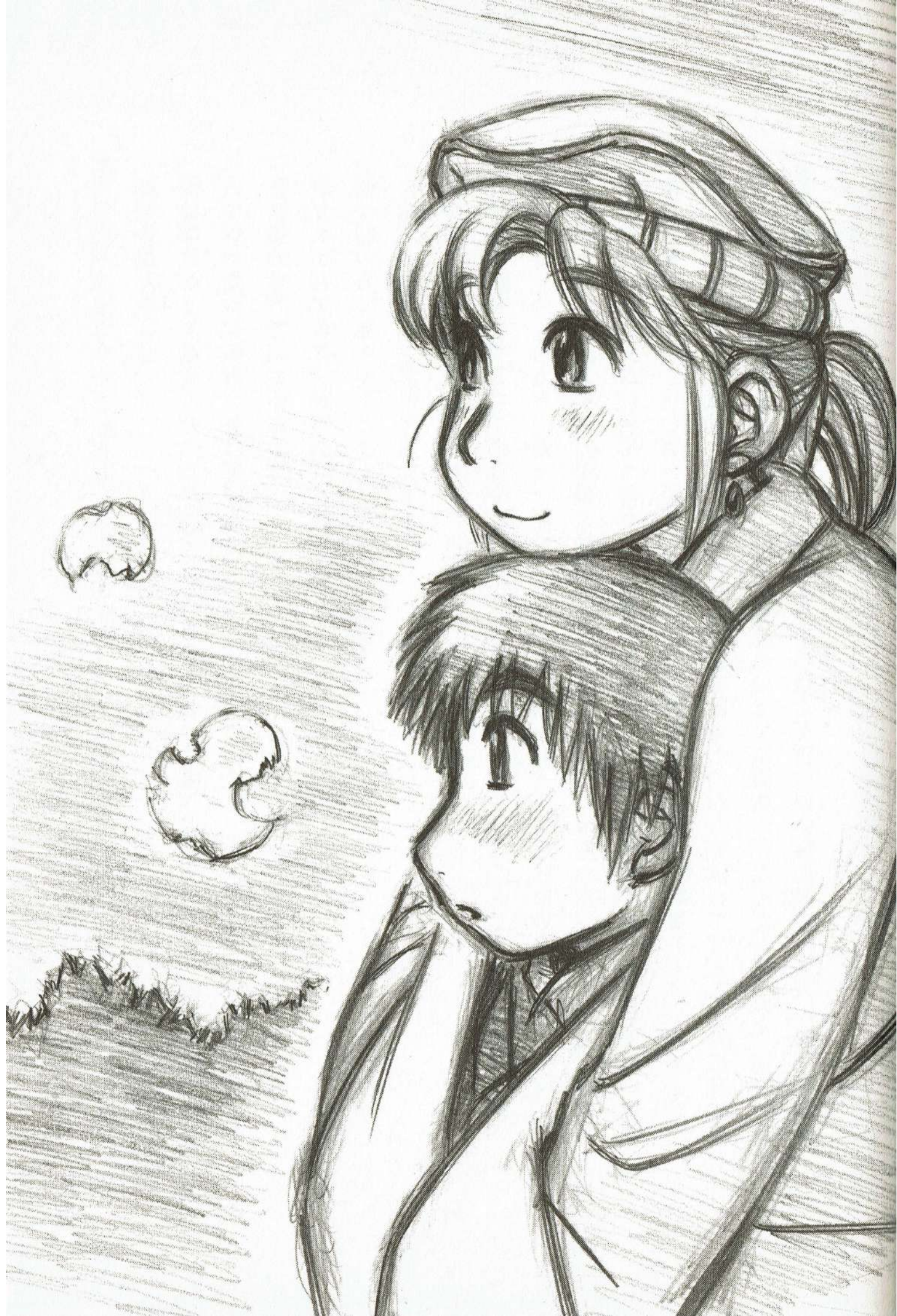
蒼い光が、少しずつ薄れていく。入れ違いに戻ってくる、ミサゴの柔らかなぬくもり。だんだん気が遠くなって、僕はすうっと、深い、深い眠りに落ちていく。

次の朝、納屋の藁に埋まってる僕を見つけてくれたのは、アルファだった。村の人たちが総出で、一晩中僕を捜してたらしい。道草を食ってるうちに降り込められた、って話したら、じいちゃんにはこっぴどく叱られたけど、あんな目に遭ったのに、風邪もひかずに済んだもんだから、みんなずいぶん驚いてた。
こっそり助けてくれたヤツがいたことは、僕だけの秘密だ。アルファにはどうしようか、少し迷ったけれど、やっぱり黙っておいた。
「おまたせー！」
アルファが手を振りながら、玄関から駆け出してきた。辺りはまだ暗い。満月がそろそろ、西へ傾きはじめてる。
ミサゴに出会った嵐の夜から、もう三ヵ月も経った。カフェのまわりを囲む木立が、ちらほら紅葉してるのは、寒くなって新年が来た合図だ。僕とアルファはこれから一緒に、東の岬へ『初日の出』を見に行くんだ。
「私は毎年見てるんだけどさ、急に連れてけなんて言うからビックリしたよ」
アルファがバイクのイグニッションキーを回した。耳を引っかくみたいなエンジンの音が、

波の音をすっかりかき消してしまう。
「急に見たくなったんだからしょうがないよ」
「生意気だなぁ」
アルファはけらけら笑いながら、僕の頭を軽くこづいた。
「上着、ジャンパーだけ？　コートがないと寒いよ」
そう言ってアルファは、首元のマフラーを、あったかそうなコートの襟に突っ込んだ。こんなに着ぶくれしなくちゃならないのは、たぶんこの季節の、この時間帯だけだ。
「コートなんか持ってねえもん。アルファで風避けるからいいよ」
「このぉ！」
アルファは僕のほっぺたをつかむと左右に思いっきり引っ張った。少しかじかんでた肌に、ジンとした感覚が戻ってくる。つねっていても叩いていても、アルファの指はどこか優しい。
僕もつられて笑い出してしまう。
さっそうとバイクにまたがるアルファに置いていかれないように、あわててリアシートに飛び乗った。毛布を丸めてバイクにくくりつけた即席のものだけど、それでもこれは、僕専用のシートだ。
「しっかり腕回してなよ！　飛ばされないようにね！」
「分かってるよ！」

気っぷのいいアルファの声が、冷たい空気の中にスパッと響く。次の瞬間、もうバイクは走り出してた。肌が切れるみたいな冷たい風。寒い季節でも日が当たればとたんに空気はぬるくなってしまうから、こんなに鋭い風に触るのは初めてだ。舗装のひび割れたところを通るたびに、バイクは釣り針にかかったボラみたいに大きく跳ねる。あわててしがみつく僕を笑ってるアルファの声が、エンジンの響きに重なって流れてくる。
そうして一時間も走った頃、道路の脇に、東へ向かう人影がポツリポツリと増えてきて、僕たちは東の岬の広場に着いた。
広場には五十〜六十人くらいの、びっくりするくらい大きな人だかりができてた。地元の人たちが炊き出しをしてくれてて、十人くらいの長い列ができてる。僕はあったかいメイポロをもらった。じいちゃんが子供の頃には、こんなとき『甘酒』というものが出て、それがものすごく旨かったらしいんだけど、炊き出しのおばあちゃんに聞いてみたら、そんなものはずいぶん前になくなっちゃったよ、と笑われた。
大きな焚き火を囲む輪に、アルファと一緒に入れてもらう。アルファの言ったとおり、Tシャツにジャンパーを引っかけただけじゃ寒かった。バイクに乗ってる間にすっかり冷え切った体は、なかなか暖まらない。
「どうした？　寒いの？」
腕組みしたままモゾモゾしてる僕を見て、アルファが言う。根性なしだと思われたみたい

で、ちょっと悔しい。
「そんなことないよ」
「ふうーん」
アルファの声が笑ってる。ほんとだってば！　と言い返そうとした瞬間、ふわりと、全身があったかいものに包まれた。
アルファが背中越しに、コートの前を開いて僕を抱きしめてくれたのだ。
「私、前が寒いからさ、しばらくこうしててもいいかな？」
頭の上から、アルファの声が降ってくる。
「……いいよ」
何の匂いだろう。アルファのコートの中から、ミカンの花みたいな、畑のライチみたいな、なんだかよく分からないけどすごく素敵な匂いが、ふんわり立ち上ってくる。ポケットに何か入ってるんだろうか。それとも、これがアルファの匂いなんだろうか。
背中に、布越しにでもはっきりと、アルファのぬくもりと、体の線が感じられる。全力疾走の後みたいに、心臓がバクバク打ちはじめる。アルファと一緒にいて、こんなふうに落ち着かない気分になるのは初めてだ。逃げ出したいような、それでいて、ずっとくっついていたいような。
東の空が、だんだん明るくなっていく。千葉大島の向こうに、きらりと光る何かが顔を出し

で、ちょっと悔しい。
「そんなことないよ」
「ふうーん」
アルファの声が笑ってる。ほんとだってば！　と言い返そうとした瞬間、ふわりと、全身があったかいものに包まれた。
アルファが背中越しに、コートの前を開いて僕を抱きしめてくれたのだ。
「私、前が寒いからさ、しばらくこうしててもいいかな？」
頭の上から、アルファの声が降ってくる。
「……いいよ」
何の匂いだろう。アルファのコートの中から、ミカンの花みたいな、畑のライチみたいな、なんだかよく分からないけどすごく素敵な匂いが、ふんわり立ち上ってくる。ポケットに何か入ってるんだろうか。それとも、これがアルファの匂いなんだろうか。
背中に、布越しにでもはっきりと、アルファのぬくもりと、体の線が感じられる。全力疾走の後みたいに、心臓がバクバク打ちはじめる。アルファと一緒にいて、こんなふうに落ち着かない気分になるのは初めてだ。逃げ出したいような、それでいて、ずっとくっついていたいような。
東の空が、だんだん明るくなっていく。千葉大島の向こうに、きらりと光る何かが顔を出し

た。まわりの人たちがざわざわと騒ぎ出す。

初日の出だ！

僕は朝日がよく見える方へ走り出そうとして、あわてて振り返ってアルファの手を取った。二人で岬の先っぽの方へ駆けていく。

「私は後ろの方でいいのに！」

走りながらアルファが叫ぶ。

「僕は前の方で見たいんだよ！」

「じゃぁ、タカヒロだけ行きなよ！」

「アルファと一緒に見たいんだってば！」

岬の先端辺りまできて、ようやく立ち止まった。僕はアルファの手をしっかりと握り直す。アルファが、今このとき、僕と一緒だったことを、時が経っても忘れないように。

太陽が少しずつ昇ってく。千葉大島の高い山並みに沿って、金色の光が燃え広がる。辺りを払うみたいな鋭い光が、何本も何本も、薄青い空を走ってく。まっすぐ見られないくらいに強烈な火の玉が、じりじりと姿を現して、暗かった世界を、光の色に染めてく。

ふと、アルファの方を見上げてみる。むらさきの瞳をしっかり見開いて、どんどん広がっていく光の景色を、力強く見つめてる。その眼差しはとても真剣で、なんだか切実で、何一つ見逃したくないと思ってるように見える。きりっと結んだ唇。強い風に煽られて、一筋だけなび

いてる翠の後れ毛。お祈りしてる人みたいな、静かで、きれいな横顔。なんだかいつものアルファじゃないみたいだ。この美しい人は、いったい誰なんだろう？

「どうしたの？」

ふいにアルファが、僕の方を振り向いた。ぽかんとアルファを見つめていた僕の顔がおかしかったのか、クスクスっと小さく笑う。

大丈夫、ここにいるのは、いつもどおりのアルファだ。

「ねえ、アルファ」

僕は思いきって、ずっと言おうと思っていたことを切り出した。

「何？」

「これから毎年、新年が来るたびに、初日の出を見に来ようよ。僕と一緒に」

「毎年？」

アルファはちょっと驚いたように、首をかしげてみせた。

「そう、毎年。これからも、ずっと」

――そうすれば、同じ船の上に乗っているんだと、少しでも、そんなふうに思えないだろうか？

僕は両足を踏んばって、じっとアルファを見上げた。たとえば初日の出みたいに、季節を、時を刻む何かを、いつも一緒に見ることができたら、それは、同じ時間の流れに乗っている、

というとことになるんじゃないだろうか。ミサゴに会ったあの嵐の晩に、ピンと来たアイディアだ。
　アルファは少しだけ黙って、それから朝日の方へ視線を戻した。ぽつりと、つぶやく声が聞こえる。
「そうだね、それもいいかもしれないね……」
　アルファの手が、僕の肩にかかる。ポン、と引き寄せられて、気づいたら、またアルファのコートの中にいた。香りに色があるとしたら、淡い珊瑚色に染まっていそうな、そんなアルファの匂い。
「ほら、しっかり見なよ！　今年の初日の出は、これ一回っきりだよ」
「当たり前じゃんか！」
　僕らはどちらからともなく笑い合う。気のせいか、僕を抱きしめるアルファの腕に、ほんの少し、力がこもったような気がした。

オメガはぼんやりとしたまま、舌のインターフェースをぎこちなくはずした。
　それでもしばらくは、全身を抱きしめられる感覚から、逃れることができない。

オメガはあれほど温かい感覚を知らなかった。創られてからただの一度も、味わったことがなかったのだ。
　なんて、心地いいんだろう。オメガはしみじみと味わい返す。自分以外の誰かの体温に、優しく包まれる感触。確かに守られているという感覚。揺るぎない安心感。
　たった一度でも、あんな安らぎを本当に味わうことができたとしたら、それはどんなに素晴らしいことだろうか。
　あの、タカヒロという少年が、羨ましい……。
　そう考えて、オメガははっと気付いた。
　アルファの記憶に潜ったはずなのに、どうして別の人の記憶を読んでしまったんだろう？
　アルファの中には、彼女自身が感じ取った情報だけが記録されているはずだ。他の誰かの記憶が入っていて、外から彼女を眺めているなんて、まるで理屈に合わない。
　それに、あのタカヒロという少年の目は、どこか特別だった、とオメガは思う。
　アルファを映すとき、タカヒロの目はいつも、オメガの目では捉えられない不思議な光を感じ取っていた。視力だけを比べれば、人間よりロボットの方がずっと優れている。けれど、タカヒロの目で見たときのアルファの輝きは、オメガには理解できない、機構の違いでも説明のしようがない代物だった。
　人間の目は、ロボットには見えない何かを映すことができるんだろうか？

オメガは閉じたまぶたの裏に、タカヒロの見たアルファの姿を描いてみる。きらきらとまぶしいような笑顔。太陽を見つめ続ける凛とした横顔。
それから鮮やかに蘇ってくる、あの、背中を抱きしめられる感覚。
胸の詰まるような想いに、ぐっと、つばを呑み込んでうつむいた。柔らかな、花のような香りと共に、暖かい体にしっかりと抱きしめられた瞬間、胸の奥からあふれ出してくる、日溜まりに眠るような心地よさ。
もう一度、あのぬくもりを感じてみたい。
切実にそう思って、オメガはアルファの左手を取る。接続しようとして、ふっと、ためらいに押し戻された。何が自分を押しとどめたのか分からないけれども、まるで眠り込んでいるように穏やかなその人の顔を目の前にすると、たちまちあの活き活きとした愛くるしい表情が蘇って、ただ唇に触れるというそれだけのことが、とても特別なことのように思えてくるのだ。おずおずと、繊細なガラスの器にでも触れるように、オメガはそっと、アルファに口づける。
接続して、ぼんやりと辺りに広がる記憶の霧の中を、オメガはあの輝く朝日を求めてさまよった。やがて遠くに、一点の鋭い光が見えてくる。
あれはきっと、初日の出の記憶に違いない。オメガの意識は光を目がけて、まっしぐらに進む。ようやく触れた、と思ったその瞬間、オメガは眼球を灼くような閃光に包まれて、地面に

叩きつけられた。

3　あたたかな手

いったい、何が起こったんだろう？

声も出せないまま、私は雨に打たれ続けていた。

体は、ひび割れた道路の上に、横向きに倒れている。シュゥゥ……、と蒸気の上がるかすかな音。体の下のアスファルトが、妙に熱いような気がする。

たしか、バイクで家へ帰る途中だったんだ、と思い出す。農道のど真ん中を走ってるときに、急に大粒の雨が降り出して、それから突然、あのすさまじい、光と音。

雨はこんなに強いのに、ちっとも、雨粒の冷たさを感じない。まるで自分の体が燃えているみたいだ。何が起こったのかは分からないけれど、ひどく打ちのめされたような感覚だけが残っていた。手の指一本、動かすこともできない。視界が、見る間にかすんでいく。

死ぬのかな、私。ロボットなのに。

唐突に、そんな言葉が頭に浮かんだ。

地面にくっつけたままの右耳に、車の音が響いてきた。だんだん、近づいてくる、ような、気がする……。

うう！　と野太い呻き声が響いたのにビックリして、目が覚めた。

「気がついたか！」

おじさんの声が、右から聞こえた。そっちへ体をひねろうとした瞬間、激痛が全身を貫く。またひどい呻き声が聞こえた。それでやっと、自分が呻いているんだと気づいた。全身を毛布にくるまれた私は、いつの間にか、おじさんの軽トラの助手席で揺られていたのだ。

「どうし……たんでしょう……私」

「雷にやられたんだよ。あんた、バイクに長い熊手差して走ってたべ。あれじゃ、ここに墜ちろって頼んでるようなもんだ。熊手、真っ二つだったぞ」

「どうして……」

私がやられたのが分かったのか、と尋ねたかったけれど、声が出ない。でもおじさんには通じたようだ。

「近くにどでかいのが墜ちたと思ったら、急に嫌な予感がしてな。あわててトラック出して、来てみたっけ、あんたが放り出されてんじゃんか。虫が知らせるってのはこういうのを言うんだかな」

「……ごめん……なさい」

「あやまることなんかねえよ」

軽トラが舗装の割れ目で跳ねるたび、体の左半分を激痛が走った。シャツはあちこち破れているらしい。柔らかい毛布の表面がほんの少し触れるだけで、叫び出したくなるような痛みが肌を焼く。どんなひどい怪我をしたのか、見当もつかない。もしも、自然に再生できないくらいひどいダメージがあったら、いったいどうすれば？　冷や汗が流れるのは、痛みのせいばかりではなかった。いくら丈夫なロボットだって、物理的な損傷が大きければ、当然死ぬ。この辺りに、治せる技師がいるのかどうか……。

そう考えたとたんに、また気が遠くなりはじめた。かたわらでおじさんが、あわててアクセルを踏み込む気配がする。車がひどく跳ねたけれど、私にはもう、呻く力さえ残っていなかった。

「患者はロボットなのね？」

落ち着いた女性の声が響いて、ぼんやりと意識が戻った。いったいどこに着いたのか、車はいつの間にか止まっている。

視線だけ左に動かすと、雨の中に、おじさんから傘をさしかけられて立っている、背の高い、白髪の女性が見えた。彼女の手が、私の左耳の後ろに伸びてくる。繊細な指が耳たぶの後ろの髪をかき分けて、何かを探り当て、複雑に動いた。たちまち、全身をおおっていたひどい痛みが、潮の引くように消えていく。

「痛覚を遮断したわ。もう痛くないでしょう？」

そう言ってその人は、どこか懐かしそうな目で私に微笑みかけた。おじさんが毛布に包んだままの私をそっと抱きかかえて運び出す。こぢんまりとした家屋は病院のようだった。玄関を上がってすぐ脇の部屋に入ると、診察台の上にそっと下ろされる。消毒用アルコールの臭いがつんと鼻を突いた。

「安心しな。頼りになる、いい先生だよ」

おじさんは私にそう囁くと、白衣に着替えてきた先生に何度も何度もお辞儀をして、廊下へ出ていった。白衣の先生はつかつかと私に近づくと、顔を寄せ、とても強く、それでいて静かな声で言った。

「大丈夫。必ず元どおりになるわ」

その人の、透き通るように優しい目を見た瞬間、ああ、自分は助かるんだ、と分かった。ありがとう、と声にならない声でつぶやくと、私はそのまま、安らいだ気分で眠りに落ちた。

目覚めて最初に目に入ったのは、大きな窓の向こうの青空だった。樫の木が、広げた枝をゆったりと差しかけて、木漏れ日がシーツの端に揺れている。

私は窓の脇のベッドに横たえられていた。薄い掛け布団の上に、左腕が出ている。指の先から肩口まで、すき間なく包帯を巻かれていた。左の脇や足の辺りにも、なんとなく違和感があ

る。
「あら、気がついたのね」
窓の反対側の戸口から、先生が入ってきた。きっちりとまとめ上げたシルバーグレーの髪を、白いカチューシャで留めている。しゃんと伸びた背筋、清潔そうな白衣、知性の塊のような人に見えるけれど、温かな眼差し（まなざ）と、目尻（めじり）や口元の優しげなシワが、かもし出す雰囲気をとても柔らかなものにしている。
「あなた、丸一日眠ってたのよ。気分はどう？」
私はほんの少しだけ微笑んで、大丈夫だと、小さくうなずいた。
「雷は体の外を通ってたから、中身は丸ごと大丈夫。でも、左側の皮膚はあちこちダメになってたから、新しく培養したのと取り替えたわ。あなたたちロボットの場合、張り替えた肌の境目はすぐに目立たなくなるから気にしないで。高速培養の皮膚は少しきめが粗く見えるかもしれないけど、それも一週間くらいで整ってくるから、心配はいらないわよ」
てきぱきと、それでいて穏やかな口調だった。死ぬんだと本気で思った昨日のことが、ずいぶん遠い出来事のように思える。
「ありがとう……、ございます」
「お礼はあのおっさんにね。あなたを見つけて、ここまで運んできてくれたんだから」
先生はそう言って、ベッド脇の丸椅子（まるいす）に腰を下ろした。

「ロボットだったから助かったのね。あなた、その体に生まれたことを感謝しなくちゃ。私やあのおっさんが同じ目に遭ったら、ひとたまりもないわよ」
冗談めかしてそう言うと、先生は笑った。私もつられて、ふふ、と頬（ほお）をゆるめる。と、顔のどこかにまだ皮膚の引きつれるような感覚があった。私がかすかに表情を歪（ゆが）めたのに気づいて、先生は私の顔を覗（のぞ）き込（こ）む。
その拍子に、先生の鎖骨の辺りに揺れている、小さな丸いペンダントが目に入った。古代の文字のような、踊る人間の姿のような、不思議なマークが描かれている。
「大丈夫、剥離（はくり）を起こしてるところはないわ。でもおかしいわね。痛覚はまだ切ってあるはずなんだけど」
「痛かったんじゃないんです。あの、少し引きつっただけですから……」
「ああ、よかった」
「私、知りませんでした。痛覚を遮断できるなんて」
「そりゃ、知らなくて当然よ。……あ、これからも自分でやろうなんて思っちゃダメよ。危ないんだから」
「しないですよ、そんなこと。でも先生は、どうして……」
どうして、痛覚の切り方なんかを知っていたんだろう。そもそも、どうしてロボットを治療できるんだろう。

尋ねようとしたとき、ごんごんと、無骨なノックの音が響いた。この叩き方は、たぶんおじさんだ。先生もピンと来たらしい。

「入っていいわよ」

開けっぱなしの扉の陰から、おじさんのずんぐりした影が、ぬっと覗く。何か言おうと動きかけた口が、私の姿を見たとたん、開いたままで固まってしまった。肌を張り替えただけでも、傍目にはずいぶんひどい怪我に見えるんだろう。

「ちょっと、怪我人の前であんまり辛気くさい顔するもんじゃないわよ」

先生がぴしゃりとたしなめる。すいません、と小声で謝るおじさんは、どういうわけかこの先生に頭が上がらないらしい。小さくなっているおじさんの姿がなんだかおかしくて、思わず、ふふ、と笑ってしまう。とたんにおじさんと目があった。あまり表情の変わらないおじさんの顔が、ほんの少しほころぶ。

「アルファさん、大丈夫なのかよ？」

「はい。雷で焦げた皮膚を取り替えただけだからって、先生が」

「ひ、皮膚を……」

よく日に灼けているから分かりにくいけれど、きっとおじさんは青ざめているんだろう。

「大丈夫よ、そんな大げさなことじゃないわ。そうね、あと五日もすれば退院かしら」

「へぇ、五日で……」

おじさんの声に、心からの、安堵の色があった。胸の奥の方に、何かしらジンと、温かいものが湧いてくる。

「あんか、要るもんあるか？」

「じゃあ、着替えをお願いできますか？　着てた服、焦げちゃったから……。勝手口が開いてますんで、入っちゃってください」

「わかった。まぁ、ゆっくり休むだ」

おじさんはそう言って、くるりと背を向けた。

「あっ、おじさん！」

「ん？」

「タカヒロには、黙っててくださいね」

振り向いたおじさんが、首をかしげる。

「そりゃ、構わねえけど。あんでまた……」

「タカヒロ、きっとすごく、心配するから」

そりゃ、そうかもなと、おじさんはうなずいた。また背中を向けて、扉に手をかける。

「あっ、おじさん！」

「またかよ。今度はあによ？」

おじさんは苦笑いして振り返る。

「ありがとう。……助けてくれて」
「あに、せえだかよー。礼は先生に言いな」
「でもあの……、私、おじさんにも先生にも、何もお返しできるものが……」
「あによー、いいじゃんかよー、べつによー」
おじさんは気が抜けたように笑った。
「こういうときゃ、あんた家族みてえなもんだしよー」
その言葉が、胸の真ん中に、柔らかく食い込んだような気がした。とたんに両目の奥と喉の辺りが、炭でも呑み込んだみたいに、ぐわっと熱くなる。
「遠慮はなしだ。じゃあな」
おじさんは先生に帽子を取って軽く挨拶すると、部屋を出ていった。古い木の廊下を、ゴツゴツとした足音が遠ざかっていく。
涙が、湧き出してきた。
あっ、と思ったときにはもう遅くて、止めようと思っても、後から後からあふれかえってくる。それはもう、零れる、なんて生やさしいものではなくて、まさに泉のように湧き出してくる、という言い方がぴったりなのだった。ひくっ！　と、喉が大きな音を立てる。
「あらあら」
清潔なガーゼを脇の棚から取り出すと、先生は優しく涙を拭ってくれた。

「どこか具合が悪い？　痛覚、戻ったりしてないわよね？」
私はしゃくりあげながら答える。
「違うんです。どこも痛くないんです。ただ……」
息苦しいので、思い切り鼻をすすった。
「私、何も持ってないのに……。先生も、おじさんも、こんなによくしてくれて……。私、嬉しくて」
そう言った瞬間、歯止めが利かなくなってしまった。思い切り大声をあげて泣き続ける。先生はあわてて、私の左目のすぐ下に脱脂綿をあてがった。私が落ち着くまで、時々涙を含んで重くなった脱脂綿を取り替えながら、ただじっと、待っていてくれる。
「すみません、そっちのほっぺた、張り替えたばかりなのに」
先生は小さく笑った。
「大丈夫よ、継ぎ目はちゃんとフィルムでカバーしてあるから。ねえ、そんなことより……」
先生が一瞬、言葉に詰まる。私はふと、先生を見上げた。先生は、なんでもない、というふうに、いつもどおりの笑顔を向けてくれる。
「どうしたんですか？」
「一つ、訊いてもいいかしら？」
「……何を、ですか？」

「あなた、そんなふうに、泣いたりすること、よくあるの？」
なんだそんなことか、と私は息をついた。
「はい、たまに……。一人で夕日を見てるときとか、楽器を弾いてるときなんかに、ふっと、泣きたくなったりします。でも、こんな感じでわあわあ泣いたのは、初めてなんですけど」
「……そう」
「あの、もう大丈夫ですから。ほんとにすみませんでした」
「あら、いいのよ、これくらい。でも落ち着いたのなら、もう行くわね」
先生は椅子から立ち上がると、ガーゼや脱脂綿を手際よく棚に片づけて、戸口に向かった。扉に手をかけざま、振り向いておどけた口調で言う。
「また泣きたくなったら、声をかけてちょうだい」
私は笑った。扉が静かに閉じられる。
これは私の気のせいかもしれないけれど、私が泣くことを知ったとき、先生はほんの少しだけ、驚いていたようだった。理由はまるで、分からないのだけど。

それから数日後の、よく晴れた昼下がり。
先生の予告どおりに、私は退院した。別れ際、お礼のつもりで、小さなさかなのキーホルダーをプレゼントしたときの先生の驚きようは、なかなかの見物だった。実を言うと、張り替え

た肌はすぐになじんでしまい、私はベッドの上ですっかり退屈していたので、おじさんに差し入れてもらった木切れや道具を使って、こっそり先生への贈り物を作っていたのだ。先生は目を輝かせて私のさかなをためつすがめつ眺めると、なんだか言いようのないような優しい笑みを浮かべて、私をそっと抱きしめた。背中に当たった手のひらから、心地(ここち)よい何かが流れてくるような感覚。きっとお医者さんの手には、目には見えない不思議な力があるのだ、と思う。
おじさんの軽トラが玄関下に止まる。降りてきたおじさんに駆け寄って、私は力一杯、ちょっと曲がった広い背中を抱きしめる。顔を真っ赤にして照れるおじさんの姿に吹き出した先生の笑い声が、キラキラと降ってくる。おじさんは何度も何度も、先生に頭を下げてお礼を言っていた。助けてもらったのは私なのに。
おじさんが軽トラのエンジンをかける。私は助手席から先生に手を振る。先生も振り返してくれる。
軽トラが動き出す。病院が後ろへ遠ざかる。私は窓から身を乗り出して右手を振った。先生はずっとトラックを見送っている。
「また、遊びに来ますね！」
私は叫んだ。先生が小さくうなずくのが見える。
カーブを曲がって、先生の病院が完全に見えなくなるまで、私は手を振り続けた。先生も、胸の前で小さく手を振り続けていたのを、私のロボットの目は、ちゃんと捉(とら)えていた。

たった今、さようならの挨拶をしたばかりなのに、もう先生が懐かしくて、次に会える日が、待ち遠しくてたまらない。先生の方でも、同じように思ってくれていることが、なぜだか胸に響くように、確かに伝わってくるのが分かった。

接続が途切れた瞬間、左半身の痛みが鮮やかに蘇って、オメガは椅子から転がり落ちた。落雷の瞬間にアルファが感じた、呻くことさえできなくなるような痛みを、オメガもまた、かぶってしまった。それは、オメガにとっては幻の経験で、夕凪の記憶の中でアルファが癒えていくうちに、自然と消えていくはずだったのだ。それなのに、目覚めてみれば、どういうわけか、意識ではなくて肉体の方に、痛みの記憶がしぶとく残っている。

この痛みは何だろう、とうずくまって考え込むうちに、鋭くフラッシュバックする光景があった。

オメガ自身の、事故の記憶だ。

ハママツで宇布見と暮らしていた頃、宇布見に食べさせる魚を釣りに行こうとしたオメガは、近道の崖を降りている最中に足を滑らせ、岩場に叩きつけられたのだ。意識が戻ったとき、左腕が潰れてしまっていることに気がついた。あまりの痛みに、身動き一つできない。満

潮は刻々と迫ってくる。それなのに、壊れた人形のように投げ出されたまま、じりじりと潮が満ちてくるのを、ただ見ていることしかできなかった。

――今感じているのは、あのときの痛みだ。

それに気付いたとたん、嘘のように幻痛は消えた。

オメガは左腕をさすりながら、一つ、大きな息をつく。

あの事故のあと一時間ほど経って、宇布見はやっと、オメガを捜しに来た。担いで家に戻り、壊れたところを直して、「二度とこんな面倒を起こすな」と言った。気遣うような言葉は何もなかったけれど、それが当たり前なのだと思っていた。そもそもそんな目に遭ったときにかけてもらえる言葉があることを、オメガは知らなかったのだ。

――でも、アルファは全然違う……。

いったいどうして、アルファの記憶の中の世界と、自分が現実に生きてきた世界は、こんなにも違っているのだろう？　同じような目に遭っているのに、どうしてアルファだけが、あんなふうに優しくしてもらえるのだろう？

――どこか、僕に悪いところが、あったんだろうか……。

自分の記憶を振り返るとき、きまって、オメガの胸の奥深いところで、鋭く、痛みを放つものがある。それがなんなのか、正体はまるで分からないのだけれど。

オメガはゆっくりと、冷たい床の上に起き上がった。頬杖をついたまま息絶えた、幸福そう

な一体のロボット。
彼女の中に潜れば、まず間違いなく、幸せな思い出を引き当てられる。落雷みたいなひどい出来事さえも、最後には必ず、幸福な記憶になる。
アルファの感情は、大きな波のうねりのように、とても豊かだ。そこに寄り添っていられることが、オメガには嬉しくてたまらなかった。カウンターの上で、そっと顔を寄せて、なんて、素敵な人なんだろうと、オメガは静かにため息をつく。アルファの記憶よりもむしろ、アルファその人に惹(ひ)かれて、彼女の関(かか)わった記憶を、どんどん読み出してみたくなる。
——できることなら、ずっと潜っていたい。
オメガは再び椅子に上って、渇いた者が水を求めるように、アルファに口づけた。霧の中に潜っていくうち、オメガは強く一点に引き寄せられるのを感じた。引かれていく先にいるのは、アルファではない。あの、タカヒロという少年だと、オメガは朦朧(もうろう)とした意識の中で気づく。
それでも構わない、とオメガは思った。タカヒロの記憶の中にいれば、きっとアルファにも会えるだろう。あの二人の間の記憶ならば、きっと幸福に満ちた、温かなものに違いない……。

4　光を踏んで踊る人

自転車で、カフェ・アルファへの道を突っ走る。ジャンパーの前をしっかり閉めたつもりだったのに、吹き込んでくる風はすごく冷たい。『冬もどき』がまた来たんだな、と思う。一月の終わりにカエデやイチョウの葉っぱが散って、枝が丸裸になったと思ったら、二月のはじめには、新芽がもう顔を出してる。昔は、一年の四分の一はこんなふうに寒かったんだって、じいちゃんが教えてくれた。お前は寒さに弱すぎるって毎年ぼやかれるけど、慣れてないんだから仕方がない。

そのじいちゃんはと言えば、町内会にかこつけた飲み会に出かけてしまった。たぶん今晩は帰らない。ちょうど珍しい果物が井戸に吊してあったから、夕飯代わりにアルファと一緒に食べようと思って、持ってきた。いくら旨いものがあったって、一人で食べたんじゃつまらない。魚がダメなアルファでも、果物ならきっと喜んでくれる。

西の岬に着くと、風はいきなり強くなった。倒れないように自転車を前庭の柵に引っかけて、玄関に駆け寄る。

「アルファー！」

……返事はない。

どういうわけか、アルファは店の中にいなかった。頭の上でドアのカウベルだけが暴れているけれど、風音と波音があんまりうるさくて、ベルの音はほとんど聞こえない。

母屋のチャイムも鳴らしてみたけれど、アルファは出てこなかった。ドアの貼り紙がないから、店を閉めてるわけじゃない。

——こんな嵐みたいな日に、いったいどこへ行ったんだろう？

なんだか急に、アルファのことが心配になってきた。この辺りは大体安全だってことになってるけど、よそから変な奴が流れてくるかもしれないし、もしかしたら、一人で怪我をして動けなくなってるのかもしれないし……。

悪い想像はどんどんふくれあがる。いても立ってもいられなくなって、僕はポーチを飛び出した。前庭には誰もいない。走って建物の裏手へ回る。

裏庭は一面のススキ野原だった。冬もどきが来ても枯れないススキは、僕の背よりも高くぐんぐん伸びて、我が物顔で茂っている。強い海風が吹き荒れるたび、丈の高い草の先が、首筋や頬に容赦なく叩きつけてきた。

もしも……、もしも、怪しい奴がいるんなら、下手に大声を出したりしない方がいい。じいちゃんが教えてくれたのを思い出して、僕は黙ったまま、なるべく気配を殺して、アルファを捜しはじめた。慎重にススキをかき分けて、前へ進む。辺りはもう、ずいぶん薄暗い。

強い風が雨雲を運んできたのか、ぽつぽつと頬に降りかかってくるのが分かる。たちまち、土砂降りになった。雨の滴が後から後から目に流れ込んで、ほとんど周りが見えない。聞こえるのは草を叩く、ものすごい雨の音だけだ。

と、目の前にいきなり、尖った草の先っぽが、ぬっと飛び出てきた。目を突かれそうになって、あわててそいつを引っつかむ。その瞬間。ガラスを引っかいたみたいな悲鳴が上がった。僕もつられて大声で叫ぶ。何かがどさりと倒れる音。

「アルファ!?」

草の間にへたり込んで、まん丸に見開いた瞳で僕を見上げているのは、濡れネズミになったアルファだった。僕が引っつかんでしまったのは、屈みこんだまま出てきたアルファのポニーテールだったのだ。

「タッ……、タカヒロ？」

今にも泣き出しそうな、弱々しいアルファの声。そんなふうにしゃべるアルファを、僕は初めて見た。胸が変にドキドキする。

「ごっ、ごめん、髪……」

尻もちをついたまま、頬がふっとほころんで、アルファは大笑いした。

「ああ、もうっ！　なんて日なのよ今日は！」

雨に打たれながらケラケラ笑っているアルファは、いつもどおりの元気なアルファだ。とた

んに僕もホッとする。
「何やってるんだよ、こんなところで。……心配して損したよ」
「ごめんごめん。水道の栓、探してたんだ」
「なんで？　アルファのところは、井戸があるだろ？」
「最近、海の水が混じってきたみたい。しょっぱくなっちゃって不味いんだ。たしか北の町から来てる管があるはずだから、元栓さえ見つかれば、うちでも水道が使えるの。……ただ、その……」
「栓が埋まっちゃって？」
決まり悪そうに頭をかくアルファの、座り込んだお尻の下に、錆びた鉄の箱が見えた。僕が指さすと、アルファはバネ仕掛けの人形みたいに飛び上がる。
「これだよ！　偉いぞ、タカヒロ！」
バールをテコみたいに使って、アルファは器用にフタを開けた。鉄箱の底には太い水道管とその支管があって、分かれ目のところに錆びたコックがついている。
「これを開ければいいの？」
「そういうこと！　手伝ってくれる？」
コックにバールを引っかけて、僕とアルファは力任せに押しまくる。ガリッ、と錆のはがれる手応えがあって、きしみながらコックが開くのが分かった。僕たちは飛び跳ねながらバンザ

イを繰り返す。もう二人とも、すっかりびしょ濡れになってることさえ忘れてた。

「ああもう、お水、真っ赤だよー。きれいになるまで山ほど使わなきゃ」
洗面所の方から出てきたアルファは、片手に大きなバスタオルを持ってた。僕はと言えば、玄関を通った瞬間から、なんだか頭がかっかして熱でも出たみたいになってる。
お店と壁一枚でつながってるのに、母屋の方に上がるのは、これが初めてだった。玄関の先のアコーディオンカーテンを開けると、そこが広い台所。お店の方とは違って、キッチンにもテーブルにも、包丁だのまな板だの、使いっぱなしでまだ洗ってないマグカップだの、いろいろなものが出しっぱなしになってる。ああ、アルファはここで生活してるんだな、と思うと、なんだか落ち着かなくて、用もないのにそこらじゅうウロウロ歩き回ってしまう。
「バスタオル一枚しかないから、そっちの端っこで拭いてね」
そう言ってアルファが、バスタオルの片方の端を僕の頭に引っかけた。とたんにふわりと降ってくる、花みたいな、果物みたいな、甘い匂い。匂いが頭のスイッチを入れたみたいに、急に初日の出を見に行った日のことが思い浮かんで、心臓がバクっと、大きく鳴った。
アルファはタオルのもう片っぽの端で、右肩に垂らした髪を挟んで、そっと水気を取っている。その何気ない仕草が、なんだかとてもきれいに見えるのは、どうしてなんだろう。
「早く拭かないと、風邪ひいちゃうよ？」

そう言われて、あわてて頭の上のタオルに手を伸ばしたとたんに、特大のくしゃみが出た。

鼻をすする僕を見て、なぜかアルファは、にやりと笑う。

「こりゃあ、あったまった方がいいんじゃないかな？」

そうかもね、とうっかりうなずいたのがまずかった。

「じゃ、決まりだ！　たぶんもう、準備できてると思うよ」

いきなりアルファは僕の手を取って、洗面所へ引っ張ってった。流しの左に、曇りガラスをはった引き戸。ガラッと景気よく開けたとたんに、向こう側から、湯気がもくもく流れ出してくる。

風呂場（ふろば）！

急にクラっと目が回ったのは、あったかすぎる湯気のせいじゃない。

ほらほら、脱いじゃえ、とアルファが楽しそうに服を引っ張るので、僕はあわてて、自分で脱ぐから！　と言うなり、風呂場へ入って引き戸を閉めた。手早く脱いだ服や下着を、戸を少し開けて放り出すと、赤い湯の中にザブリと飛び込む。お湯はまだ、すこしぬるいような気がしたけど、僕はもう、それどころじゃない。

「アルファー」

しばらくしてから、僕は引き戸の向こうに呼びかけた。

「なにー？」

「服とか、放ってあるけど、そのままにしといてよ」

「ダメだよ、乾かさなきゃ。もう吊しちゃったよ」

その声と一緒に、ガラガラ引き戸の開く音。僕ははっと顔を上げた。

湯気の中に、白くて、柔らかな曲線に縁取られた何かを、一瞬見たような気がする。

僕はすかさず、顔をバシャリとお湯に突っ込んで目をつむった！　それでも、細い足がすっと湯船に入ってくるのが気配で分かる。あふれたお湯が、派手な音を立てて流れてく。

「何やってるの？」

くすくす笑う声が、頭の上から降ってきた。もう息が続かない。

顔を上げると、タオルで髪をまとめ上げたアルファが、胸元までお湯に浸（つ）かってニコニコしていた。お湯がずいぶん濁ってるから、水面から下は何も見えない。ほんの一瞬でも残念だと思った自分をぶん殴ってやりたかった。

「どうしたの？　具合でも悪い？」

「……いや、そんなことない」

僕はブンブンとかぶりを振った。振った拍子にアルファの白い首筋が目に入って、注射でも打たれるときみたいに、あさっての方へ目をそらす。

「昔ね、オーナーが話してくれたんだ。みんなで一緒に入る、広ーいお風呂のこと。『銭湯』

って言うんだって」
「……そう」
「大勢でね、あったまりながら、いろんなことを話すんだって。そういうの、『裸の付き合い』って言うんだって。ずーっと、憧れだったんだよね！」
そう言ってアルファは、本当に気持ちよさそうに、大きな伸びをする。願いが叶ってよっぽど嬉しいらしい。銭湯の話なら、僕もじいちゃんから、背中を流すついでに聞いたことがある。けれどもアルファは、決定的なところで間違ってるんだ。これは絶対に、銭湯なんかじゃない。
「アルファ、初瀬野先生は言わなかったかもしれないけどさ……」
「何を？」
「銭湯って普通は、男湯と女湯に分かれてるんだよ」
「知ってるよ？」
アルファの答えがあんまりあっさりしていたので、えっ？　とうっかり彼女の方を振り向いてしまった。ほんのり桜色に染まった肩先が目に入って、カッと頭に血が上る。こんなにぬるいお湯なのに、今にものぼせて倒れそうだ。
でも、次の瞬間、アルファの何気ない一言が、僕の頭を一気に冷ましてしまった。
「男の子でも、子供なら女湯に入れるんだって、オーナー言ってたよ。だから、タカヒロはセ

ーフなの」
子供なら、女湯に入れる。
ああ、そういうことだったんだ、と気付いたとたんに、体じゅうの力が抜けてくような気がした。
アルファがあれこれ話しかけてくる。アルファにとっては何しろ、夢の銭湯なのだ。それなのに僕は、さっきの一言があんまりショックで、生返事するのが精一杯だ。
——要するに僕は、アルファにとって、ほんの小僧で、ただのガキだってことなんだ。
このまま赤いお湯の中に沈んで、消えてしまいたいと思った。

風呂から上がって、アルファの着替えを借りた。バスタオルよりもずっと濃く、アルファの甘い匂いが残ってる。僕の服は部屋の端から端に渡したロープに吊されて、ストーブの熱に当たって、少しだけ揺れていた。去年よりは少し背が伸びたけど、それでも僕の服はみんなお子さま用のばっかりで、いかにも子供っぽいオーバーオールのジーンズなんか、見てるだけでもイライラする。僕は背中を丸めて、しょぼくれた息を吐いた。
「どうしたの？　ため息なんかついて」
振り向くと、湯上がりのアルファがパジャマ姿で立っていた。いつもうっすら光ってる髪が、今は玉虫色に濡れている。白いほっぺたが優しい桃色に染まって、つやつやした肌に、僕

の目は釘付け（くぎづ）になる。ついさっきまで同じお湯に浸かってたなんて、まるで夢みたいだ。
「何ボーっとしてるの？　のぼせたんじゃない？」
のんびりした声を聞いたとたんにイラっときて、僕は精一杯トゲをはやした声で答えた。
「うん、のぼせちゃったよ。僕、子供だから」
「そっか。じゃあ、風に当たると楽になるよ」
すっかり上機嫌のアルファが、部屋の隅から小さな扇風機を引っ張り出してくる。
「そんなの要（い）らないよ！　風邪ひいちゃうじゃないか」
アルファは小首をかしげながら、扇風機を元の場所に戻した。いつだってあれこれ気を回してくれるのに、こういうときだけ、どうしてケタ外れに鈍いんだろう。僕は二度目のため息を、あわてて引っ込める。
晩ご飯の代わりに、お土産に持ってきた『竜の卵』を、キッチンのテーブルで一緒に食べた。『竜の卵』は、時々大島の方から南町へ入ってくる、珍しい果物だ。ガチョウの卵ぐらいの大きさで、真っ赤な実にあちこち緑色の角が生えている。甘いものの大好きなアルファは大喜びであっという間に平らげてしまったけれど、僕はなんだか食欲がない。食べるどころか、話をする気分にもなれない。アルファと二人っきりのキッチンは、しんと静まりかえっている。
「タカヒロ、どうしたの？　やっぱり具合悪いんじゃない？」

アルファが心配そうに僕の顔を覗き込む（のぞきこ）。僕はうつむいたままかぶりを振った。
「……ラジオでも聴こうか？　楽しい音楽、やってるかもしれないよ？」
アルファはテーブルの隅っこに置いてある、携帯用ラジオのスイッチを入れた。じいちゃんがいつも聴いてる『ラジオ・ハママツ』だ。アナウンサーは三人しかいない。朝・昼・夜と交代で番組をやっていて、夜はいつも、優しい声をした、中年の男の人がしゃべってる。
『今夜のハママツは、ここ数年で一番の冷え込みです……』
いつもの男の人の声が、ラジオから響いてきた。気のせいか、アルファがふっと、目を細めたみたいに見える。
『……外出される方は十分に防寒してください。さて、冷え込む夜は、星空の観賞には最適です。これからしばらく、夜空の星をご案内と参りましょう……』
「タカヒロ、星、見ようか！　私の部屋、大きな窓があるよ」
アルファはいきなり、ラジオを片手に立ち上がった。
「いいよ、寒いし……」
「空でも見れば、きっと元気が出るって！　ね、一緒に星を見ようよ」
ほとんど引きずられるようにして、アルファの部屋に連れてこられた。壁一面、風見魚とそっくりの、不思議なさかなの彫刻でいっぱいだ。アルファはベッドに飛び乗ると、ヘッドレストの向こうにある大きな窓を、思いっきり開いた。とたんに冷たい風が吹き込んできて、体が

縮み上がる。僕はヘッドレストの脇に立って、窓を覗いた。ここからでも十分、外が見える。

「毛布巻いてなよ、寒いから」

アルファがそっと肩にかけてくれた毛布を、ぎゅっと体に巻きつけて、空を見上げた。ぱちりと、電灯のスイッチを切る音。とたんに辺りが真っ暗になって、それからジワジワと、夜空の暗幕の上に、星明かりが現れはじめる。

思わず、息を呑んだ。

ガラスの細かい破片を、一面にまき散らしたみたいな空。満天の星、その一粒一粒の、鋭いまたたき。夕方の雨が嘘みたいに、空にはひとかけらの雲もない。

『狩人オリオンが肩先にまとった紅のベテルギウス、おおいぬの鼻先を青く照らすシリウス、子犬の心臓プロキオン。そして冬の巨大な大三角を貫いて流れる、淡く儚げな天の川……』

アナウンサーは次々に、星と星座の名前を読み上げていく。

「タカヒロ、どれがどれだか、分かる？」

アルファがぽつりとつぶやいた。ふと目を移すと、淡い星明かりの中に、アルファの仄白い横顔が浮かんで見えた。寒さが気にならないのか、毛布もかけないで、夜空を一生懸命に見上げてる。

「なんとなく分かるよ。アルファは？」

「……分からない」

え？　とびっくりして訊き返した。

「そんなわけないよ。アルファの方がよく見えるはずなのに」

アルファは必死に目を凝らしながら、小さくつぶやいた。

「だって、どこもかしこも星だらけで、まぶしくて……。これじゃ、どれに名前がついてるのか、全然分からないよ……」

少し考えて、アルファの目は見えすぎるんだ、と気づいた。

木陰の蛍の小さな光から、入り江の遠くに泳ぐ魚の、ウロコの輝きまで、アルファの目はいつだって、人間の目には映らないようなものまで、とても敏感に捕まえてしまう。星が降るようなこんな夜には、きっと空一面が天の川になったみたいに光を放って、一粒一粒を見分けられなくなってるに違いない。

「ねえ、タカヒロ」

「何？」

「タカヒロと、私が見てるものは、同じ空だよね」

夜空を見上げたアルファの横顔が、ほんの少しだけ、寂しそうに見えた。それはいつか見た、ミサゴの蒼い光みたいに、僕の胸にもひっそり染み込んでくる。

窓枠にかけたアルファの手に、僕は自分の手をそっと重ねた。アルファがちょっと驚いた顔

で、僕を振り向く。
「見え方は、少し違うかもしれないけど……、でも見てるのは、同じ空だよ」
僕は両目に精一杯の力を込めて、アルファを見つめる。想いが少しでも伝わるように。アルファは少しの間、きょとんと目を丸くして僕を見つめていたけれど、すぐにいつものなつっこい笑顔になった。僕も嬉しくなって、微笑み返す。これでまた一つ、アルファと一緒の季節を刻めたのかもしれない。そう思うと、なんだかすごく嬉しくなる。
いつの間にか、ラジオの星空案内は終わっていた。話題はもう、国境を越えて走る長距離バスの運行情報に移ってる。
「……結局、アナウンサーの言ってること、全然分かんなかったなぁ」
アルファはちょっと残念そうにつぶやいた。
「べつにいいじゃんか。アルファの方が、ずーっとよく見えてるってことなんだから。ラジオの言ってることなんか、気にすることないよ」
励ましたつもりだったのに、アルファはちょっと困ったみたいに笑ったっきり、黙ってる。何か、まずいことを言っちゃったんだろうか？
窓枠の上のラジオに視線を落として、アルファはぽつりとつぶやいた。
「このアナウンサーの声ね、ちょっとだけ、オーナーの声に似てるんだ」
そう言って、アルファはふっと、遠い目をした。その表情は優しくて、とても素敵だったの

に、僕はなぜだか、何かに負けたみたいな、悔しいような、そんな気分になった。理由は、よく分からない。

「もう寝よっか、なんだか今日は疲れちゃったし」
アルファがそう言うから、少し時間は早かったけど、眠ることにした。アルファは分厚いマットと布団を重ねて、僕の寝床を作ってくれた。いつもせんべいみたいな布団を畳に敷いて寝てるから、なんだかフワフワしすぎて落ち着かない。
横になると、ちょうど同じくらいの高さに、ベッドで眠ってるアルファが見えた。布団にくるまったとたん、あっという間に寝ちゃったらしい。よっぽど疲れてたんだろう。ちょうど僕の方に顔を向けて、横向きに丸まってる姿が可愛い。
薄闇の中にぼんやり見える、アルファの顔から、なぜだか目が離せなくなった。閉じた睫が長い。少しだけ笑った口元が愛らしい。小さな声で何かつぶやいたみたいだけど、聞き取れない。夢を見てるのかもしれない。たぶん、幸福な夢。幸せそうなアルファを見てるのに、どうしてだか、胸苦しいみたいな、不思議な感じがする。
こっそり、アルファの頬に手を伸ばしてみる。触れそうになったギリギリのところで、手を止めた。
なんだか、触っちゃいけないような気がする。

本当にすごく大切なものには、かえって触れなくなっちゃうもんなんだな、と、ぼんやりしてきた頭で、僕はそんなことを思った……。

冷たい風がほっぺたを撫でて、その感触で目が覚めた。辺りが淡い水色に染まって、ぼんやり明るい。いつの間にか、朝になっていたらしい。

何気なく隣を見ると、アルファの姿がなかった。僕はあわてて、布団をはいで起き上がる。

部屋のドアは、開きっぱなしになっていた。

「タカヒロー!!」

アルファが、僕を呼んでる。声は窓の向こうから響いてくる。アルファは外にいるみたいだ。こんな寒い朝に、いったい何をしてるんだろう？

「早く！　早く出ておいでよ！」

アルファの声が、ものすごくはしゃいでる。何か面白いものでも見つけたんだろうか。引っかける上着がないから、仕方なく毛布を体に巻きつけて、震えながら部屋を出た。中途半端に閉まりかけた玄関の扉を、ぼんやりした頭のまま押し開く。

外を見たとたん、眠気は一秒で吹っ飛んだ。巻きつけてた毛布が、足下に滑り落ちる。

一面の、白い輝き。

前庭の芝生が、隅から隅まで、砕いたウロコをちりばめたみたいに、淡いミルク色に輝いて

る。次の瞬間、東の空から音もなく差し込んでくる、夜明けの清らかな陽射し。銀色にまたたきはじめる光の海を踏んで、美しい人が微笑んでいる。

「すごいねー！　これ、霜って言うんだよ。見たことある？」

小さくかぶりを振りながら、僕はその人から視線を離すことができない。

白銀色の光の中に、薄いガウンを蜻蛉の羽根のようにひるがえしてはしゃぐ、その体の線の、なめらかな美しさ。宙を活き活きと跳ねる、ほどいた髪の、宝石みたいな翠の輝き。ふとこっちを向いた拍子に流れてくる、まぶしそうな笑みと、澄んだ水をたたえて輝く、むらさきの瞳。

「きれいだね！」

そう言って、細い爪先に銀の虹を踏むその人は、今この瞬間、自分がどんなに美しく見えるかを、知らないんだ。

「……うん」

僕は、小さくうなずいた。

「すごく、きれいだ」

そう口に出してみて、僕は初めて気がついた。

僕は、この美しい人が、本当に好きなんだと。

この先、夜明けの光を見るたびに、僕はこの瞬間、彼女がどんなにきれいだったかを、思い

出すだろう。決して一生、忘れることはできないだろう。
僕の胸に刻んだものの重さにも気づかずに、アルファは銀の海の上で、はしゃぎ続けている。見上げると東の空に、細い筆で書いたみたいな夜明けの月が、今にも消えてしまいそうに、白くて、柔らかな光を放っていた。

いつの間にか、接続は解けていた。
丸椅子にぼんやりと腰掛けたまま、オメガの藍色の目に、ゆっくり光が戻ってくる。
目の前のカウンターに頬杖をついて、永久に眠る人。曇ったガラス戸から差し込む、淡い陽射しに包まれて、白い光を帯びた頬が、柔らかに微笑んでいる。
その姿は、泣きたくなるくらいに、美しかった。
これほどに、何かを大切だと思ったことはない。何かに、心を揺さぶられたこともない。
胸の内側を引っかかれるように、何かが痛んでいる。それはたとえば、いつだったかミサゴが教えてくれたような、『悲しみ』に、とてもよく似ている。でもその痛みは、ひどく心地よくて、まるで、アルファたちがしょっちゅう感じている、『喜び』の感覚を、そっくりそのまま映したようなのだ。

悲しみとも喜びともつかない、この奇妙な感情は、きっとタカヒロのものなのだろう、オメガはそう思った。夕凪の記憶の中では、タカヒロと、オメガとの境目はとても曖昧で、二人はほとんど、溶け合っているようなものなのだ。
だからこそ、タカヒロがアルファの中に見たあの特別な輝きを、今のオメガは自分自身の目で見ることができる。アルファの命、それ自体の、弾けるような輝き。……命の火は、遠い昔に消えてしまったというのに。
もしも今、彼女が生き返って自分と言葉を交わしてくれるとしたら。ほんの数分でも、あの生命力にあふれかえって輝いていた紫水晶の瞳を開いて、自分に向かって微笑みかけてくれるとしたら。
――何を引き替えにしたって、全然惜しくはないだろう。
眠り続けるアルファの冷たい額に、オメガは自分の火照った額を、そっと押しつけた。今となってはもう、生きていた頃のこの人に触れるためには、記憶の中に潜り続けるほかにない。それは悲しいことに違いなかった。けれども、タカヒロと一緒に生み出した強烈な感情は、アルファを喪ったことの悲しみさえも、どこか甘く、心地よい、未知の想いに変えてしまう。
唇と唇を重ねるということの意味が、何も知らなかったはずのオメガにも、おぼろげに分かってくる。これはきっと、かけがえのない誰かに向かって、あなたが何より大切だと伝えるための合図なのだ。アルファの色を失った唇に、オメガの熱い唇が触れる。その瞬間、無数の針

を呑んだように、冴え返る痛みが、オメガの全身を貫いてゆく。

遠く近く、寄せては返す波の音が迫ってくる。アルファの中の、果てしない追憶の海へと、オメガの意識は、深く、深く沈んでいった。

を呑んだように、冴え返る痛みが、オメガの全身を貫いてゆく。
遠く近く、寄せては返す波の音が迫ってくる。アルファの中の、果てしない追憶の海へと、オメガの意識は、深く、深く沈んでいった。

5　水底の星

子海石先生の病院のすぐ近くに、まだ小さな砂浜が残っていると聞いて、さっそく遊びに来てしまった。コーヒー豆を切らしてしまって、店は今、臨時休業中なのだ。
病院前の道路から、クロマツのまばらに茂るゆるい崖を降りていくと、うちの裏庭ほどの広さの砂浜が、所々にハマユウの花を揺らしながら広がっている。寄せてくる波を見ていたら、いても立ってもいられなくなって、Tシャツのまま海へ飛び込んでしまった。
少し砂浜から離れると、水底は急に崖になって、その下に延々と、昔の町並みが広がっていた。碧色の海水は澄みきっていて、太陽の光が届く限り、どこまでも見渡せる。二十年か、三十年か、ずいぶん前に沈んでしまった建物が、フジツボや海草に埋まりかけながら、それでもかろうじて持ちこたえていた。雀みたいに肩を寄せ合って、ギュウギュウ詰めに建っている家々。開け放した窓から見える、タンスや本棚、置き去りにされた家財道具たち。今は人の代わりに、魚たちがこの町の主になっている。
水の中で息が続くのは、私の場合、せいぜい五分が限界。息苦しくなって海面に顔を出すと、砂浜で手を振る先生の姿が、ずいぶん小さく見えた。いつのまにか、かなり沖合まで出て

5　水底の星

子海石先生の病院のすぐ近くに、まだ小さな砂浜が残っていると聞いて、さっそく遊びに来てしまった。コーヒー豆を切らしてしまって、店は今、臨時休業中なのだ。
病院前の道路から、クロマツのまばらに茂るゆるい崖を降りていくと、うちの裏庭ほどの広さの砂浜が、所々にハマユウの花を揺らしながら広がっている。寄せてくる波を見ていたら、いても立ってもいられなくなって、Ｔシャツのまま海へ飛び込んでしまった。
少し砂浜から離れると、水底は急に崖になって、その下に延々と、昔の町並みが広がっていた。碧色の海水は澄みきっていて、太陽の光が届く限り、どこまでも見渡せる。二十年か、三十年か、ずいぶん前に沈んでしまった建物が、フジツボや海草に埋まりかけながら、それでもかろうじて持ちこたえていた。雀みたいに肩を寄せ合って、ギュウギュウ詰めに建っている家々。開け放した窓から見える、タンスや本棚、置き去りにされた家財道具たち。今は人の代わりに、魚たちがこの町の主になっている。
水の中で息が続くのは、私の場合、せいぜい五分が限界。息苦しくなって海面に顔を出すと、砂浜で手を振る先生の姿が、ずいぶん小さく見えた。いつのまにか、かなり沖合まで出て

しまったらしい。思い切り息継ぎしてから、浜辺まで大急ぎで水を蹴っていく。
「先生、これ、お土産です！」
水底の町から持ってきた戦利品を、先生の前に掲げて見せた。浅いグリーンに光る、ガラスの瓶。口のところが細くなっていて、中には同じ色をした、小さな玉が入っている。どんなふうに傾けてみても、玉は決して出てこない。
「不思議。これ、昔のおもちゃですか？」
先生は懐かしげに、ふっと目を細めた。
「おもちゃじゃないのよ。ラムネ、って飲み物が入ってたの。毎年坂の下の雑貨屋さんでこれを売り出す頃になると、夏が来たんだなあって思ったものよ。もっとも、今は年じゅう夏みたいなものだけれど」
私はラムネの瓶を陽射しに透かして覗いてみた。真夏の浅い海の色。今はもうないその飲み物は、いったいどんな味がしたんだろう。それを売っていた人、買っていた人たちは、いったいどこへ行ってしまったんだろう。
「この浜のすぐ下は、昔の海岸道路だったのよね」
先生は、失くしてしまった何かを探すような視線を、海の方へ投げた。
「そういえば……、潜ったとき、ガードレールみたいなものが突き出てるのが見えました。ほとんど砂に埋もれてたけど」

「海と一緒に、道も上がっていくのよね。もうずいぶん前の話だけど、こんなふうに消えていった道が、たくさんあったのよ」
先生が、煙草に火をつけた。風のない浜辺で、一筋の白い煙が、底抜けに青い空の高みへ、吸い込まれるように昇っていく。
「あのおっさんを連れ回してね、よくあっちこっちの沈みかけた場所を見に行ったわ」
「先生と、おじさんで？」
「そう。二人ともまだ若かったから、バイクでね。世の中がにぎやかだった頃には、身動き取れなくなるくらい車でいっぱいだった道路が、いつの間にか砂に埋もれて、波に呑まれて、誰からも忘れ去られて、消えていくのよ。……あれは、あのときにしか見られない、とても貴重な光景だったと思うわ」
先生の目は、遠い記憶の中の光景を、じっくりと味わいなおしているように見えた。人も車もバイクもあふれかえって、押し合いへし合いしながら暮らしていたという、先生が若かった頃の世界。世の中がこんなふうに静かになってから創られた私には、想像もつかないような光景が、先生の頭の中には焼きついているんだろう。
ふと、先生の首の辺りで何か光ったような気がして、目を凝らした。鎖骨の間で、象形文字みたいなマークを焼きつけた、丸いペンダントが揺れている。確か入院させてもらったときにも、同じものを見たような記憶があった。まん丸い目玉そっくりの頭に、バンザイした両手と

浮かれたような足が、とてもシンプルな線で描かれている、なんだか愛嬌のあるデザインだ。
「先生、それ、なんの絵ですか？」
「ああ、これ？」
先生は少し照れたように笑って、ペンダントをつまみ上げた。
「これはね、私のマークなの」
「先生の？」
「そう。『見て、歩き、よろこぶ者』っていうのよ」
先生はそう言って、ペンダントをはずすと、愛おしげに手のひらにのせた。ツヤのある釉薬の白が、陽光にきらりと光る。
「こいつはね、私の、もう一つの目玉なの。こいつを見てると、初めてバイクを手に入れたときのこと、思い出すわ……。道さえあれば、どこへだって行けるんだって、なんだか羽根でも生えたような気分になったもんよ」
先生の視線が懐かしげに、浜辺の少し先をさまよった。さっきの海岸道路が埋まっている辺りだ。
「それで思いついたの。相棒にも、目を付けてやろうって。この世界の隅から隅まで、一緒に見て回れるようにね。あのおっさんに塗料を持って来させてね、相棒の首に、こいつを描いてやったのよ」

はずみをつけて、軽くペンダントを投げ上げる。先生の柔らかな手のひらで、バンザイした人形が、楽しげに踊った。
「今はこうして、ペンダントに収まってるけど……、こいつと一緒に、いろんなものを見てきたわ。ただ見るだけなんだけど、私にとっては、とても大事なことだったのよ」
私はなんだか感じ入ってしまって、じっと先生のペンダントを見つめたまま、黙っていた。
先生はペンダントをつけ直すと、ふっと私に微笑みかける。
「ごめんなさいね。退屈でしょう、年寄りの世迷い言」
私はあわててかぶりを振る。
「あっ、違います。そうじゃなくて、分かるんです。先生がどうして、いろんなものを見続けてきたのか……」
先生が首をかしげる。私はあわてて言葉を継ぐ。
「ええと、あんまり簡単に『分かる』って言っちゃうのもアレですけど……。私なんて、たいがいお店にいるから、この目で見るものはいつも同じだって思われちゃうかもしれませんけど……、でも、たとえば夕焼け一つとっても」
私は大きく息を継いだ。先生がじっと、透き通って貫くような眼差しを向けているのが分かる。
「私がどれだけ長生きして、西の岬でどれだけたくさんの夕焼けを経験しても、その日そのと

きの空の色は、たったの一度きりで、その瞬間を逃したら、もう二度と見られないものなんです。そりゃ、似たような色が出ることはあるかもしれないけど、でも本当にまったく同じ色には、決してもう会えないんです」
　先生は私の勢いに少し驚いたようだった。何をこんなにムキになっているんだろう、と自分でもあきれてしまう。けれども、口の方は勝手に動いて止まらない。
「要らない景色なんて、一つもないんです。だから、何かがきれいだとか面白いとか、とにかく興味の湧くものを捕まえたのなら、それをしっかり見るんだよって、オーナーが、オーナーが……、あれ？」
　はっと口元を押さえた。先生がクスリと、小さく笑う。
「初瀬野さんに、そう教わったのね」
　私は頭をかきながら、うなずいた。
「自分で考えたつもりだったんですけど……。なんだか、オーナーの受け売りだったみたいですね」
「構わないわよ。人間だってそういうことはどこかで教わらなきゃ身につかないわ。初瀬野さんは、あなたに、とても大切なことを教えてくれたのよ。きれいなものや素敵なものを、決して見逃さないように」
　先生は腕を伸ばすと、私の左頬をふわりと、柔らかい手のひらで包んだ。

「初めは人に教わったんだとしても、今のあなたのものの見方は、もうあなたのオリジナルだと思うわ。それに、ほら」
　先生は上着のポケットから何か取り出した。握っていた拳を開くと、手のひらの上に現れたのは、私がいつか先生にプレゼントした、小さなさかなの彫刻だ。
「わぁ、懐かしい。とっておいてくれたんですね」
「もちろんよ。大切なものだもの」
　さかなには丁寧にニスが塗られて、キーホルダー用の金具がついていた。
「オリジナルなのは、ものの見方だけじゃないわ。あなたはもう、自分自身の想像力で何かを創り出すことだってできるんだから。これはね、本当にすごい力なのよ。私も、まさかここまで……」
　何かを言いかけて、ふいに先生は口をつぐんだ。
「ここまで？　ここまで、なんですか？」
　問い返しても、答えはない。先生はさかなをポケットにしまい込むと、唐突にこう言った。
「そうだ。あなたに見せたいものがあるのよ。今いきなり思いついちゃった」
「え？」
　戸惑う私にお構いなしに、先生は続ける。
「あなた、北の町へはよく行くの？」

小説
ヨコハマ買い出し紀行
―見て、歩き、よろこぶ者―
著者 香月照葉
原作 芦奈野ひとし

北の町、と言えば、ちょっとした買い物ができるきぬがさの町よりもっと先、たしか山の中にある集落だ。めったに通ることもないし、たまに通ってもバイクを止めたことはない。
「いいえ。あそこにはお店も何もないですし」
「何もないなんて嘘よ。まだ見てないんなら、ちょうどよかったわ」
「見てないって……、何をですか？」
先生は意味ありげに笑ってみせる。
「それはね、行ってみてのお楽しみ。……もうこんな時間だわ。さっそく、出かけましょうか」
振り向きもせずに、さっさとクロマツの崖を上りはじめた先生の背中を、私はあわてて追いかける。おじさんも昔、こんなふうにあちこち引っ張り回されたんだろうか。そんなことを思った。

病院の白いミニバンで尾根道を延々走って、北の町へ向かった。きぬがさの町を越えた辺りで、人の気配も車の通りも、ぱたりと途絶える。
山道をくねくねと登り続けて、大きな入り江を見下ろす展望台にたどり着いた頃には、もう夕暮れが迫っていた。西の方に横たわる山々の稜線に、沈んでゆく太陽が鮮やかな橙の炎を灯す。入り江の水の中で、ほんのかすかに、沈んだ町の家々の、四角い輪郭が揺れていた。

「沈んでいるのは、横須賀、という町なのよ」
西の方から容赦なく差し込んでくる茜色の陽射しに目を細めながら、先生が言った。初めて聞く町の名前だ。
「標高の低いところが水没してしまったのは、横浜と同じなんだけど、どうしてだか、横須賀という名前は、町が消えたのと一緒に、忘れ去られてしまったの」
先生の話を聞きながら、私の目は夕日に映える入り江に釘付けになっていた。静まりかえった水面が、空の色を映して、金を混ぜたような紅に染まる。東の空はもう夜に呑まれて、深い瑠璃の色だ。
「とても、きれい……。先生、すごい穴場を知ってるんですね」
「そうねえ、穴場、っていうのとは、ちょっと違うかしら」
先生は入り江の方を向いて思い切り伸びをすると、腰に手を当てて言った。
「消えてしまった横須賀は、私の生まれ育った町なのよ」
えっ、と驚いて振り向いたけれど、先生の横顔には、なんの表情も表れない。故郷が消えてなくなってしまったことを、とっくに受け入れてしまった様子で、淡々と語り続ける。
「だから、この場所も、人が大勢いた頃から知ってるの。今はもう、わざわざ登ってくる人なんて誰もいないけれどね」
どう声をかけていいものか、分からないまま目を伏せる。先生は、景気をつけるみたいに、

ポンと私の肩を叩いた。
「そんな顔しないでちょうだい。べつに、悲しいことじゃないのよ」
「だって……、私だったら、あのカフェが沈んで消えてしまうなんて、耐えられないと思います」
「あなたはそうかもしれないわね。あの場所に、素敵な思い出だけを、積み重ね続けているんですものね」
私はうなずく。先生は続ける。
「……でもね、そんなふうに生きられる人間なんて、そうそういないから、帰る場所が消えてなくなるっていうのも、案外とさっぱりしていいものよ。いい思い出も、そうでない思い出も、ごちゃごちゃしたしがらみも何もかも、今はみーんな、水の底だもの。かえってすっきりしちゃったわ。強がってるんじゃないのよ。本当の話」
「そんなものでしょうか」
「どんなに確かに見えるものだって、いつかは消えてなくなるわ。だから、アルファさん、あなたがしっかり、見ておいてちょうだい」
その言葉はどこか切実で、受け取ったとき、胸の底の見えない弦が、ビィン、と共鳴するような強さを持っていた。
「……そう言えば、いつだったか、オーナーも、おんなじことを言ってました」

「でしょうね」
先生は遠くを見るような目で笑った。
「初瀬野さんがあなたに素敵なことをたくさんインプットしたみたいに、私もあなたにいろんなものを見せてあげたいのよ。昔、あのおっさん相手にやってたのと同じようなことだけどね。本番はこれからだから、よかったら、じっくり見ていってほしいわ」
「これからって……、何か、起こるんですか？」
ちょっとワクワクしてきた。誰もいない、何もないこの場所で、いったい何が起こるんだろう。
「見てれば分かるわ。もう、日が暮れるわね。もうすぐよ」
見上げると、すでに西の山に日は落ちて、山ぎわの空は、目の覚めるような紅の残照に燃え上がっていた。炎のような紅色をおおう、深紫のヴェール。その先は瑠璃色に染まって、気づけば空のほとんどが、夜の群青へ向かって、色合いを深めようとしている。
夕暮れの色彩。無限を思わせる残光。胸にぐっとせり上がってくる、感情の不可解な波。私が見ているものは、ただの色、ただの光なのに、どうしてこんなに、心の奥まで、揺さぶられるような気がするんだろう。
「入り江をよく見て」
先生が囁いた。私は先生が指さした先をなぞって、沈んだ町の方へ視線を落とす。

すっかり暗くなった水面に、一点、きらり、と鋭くまたたき、光りはじめるものがあった。
はっと、目を見張る。
一つ、また一つ。遠く、近く、入り江のそこここに、清らかな白い光が灯りはじめるのを、私は声も出せずにただ眺めていた。それはまるで、野火が風に乗って燃え広がるように、次第に勢いを増して広がってゆき、やがて、深い群青に沈んだ入り江は一面に、まばゆく輝く光の一群に埋め尽くされる。星空が地上に現れたかのような、無数の光。入り江の光は、まるでそれ自体が生きているかのように、至る所で微妙な明滅を繰り返しながら、消えてしまった町の跡を、青白い光のドームの中に、浮かび上がらせる。
「これって……、いったい……?」
自分の声が、ひどくか細く響いて、震えているのが分かった。未知の美しいものに触れるとき、私の心は、どうしようもなく脆くなる。
「街灯よ」
先生が囁いた。
「横須賀にはね、明るいうちに太陽の光をためて、夜が来ると、ひとりでに灯る街灯がたくさんあったの。あなたが見ているのは、生き残った街灯の光よ」
返事をしようとしたのに、声が出ない。代わりにうなずき返したら、その拍子に、両の目から涙が零れ落ちた。あわてて目頭を押さえるけれど、涙腺が壊れたみたいに、涙は止まらな

い。先生がそっと肩を抱き寄せて、あやすように優しく、手を握ってくれた。
「町は死んでしまったのに、まだ街灯だけが、静かに生きているのね」
うなずいて、また涙がこぼれた。町の灯りの一つ一つが、死を悼んで灯された無数のロウソクの灯火のように、静かな祈りの色を帯びて見えてくる。私はまだ誰の死も知らないし、誰かの死を哀しむためにロウソクの火を灯したこともないのに、どうしてこれが横須賀の弔いのようだと感じたのか、それが少し、不思議だった。
「この灯もいつか、消えるんですね」
私がつぶやいたのに答えるように、先生は軽く、私の肩を叩いた。
「そう長くは、保たないでしょうね。でも、あなたが間に合ってくれて、本当によかったわ」
私はふと、先生の方を振り向いた。視線が絡んで、どちらからともなく、泣き笑いのような笑みがこぼれる。
「あなたはこの先、まだまだ、たくさんのものを見られるわね。羨ましいわ」
先生はそう言って、空を仰ぎ、一つ大きな息をついた。
「私は……、どの辺まで見ていけるのかしら」
胸元のペンダントが、入り江の光を反射して、きらりと小さく光った。
「まだまだ、いくらだって、いろんなものを見られますよ。私たち、なにしろ暇なんですから、時間ならいくらだってありますもの」

三つ数えるくらいの、沈黙。
ふいに先生が、クスクスと笑いだした。それもそうかもね、と小さくつぶやいて、先生は再び、私の肩にそっと手を触れる。
「もう、見る人はいなくなってしまったけど……」
私と先生は、頭と頭をくっつけるようにして、輝く入り江を覗き込んだ。
「こんな花が、あってもいいわね」
入り江を一面に埋め尽くして輝く光の花に魅入られながら、私はうなずいた。光の入り江から吹き上げてくるぬるい風が、遠い山の上まで、優しい潮の香りをかすかに運んでくるのが分かった。

――よく、見ておけ。じきに消えてしまうものだからな。
いきなり宇布見の声が蘇(よみがえ)って、オメガは体を硬くした。反射的に辺りを見回して、宇布見の姿を捜していることに気づく。
ずっと前に、宇布見は死んでしまったのだと気付いて、ふっと、緊張がゆるんだ。
アルファの繊細な感覚にうっとりと心を明け渡して、すっかり無防備になっていたから、突

然の宇布見の声が、ひどくこたえている。まるで、胸の奥深いところに沈んでいた得体の知れない澱(おり)が、いきなり浮かび上がってきたようで、わけもなく恐ろしい。
胸ポケットの布越しに、ガラス玉に触れて、一つ大きな息をついた。深呼吸を繰り返すうちに、だんだんと落ち着いてくる。
――お前の目に、しっかりと焼きつけておけ。もうすぐ、見られなくなるぞ。
それは、宇布見の口癖だった。オメガもまた、宇布見に連れ回されて、ハママツのあちこちの風景を見せられていたのだ。水底に延々と並ぶ、大工場の錆(さ)びた屋根。その上に茂って海岸線を埋め尽くす、マングローブの森。
どういうわけか、宇布見自身は、決して風景を見ない。いつも、風景の中に立っていた。人の気配が消え果てた静かな世界に、頼りなげに立ちつくして、景色を見つめるオメガの藍色(あいいろ)の瞳(ひとみ)を、どこか切実な色で見つめ返していた。宇布見の立つ場所と、オメガのいる場所と、ほんの数メートルしか離れていないのに、まるで透明な断層に区切られていて、オメガは世界を外から眺めているような、そんな奇妙な感覚があったのを憶(おぼ)えている。
――僕たちは、どうして、見なければならないんだろう？
オメガはふと、ひとりごちる。
ただ見つめて、記憶する。それだけのことが、どうしてそんなに大切なんだろうか。
その理由は、初めから自分の奥深いところにあるような、ぼんやりとした予感がある。それ

でいて、気付いてしまうのが怖いような、そんな気もするのだ。

このままアルファの記憶を読み続ければ、いつかはそこへ、たどり着いてしまうんだろうか？

甘い記憶の源、美しいアルファの唇が目の前にあるのに、口づけるのがなんだかためらわれる。

おずおずと指を絡めた、その瞬間、口づけてもいないのに、オメガは記憶の霧の中に引きずり込まれた。すさまじい勢いでオメガを引き寄せようとする記憶が、アルファの中にある。記憶自身が、誰かに読まれたがっている。

タカヒロだ。

とたんにオメガの胸に、柔らかい安堵（あんど）が広がった。タカヒロの記憶は、きっと胸の底の扉を開けたりしない。ただひたすらに、アルファへの想いを——甘くて苦い感情を——味わい尽くす喜びだけがある。なにより、タカヒロになってしまえば、美しいアルファを、一番近い場所で見つめていられる。オメガが本当に見たいものだけを、心おきなく見つめていられるのだ。

タカヒロとオメガの境目が、見る間ににじんで消えていく。淡い期待は蛍のような光になって、記憶の靄（もや）の中に、小さなきらめきを残した。

6　時のらせん

空のずいぶん高い辺りを、雲が渦巻きながら、すごい速さで流れていく。

今はまだ、時々太陽が顔を出してるけど、今夜辺りから大荒れの天気になるらしいと、ラジオで言っていた。こういうときのじいちゃんは本当に用意が早い。朝のうちから家のあちこちに、板を打ちつけてまわってる。僕が帰る前に、玄関までふさいだりしなけりゃいいんだけど、と、少し心配になる。

いつもどおり、自転車をカフェの前庭に止めた。ちょっとぎこちないリズムで釘を打つ音が響いてくる。テラスの方に回ると、軍手をはめたアルファが、慣れない手つきで、拾ってきた板を窓に打ちつけてるのが見えた。

「アルファ！　今日は店、休み？」

振り向いたアルファが、ひまわりみたいな笑顔を見せた。

「少しなら、お店開けられるよ。何か飲む？」

僕はポケットに手を突っ込んだままうなずいた。小走りにアルファが駆け寄ってくる。ドアの前で並んだ拍子に、ほんの一瞬、目が合った。去年まで、アルファの肩辺りで足踏みしてい

た僕の視線は、今、アルファのむらさきの瞳の高さを、軽々追い越そうとしている。
「最近、豆乳もお砂糖も入ってこないんだよねー」
ベージュのカップをテーブルにそっと置きながら、アルファが困り顔で言った。
「大丈夫だよ。ここのコーヒーはブラックのまんまの方が美味しいからさ」
僕がそう言うと、アルファはなんだか意味ありげに、ふふ、と笑ってみせる。
「なんだよぉ」
「最初に、一人でコーヒー飲みに来たときのこと、憶えてる?」
なんだか決まりが悪くて、僕はさりげなく目をそらした。
「憶えてるわけないだろ。いつの話だよ」
「まだ三年くらいしか経ってないよ。……あのときもお砂糖がなくって、タカヒロのコーヒーにだけ、メイポロの汁を混ぜてあげたんだよね」
「そうだっけ?」
僕は照れ隠しに笑うと、カップの中の黒い液体に視線を落とした。代わり映えのしない自分の姿が映っているように見える。けど、そう思うのは自分だけで、きっとアルファの目には、三年前とは全然違う僕の姿が映っているんだろう。
そのまま、ふっと、沈黙に呑まれる。うつむいてカップの中のコーヒーを揺らしていると、

アルファが言った。
「タカヒロ……、何か、あったの?」
視線を上げると、アルファの大きな瞳が、気遣うような色を浮かべて、僕の顔を覗き込んでいた。僕は小さくうなずく。正直に言えば、今日はアルファに聞いてもらいたいことがあって、ここまでやってきたのだ。
「アルファさぁ……、ミサゴのこと、憶えてる?」
「そりゃ、憶えてるよ。ちらっとでも出っくわすたんびに、大騒ぎだったじゃない。忘れようがないよ」
アルファはあっけらかんと笑ってみせた。僕はうつむいたっきり、次の言葉を、なかなか切り出せない。
「どうしちゃったの、今日は変だよ、タカヒロ……」
「……もうずいぶん長い間、見てないんだ、ミサゴ」
数秒の、どこか寂しい沈黙。
「もう、会えないのかな……。こんなことでふさぎ込むなんて、おかしいかもしれないけどさ」
「おかしくなんかないよ、全然」
アルファの優しい手が、ぽん、と僕の頭を柔らかく叩く。

「タカヒロ、もう、十三歳だっけ？」
僕は黙ってうなずいた。
「そっか……」
ふと視線を上げると、何かを言おうとしてためらっているような、もどかしげに動くアルファの薄桃色の唇が、目に入った。しばらく迷ってから、思い切ったように、アルファは言う。
「たぶん……、ミサゴにはもう、タカヒロが子供に見えなくなったんだよね」
そうだろうと、ここに来る前から分かってた。アルファにそう言ってもらうために、ここへ来たはずだった。
それなのに、実際に言われてみると、ショックが先に立って言葉が出ない。
ちょくちょく姿や気配を見せてくれたミサゴが、ぱったり現れなくなったわけが、僕には分かるような気がした。ミサゴが消えたのは、いつだったか珍しく霜の降りた朝に、自分はアルファのことが本当に好きなのだと、はっきり気付いた、あの後のことだ。
あの瞬間、僕は子供でなくなったんだろう。ミサゴを遠ざけたのは、外見が子供らしくなくなったことよりも、自分の内側に育ちはじめてる、人間の大人としての感覚なんだってことが、なんとなく分かる。
それでもやっぱり、ミサゴを失うのは悲しいことだった。
ひどい雨に降り込められた遠い日、ミサゴが夜通し僕を抱きしめて、暖め続けてくれたこと

を、まだ憶えてる。一緒に来い、と誘われたのに、どうしても行けない、とミサゴを見捨ててしまったことも。あのときのお礼をまだ言ってない。一緒に行けなくて悪かったと、一言でいいから謝りたい。それから、年を取らない、ということの悲しみ、たった一人で、時間の船に取り残されていくことの寂しさを、鮮やかに伝えてくれたことにも、ありがとうと言いたい。アルファと一緒に季節を刻んでいけと教えてくれたのは、他の誰でもない、ミサゴだったのだ。
「もう一度だけで構わないんだ。会って、話がしたい……」
そうつぶやいた瞬間、柔らかい吐息の感触を、首の後ろに感じる。
いつの間にかアルファが、僕の真後ろに立っていた。表情は見えないけれど、温かい視線が、僕の背中に注がれているのが何となく分かる。白くてしなやかな腕がすっと伸びて、座ったままの、僕の肩の辺りを包み込む。
「時間の流れは、一人に一つずつあって……」
僕をふわりと抱きしめたままアルファがつぶやいた。
「止まらないんだよね。だって、タカヒロは、人間なんだもの」
アルファの甘い香りが、僕の鼻腔（びこう）を満たす。高鳴るはずの胸が、今は締めつけられるように痛い。
あのとき、ミサゴを置いていったように、今度は、アルファを置いていくんだろうか。

そんなのは、イヤだ。

胸の奥から一気にせり上がってくる感情が言葉になりかけた瞬間、店の外から唐突に、急ブレーキの音が鳴り響いた。

私はあわててタカヒロから離れると、きょろきょろと辺りを見回した。タカヒロも不安げに立ち上がる。二人そろって玄関の方を振り向いたとたんに、カウベルがけたたましく鳴って、勢いよくドアが開いた。

「タカ、やっぱしここか」

おじさんだった。ほっとして、思わず顔がほころぶ。

「もう、びっくりさせないでくださいよー」

けれどもおじさんは笑わない。普段とは別人みたいに張りつめた雰囲気が、少し怖いくらいだ。

「ラジオ、ちゃんとつけてなきゃダメだ。空が荒れはじめてからじゃ遅え」

おじさんはカウンターの上に置いたラジオのスイッチを入れた。ラジオ・ハママツのアナウンサーが、接近中の巨大颱風の情報をレポートしている。いつの間にか、岬に吹く風はずいぶ

んと強くなっていた。

「へえ、もう家の方は戸を全部打ちつけてまうから、タカ、おめえ、先帰ってな」

いつもと違うおじさんの険しい感じに、少し気を呑まれたように見えるタカヒロが、あわててかぶりを振った。

「……ダメだよ、アルファを手伝わなきゃ。まだ、そこの窓がふさがってない」

「いいから、おめえは帰れ。アルファさんは大事なものまとめて、うちのスタンドに来な」

「えっ？」

心臓が、とくりと大きな音を立てた。タカヒロの表情も、心なしか緊張している。

「心配すんな。念のためだ。ここは海風が強えからよ。タカヒロ、あにしてんだ。早く行け」

「でも、アルファを手伝わなきゃ……」

「子供はさっさと帰って布団でもかぶってろ！」

おじさんの思いがけず大きな声に、飛び上がりそうになった。タカヒロの目がおじさんをにらみ返して、きりきりと吊り上がる。

叩きつけるようにドアを閉めて、タカヒロは行ってしまった。追いかけようとした私をおじさんの手が止める。

「母屋の雨戸は、もう全部打ちつけたのかよ？」

私はうなずいた。

「じゃあ、要るものだけまとめてきな」
「でも、カフェの方が……」
「俺が片づけといてやるから、行ってきな！」
そう言うなりおじさんは玄関からテラスに出て、残った窓をふさぎはじめた。なんだか、思ったよりずいぶん大変なことになりそうだ。私はあわてて、カフェと母屋をつなぐドアへ駆け込んだ。
結局持ち出したのは、ラジオと、時々弾いて遊んでいる月琴と、カメラに、当座の着替えを三日分、それだけだった。
私がもたもた準備している間に、おじさんは見事に窓をふさぎ終えて、私のバイクや風見魚まで納屋に片づけてしまっていた。お礼を言う間もなく腕を引っ張られて軽トラに乗せられ、あっという間におじさんのスタンドに着く。
「右端の雨戸には釘を打たねえから、出るときはそこからな。……心配すんな。なんとかなるからよ」
そう言っておじさんは、ガラス越しに頭を下げた私に軽く手を振ると、手早く雨戸を立ててしまった。向こう側で、釘を打ってる音がする。しばらくすると音が止んで、軽トラが走り去るのが分かった。

テーブルの上を見ると、マッチとロウソクが用意してあった。停電したときのこともちゃんと考えておいてくれたんだろう。本当におじさんには頭が上がらない。ありがたい、と思う気持ちが静かにあふれてきて、胸がジンと温まる。
小一時間ほどして、すさまじい風雨が雨戸に叩きつける音が響いてきた。雨戸が風圧にたわんでギリギリときしんでいる。何か飛ばされてきたのか、天井で派手に物の壊れる音がして、とっさに首をすくめた。鉄筋コンクリート造りだから建物自体は大丈夫だろうけれど、それでも不気味な家鳴りは、時間を追うごとに激しくなる。
超巨大颱風がこの辺りを直撃する、というニュースを三日前に聞いて以来、実のところ私は結構ワクワクしていたのだ。すさまじい雨風に耐えながら嵐が過ぎ去るのを待つというのは、かなりスリリングで楽しそうだなんて、子供じみたことを考えていた。
バカだよなぁ、私、とため息をついた瞬間、灯りがふっつり消えた。思わず悲鳴を上げてしまう。停電だ。どこかで電線が切れてしまったんだろう。この大風じゃ無理もない。おじさんの予想は大正解だった。ロウソクを灯して少しロウを垂らし、机の上に立てる。
西の岬は、大丈夫なんだろうか。
そう考えたとたんに、不安がむくむくと、胸の奥深いところでふくらみはじめた。しまった、と思っても、もう遅い。この癖が出ないように、いつも気をつけていたのに。
椅子の上で縮こまって、自分を護るように膝を抱えながら、物心ついたばかりの頃を、思い

出していた。あの頃の私はまだ、感情というものの扱い方がよく分からなくて、なんの根拠もない恐怖や不安が自分を追いかけてくるような、そんな錯覚にしょっちゅう捕まっては、オーナーを困らせていたのだ。

――また、アルファの怖がり癖がはじまったね。

オーナーはそう言って笑うと、眠れずに泣きじゃくっていた私を抱き起こして、不安のやっつけ方を、教えてくれた。

大きな手の、優しい指先で、ライターに小さな炎を灯すと、オーナーは問いかける。アルファを追いかけてくるものは、いったいなんだい？　と。動転している私は、怖いもの、としか、答えられない。そんな私を、オーナーはしっかり毛布でくるみ直すと、こう言うのだ。僕がついているから、怖いものには、絶対追いつかれない。だから、よく見てごらん。

その頃の私には、不安が、形のあるものに見えた。黒くて、モヤモヤしていて、時々ぜんまいみたいな手を伸ばしてくる。そう伝えると、オーナーは私の目の前で、ギュッと握り拳を作って、こう言うのだ。今、モヤモヤを捕まえたよ、小さくなって、手の中で潰れてるよ、と。そして大きな優しい手は、ライターの炎の中に、黒っぽい何かを放り込む。ほら、燃えて、なくなったよ。オーナーの目が、穏やかに笑う。もう、怖くないだろう？　私はうなずく。すっかり胸が軽くなって、あんなに怖かったのが、嘘みたいに思える……。

闇の中に揺れて輝く、ロウソクの炎を眺めながら、オーナーの遠い記憶を、たぐり寄せ続け

た。僕がついている限り、不安には絶対に追いつかれないと、そう言い切ってくれた、穏やかで、力強い声を思い出す。あの記憶がある限り、どんなモヤモヤが現れてもきっと大丈夫だと、心の底から、思えてくる……。

浅い眠りの後に、気だるい目覚めがやってくる。目覚めるたびに、ひとり言さえ聞こえないようなすさまじい雨風の音が、スタンドを取り巻いて響き続けているのが聞こえた。嵐の海の船の底にいたら、きっとこんな気分なんだろう。

起きていたってどうしようもないから、できるだけ眠るようにした。遠い記憶を掘り返していたせいか、オーナーの夢を、ずいぶん見たような気がする。オーナーの夢は一つだって逃さず憶えていたいのに、一たび眠ってしまうと、次に目覚めたときにはもう、思い出せない。

幾度目かに目覚めたとき、颱風の轟音は嘘のように消えていた。

机に突っ伏していた顔を上げて、ラジオの時計を見る。もう夕方だ。夢うつつのまま、丸一日が過ぎてしまったらしい。立ち上がって、一つ大きな伸びをすると、一番右端のガラス戸を引いて、おじさんが釘を打たずに残してくれた雨戸をこじ開けた。とたんに、少し強くて湿った風が吹き込んでくる。雨はもう止んで、空は明るい。

荷物を背負って、外へ出た。颱風一過、研ぎ立ての刃物みたいに、空気は鋭く澄み渡っている。空のはるか高いところを、細切れになって南へ流されていく黒い雲。その上に広がる、洗

いざらしの、鮮やかな青。
カメラを取り出して、一枚、ちゅん、とやる。辺りを見ながら、ゆっくり、歩いて帰ることにした。

スタンドの辺りは小高い丘の上だからなのか、道ばたに生えていた丈の高い雑草は、大男が踏んづけていったみたいにぺしゃんこに折れている。おかげで、視界がやけに広かった。うんと遠くの畑まで見渡せる。おじさんのところのキュウリは大丈夫だろうか。植えつけたばっかりの果物の苗なんかも、無事だといいんだけど。

途中、根こそぎ倒れてしまった古い木が通せんぼしているのを、岩登りの要領で乗り越える。ちょうどいい高さに座りやすい枝があって、タカヒロのお気に入りだった。誰にも言わなかったけれど、私も時々、登ってた。これがきっと、最後の姿なんだろう。記念に一枚、ちゅん、とやる。

三十分くらい歩いて、樹々や茂みの間に、ちらりと白ペンキの建家が見えたときには、さすがに胸が躍った。私の家、私の居場所。あのひどい嵐を、無事に耐え抜いてくれたのだ。岬の海風の激しさは半端じゃなかっただろうに、頑張り抜いてくれたのだ。

そう思ったら、いても立ってもいられなくなって、いつの間にか岬への道を駆けだしていた。舗装の割れ目や折れて落ちている枝なんかを飛び越えて、走り続ける。離れていたのはたったの一日なのに、なんだか懐かしくてたまらない。風にもまれてぐちゃぐちゃになった巨大

ススキの柵をかき分けて、ようやく前庭に出る。その瞬間、ただいま！　と叫ぼうとして、声を失った。

カフェが、ない。

かろうじて保ちこたえた母屋の、南側にくっついていたはずのカフェは、跡形もなく吹き飛ばされていた。

私の家、私の居場所。

膝から力が抜けて、芝の上に座り込んだ。その後のことは、あまり、憶えていない。

突然アルファが僕のうちにやってきたのは、あの強烈な颱風が行ってしまってから、一週間くらい経った日の、夕暮れ時だった。

バイクを庭に置いたまま、一緒に近所の入り江まで降りた。護岸壁に座り込むと、ズボンの布越しに、コンクリートの暖かさが、じんわり伝わってくる。

遠く伊豆の方へ、橙色にふくれた太陽が傾いて、入り江は一面、炎を流したみたいに輝いてた。凪いだ海に時々金色のしぶきが跳ねるのは、きっとボラか何かが騒いでるんだろう。

アルファの白い首筋に、入り江の光が映って、ふっと紅の色が差す。あんなことがあった

のに、遠くを見てる横顔は、いろいろ吹っ切ってしまった感じで、なんだか楽しそうにさえ見えた。
「なんて言えばいいのか、分からないけど……」
僕は精一杯慎重に言葉を選んで、話しかける。
「僕もさ、すごく、ショックだったんだ、お店のこと」
あの日、じいちゃんから話を聞いて、自転車をすっ飛ばしてカフェの様子を見に行ったときには、もうとっくに日が暮れていた。
白い月明かりの中に、跡形もなく崩れ落ちたカフェの残骸と、むき出しになった母屋の壁が、静かに、浮かび上がっている。
僕が、アルファに出会った場所。アルファに会いたいばっかりに、何度も通ったあの場所。たわいのない話も悩み事も、なんだって聞いてもらった、アルファと僕の一緒に過ごした時間が積み重なった、あの場所。
こんなに簡単に、消えてしまうなんて。
ハンドルを握る手が震えた。そのまま道ばたに、座り込みそうになった、そのとき。
かすかに聞こえてきたのは、アルファのつま弾く、月琴の音だった。
小さなトランクの上に腰掛けて、アルファはたった一人、まるで死んでしまった誰かに歌いかけるように、月琴を奏でていた。いつだったか、夕暮れのテラスで聞かせてくれた、素朴で

温かいメロディーが、月の前庭の真ん中で、まるっきり別の音楽みたいに、哀しく、切なく響く。
泣きわめくでもなく、憤るでもなく、淡々と月琴を奏でるアルファの背中は、まるで小さな子供みたいに、細く、頼りなく見えた。僕は少し離れたところから、その寂しい背中を、ただ、見つめていることしかできなかったのだ。
「お店ね、あれでも頑張った方だと思うの」
「……そうなんだ」
アルファは小さくうなずいた。
「もともと、母屋に簡単に建て増ししただけだったし、今まで、よく保ってたなって感じ。よく考えたら、母屋が助かっただけでも、十分ラッキーだったのかもしれないなぁ」
相づちをうてずに、ただうつむいた。また建て直せばいいよとか、きっと元どおりになるよとか、慰めの言葉を思いつきはするけれど、どれも簡単には口にできない気がする。アルファはふふ、と小さく笑って、遠くを見つめたまま、話し続けた。
「前にね、子海石先生が、自分の育った町が海に沈んだって話をしてくれたの」
ぬるい潮風がさっと吹いて、翠の髪を乱す。顔にかかった後れ毛を、薬指の先でそっとはらって、アルファは続けた。
「帰るところがなくなっちゃって、悲しいどころかさっぱりしたって、先生は言ってたの。で

も私は……。先生みたいにはなれなかったなぁ。本当に自分の身に起こってみたら、全然そんなふうに思えなかった」

うまく言葉が出てこなくて、何も言えずにうなずいた。振り向いたアルファの瞳は、話してることとは裏腹に、明るく澄んでいる。これじゃまるで、僕の方が慰められてるみたいだ。

「おかしいよね。母屋は残ってるのにね。なくなったのは、お店だけなのに……」

こんなとき、気の利いた台詞の一つも言えたらいいのにと思う。でも僕の頭じゃ、何も思いつかない。出てくるのは、当たり障りのない言葉ばっかりだ。

「……これから、お店建て直すの、大変だね」

「うん。おじさんにいろいろ聞いてみたんだけどね、とりあえず材木探してくるだけでも、かなり大変かな。第一、お金がないもんね」

「そっかぁ……」

「でも、稼ごうにもこの辺りじゃ仕事もないし」

「そうだね……」

「だから、しばらく出稼ぎの旅に出ようと思うんだ」

「えっ？」

そう言ったきり、僕は言葉を失った。

「そんなにビックリしなくてもいいじゃない。お店もなくなっちゃったし、ちょうどいい機会

だからね。この際、あっちこっち見て回ろうかと思ってるの。たぶん……、半年か、一年か、それ以上」

アルファは、心から楽しそうに笑ってみせた。旅の前のワクワクが、にじみ出てくるみたいな顔だった。僕が今、どんな思いでいるのかなんて気にも留めていない、無邪気な表情。自分がいなくなることで、誰かが寂しがるなんて、まるで想像もできない、脳天気な微笑み。

思い切り怒鳴ってやりたかった。泣きわめいて、地団駄でも踏んで、行かないでくれと駄々をこねてやりたかった。

それなのに、僕の口から出たのは結局、女々しい問いかけだけだ。

「どうしても、行くの？」

アルファは、なんのためらいもなく、こくりとうなずいた。どう見たって、もう心は決まっている。それでも、言わずにはいられなかった。

「なんで、わざわざ遠くへ行かなきゃならないの。バイクで南町の方にでも働きに行けばいいじゃないか。それで、少しずつ稼いで、ちょっとずつ店を直してさ。そうすれば……」

アルファは戸惑ったような顔つきで、少しの間考え込んだ。

「……やっぱり、それじゃ、ダメだなぁ。私は、見たことのないものを、見に行きたいの。この足で、行けるところまで行ってみたいの。上手く説明できないんだけど、どうしても、そうしたいんだ」

「そう、なんだ」
何も言い返せないまま、自分の膝頭に視線を落とした。もう、どうすることもできない。アルファを絶対に止められないことを、僕は心のどこかで知っている。
「それでね、タカヒロ。もしよかったら……」
うつむいた僕の目の前に、アルファは銀色に光るものを差し出した。
バイクの、キーだ。
「留守の間、私の代わりに、乗ってやってくれないかな？」
「どうして？」
「ずっと動かしてた方がバイクにもいいし……。それにタカヒロにもそろそろ、ちょっと遠出できるくらいの足は必要でしょ？」
「まだ無理だよ、バイクなんて」
「そんなことないよ。タカヒロの背丈、もう私と同じくらいだもん。バイクも楽勝だよ」
ああ、アルファも気づいてたんだ、と思った。昔はずいぶん上に見ていたアルファの瞳を、いつの間にか同じ高さに見て、そして遠からず、追い越す日が来るに違いない。
たぶんその頃、彼女はここにいない。どこか、遠い場所を旅しながら、僕のことなんかきっと、思い出しもしないんだろう。
……そう考えたとたんに、アルファがいなくなってしまうということが、突然鮮やかに実感

できて、子供みたいに泣き出したい気分になった。西の岬へ自転車を飛ばしても、そこにアルファがいないのが、じきに当たり前になる。そんな日々を、いったいどうやったらやり過ごせるのか見当もつかない。
せめて、少しでもアルファにつながってるものが側にあれば、助けになるだろうか。
「……やっぱり、バイク、乗ってみようかな」
アルファの目が、パッと明るくなる。
「よかった。大切に使ってやってね」
そう言うなり、アルファは僕の左手をつかんで、鍵を握らせた。
「どうして？　まだしばらくは使うだろ？」
びっくりしてそう問いかけると、アルファはちょっと視線を落として、かぶりを振った。
「明日にはもう、出ちゃうんだ。もたもたしてると、めんどくさくなっちゃうからさ」
思わず、渡された鍵と一緒に、アルファの手を、ぎゅっと握りしめた。
今が、最後なのだ。
次にはもう、いつ会えるか、分からないのだ。
小さな手を握りしめたまま、僕はバカみたいに、ひたすらアルファを見つめることしかできなかった。きらめく翠の長い髪、夕空の最後の色によく似た、むらさきの瞳。茜色の西日に染まる、白い頬。今の今まで、近くにいるのが当たり前だとばかり思いこんでいた、大切な人。

ふいに、アルファの眼差しが、悲しいような、優しいような、不思議な色に染まる。
静かににじり寄ると、僕の肩先に、そっと、顔を埋めた。
くぐもった声が、肩の辺りから、骨伝いに響いてくる。
「ごめんね。ちょっとだけ……、こうさせてね」
うなじの辺りから立ち上ってくる、甘い香り。一瞬で蘇ってくる、鮮やかな記憶のかけら。赤いお湯の風呂、霜の降りた朝。銀色の光の中で、はしゃいでいた美しい人。
いっそ、抱きしめてしまおうか。
自由なままの右腕を、アルファの背中にまわしかけた、その瞬間。
頭の中の、どこか覚めたところで、問いかける声がした。
もしも、ここにいるのが、じいちゃんだったら。子海石先生だったら。アルファはいったい、どうするだろう？
……やっぱり、こんなふうに抱きついて、別れを惜しむんじゃないだろうか。
僕がアルファを抱きしめる腕にどんな意味を込めたとしても、アルファは絶対に、それに気付かない。気付くぐらいなら、はじめっから、帰ってくるかどうかも分からないような旅に出たりはしない。
宙に浮いた右腕を、そっと元に戻した。
「ひどいヤツだ……」

自分にも聞こえるか聞こえないかのかすれ声で、つぶやいた。え？　とアルファが聞き返す。なんでもないよ、と、笑ってみせる。
——きっと、忘れてやる。アルファのこと、何もかも。
その瞬間、そう心に決めた。
紅の空に幾重にも弧を描くトンビの声が、一際高く響いて、入り江の赤い水面に、寂しい波紋を残していった。

それ以上、同調しているのが辛くなって、オメガはそっと、タカヒロの意識から離れた。
現実の世界のアルファは、もう決してむらさきの瞳を開くことはないのに、夕凪の夢の中でまで彼女を喪うなんて、到底耐えられない。
それでもオメガは、記憶の靄の中から抜け出ようとはしなかった。どんなに痛い思いをしても、この世界との接続だけは、絶対に切りたくないのだ。自分は半ば、夕凪の時代の住人になりかけているのかもしれない、それでも構わないと、オメガは思った。
記憶の濃霧を泳いで、必死にアルファの気配を探す。次第に見えてくる、小さな後ろ姿。たった一人、丸い、帆布でできたリュックを背負って、オメガがやってきた道のりとは反対に、

北へ向かって歩いてゆく。オメガは彼女の意識にぴったりと寄り添った。これでまたしばらくは、一緒にいられる。アルファが美しいと思うものに、オメガも心を震わせることができる。

そこから、ひたすら歩き続ける旅の記憶がはじまった。遠い昔に存在した町と街道をめぐり、人々の集まるところでは少し留まって日銭を稼ぎながら、アルファは着々と、彼女のフィールドの外を歩み続ける。オメガにしてみれば考えられないような大勢の人々と、日々言葉を交わし、関わり合いながら、アルファの中に新しい記憶が見る間に積み重ねられていく。新鮮な驚きと、わずかな不安と、そして、数え切れない喜びと。

一年半が過ぎた頃、アルファは再び、西の岬へと下っていく道をたどっていた。辺りの空気に、次第に潮の匂いが濃くなっていく。夕凪の記憶の源、あの界隈の懐かしい気配が、はっきりとオメガの胸にも迫ってくる。

その感覚と同時に、何かが強烈に自分を引きはじめるのを、オメガは感じていた。

また、タカヒロだ。居心地のいいアルファの意識の中から無理矢理引きずり出して、タカヒロは容赦なく、オメガを自分の中へ取り込もうとする。

——よっぽど、僕と彼は似てるんだろうか。

彼の悲しみまでリアルに背負わされるのはまっぴらだと思うのに、タカヒロの想いを感じ取ることをやめられない。むしろ今は、彼の感情を望んでいるような気さえしている。何もない世界へ戻るくらいなら、痛みでもいいから、在った方がましだ。

陽射しがだんだん橙色に染まって、閉じたまぶたの裏に、不思議な光の輪を描く。

目をつむったままでも、日がもうだいぶ、西に傾いているのが分かった。ビーチチェアに張った帆布には昼間の熱が残って、まだほんのりと温かい。

じいちゃんのガススタンドで、店番をして一日が過ぎてしまった。店番とはいっても、朝に草むしりをしたっきり、後は居眠りばっかりで、客なんて一人も来ない。半年くらい前から店を手伝うようになって分かったのだけど、このスタンドの客は八割方アルファだったのだ。そのアルファも、旅に出たっきり、帰ってこない。

会いたくてたまらないとか、寂しいとか、そういう気持ちは、ずいぶん前に消えてしまったなぁ、と、ぼんやり考える。今、まぶたの裏に彼女の姿を描いてみようとしても、面影はどこか曖昧で、もう、細かいところまでは思い出せないのだ。

たぶん、アルファのことは、卒業した……というか、乗り越えたと言ってもいいんじゃないか、と思う。もしまた会うことがあって、そのとき気持ちが揺れたりしなければ、きっともう、二度と痛い思いはしなくて済む。

そんなことをつらつら思い返していたせいか、日が陰った拍子に、なぜか彼女の匂いだけ

が、鮮やかに蘇ってきた。何に似ているのか未だに上手く言えないけれど、花みたいな、果物みたいな、とにかく優しい、柔らかな匂いだ。懐かしくて、心地よい……。

ふと、違和感が胸によぎった。

匂いを、頭の中で再現できるわけがないじゃないか！

……ビーチチェアの上に跳ね起きて、目を見張る。息が止まるかと思った。

驚いたのは、向こうも同じらしい。

今にも、わっ！　とつかみかかってきそうなポーズで、そこに立っていたのは、アルファだった。

「お……、おかえり」

あんまり突然だったんで、声が喉に引っかかる。アルファは少し、はにかんだような微笑みで答えた。

「ただいま」

照れ隠しに頭をかきながら、アルファが笑う。

「失敗しちゃったよー。ビックリさせようと思ってたのに」

思い出せなかった彼女の細部が、アルバムのページを強い風がめくっていくように、一気に蘇ってきた。面影も、声も、雰囲気も、何もかも、前のままだ。出ていく前と、全然変わらない。

「お店、手伝ってるんだね。えらいなぁ」

「……うん。じいちゃんと半々くらいだけどね」

「おじさん、元気？」

「ぴんぴんしてるよ。今日は畑をやってるから、こっちには来ないと思うけど」

何気なくアルファの足下に視線を落とすと、泥に汚れて黒ずんだ、デッキシューズが目に入った。アルファと一緒に、いったいどこまで歩いたんだろう。何も変わっていないように見えても、実のところ、アルファは本当に遠くまで行ってきたんだな、と実感する。

「疲れたろ？　椅子、持ってくるよ。飲み物も要る？」

「要る！　もう、喉からっからだよー」

僕は事務所の方へ走った。たたんだパイプ椅子のほこりを払って引っ張り出す。冷蔵庫にはあいにく、麦茶しかない。

麦茶をアルミカップに注ぎながら、案外冷静な自分に気がついた。

突然帰ってきたからびっくりはしたけれど、でも、一時の驚きが過ぎてしまえば、わりと穏やかな気持ちで彼女の帰郷を受け止めているのが分かる。ドキドキするわけでも、涙が込み上げてくるわけでもない。我ながら意外だけれど、これが現実だ。

どうやら僕は、本当にアルファを卒業してしまったらしい。

寂しいような、ほっとしたような笑みが、自然に湧き上がってきた。アルミカップとパイプ

椅子を持って、事務所を出る。
夕暮れの、淡い橙色の中にアルファが立っていた。きっと懐かしいんだろう。スタンドのまわり、草ばかりの風景に、ゆっくり視線をめぐらせている。ほっそりと立つ姿を、やっぱり今でもきれいだとは思うけれど、いつもアルファを見るたび感じていたような、息苦しいのに心地よいあの不思議な感じは戻ってこない。大丈夫だ。そう自分に言い聞かせて、ゆっくり近づいていく。
カップを差し出した僕を、振り向いたアルファが見上げた。
目があった瞬間、二人とも何かに呑まれたように、声を詰まらせる。
僕はとっくに、アルファの背丈を追い越していたのだ。
僕の目の高さより少し下に、アルファのつむじがある。ただそれだけのことなのに、二人とも、しばらく何も言えずに、ただお互いを見つめていた。アルファの目が――どうしてだか、何かをなくした子供みたいな、途方に暮れた色になる。
そのままでいると、大丈夫だったはずの気持ちに揺れが来そうな気がして、あわててお茶を渡した。一口飲むと、ぱっと光が灯ったように、アルファが笑顔になる。
椅子を並べて、しばらくアルファの旅の話を聞いた。話しながら、時々アルファの視線が、僕の喉元辺りに落ちてくるのに気付く。
「何かついてる?」

喉をさすりながら尋ねると、アルファが小首をかしげて言う。
「なんだか、声、変わっちゃったよね? 喉仏も出っ張ってるし……」
アルファが首をひねるのも無理はなかった。アルファが留守だった一年半の間に、僕は声変わりしたのだ。
「かすれて変な声になったから、初めは、風邪ひいたのかと思ったんだよね。したら、じいちゃんが、違うって言うんだよ。この後、大人の男の声に変わるんだ、これでタカヒロも一人前だ、って」
そうなんだ、と優しく細めたアルファの目には、やっぱり、何かをなくしたような色が揺れていた。
「なんだかもう、お姉さん風、吹かせられないなぁ……」
アルファのつぶやきが、夕暮れ時の少し冷たい風の中に流れていく。気づけば辺りは、淡い藤色(ふじいろ)に沈んで、日暮れが間近だった。
「そろそろ帰らなきゃ。お茶、ごちそうさまね」
僕にカップを預けて、アルファは立ち上がった。
「家まで送ろうか? 今日、車なんだ」
「へえ、もう運転できるんだ」
「バイクの後、すぐにね。じいちゃんに教えてもらった」

「すごいね」
アルファはふっと、僕に背を向けた。西の岬の方を、ぼんやり眺めている。リュックを背負った細い肩が、昔よりもずっと華奢に見えるのは、僕の方が大きくなったせいなんだろう。そんなことを考えていると、不意打ちみたいに、アルファは突然、振り返った。
視線が絡んだ瞬間、何かがことりと、はまりこむ音が聞こえた気がする。
振り向きざまの、少しはにかんだような笑顔。薄桃色の、かすかに開いて、何か言いたげな唇。つんと尖った、可愛らしい鼻先。
そして何よりも——何よりも、ほんのりとツヤを帯びて底深い、むらさきの、澄み切った瞳。
しまった、と思ったときには、もう捕まっていた。
僕の戸惑いになんかまるで気づかずに、アルファは言う。
「やっぱり、今日は歩いて帰るよ。また今度、送ってね」
じゃあ、と手を振ったきり、振り向きもせずアルファは行ってしまった。
僕はと言えば、遠ざかる一方の彼女の背中から、一秒も目を離すことができない。夕日の中に消えていく姿を、見送って、ひたすら見送って……。やがて、彼女の姿は草に紛れて見えなくなった。まるで、永遠のような数分間。
やっぱりひどいヤツだ、とつぶやいて、僕はへなへなとパイプ椅子に腰を下ろした。去った

ばかりの人のぬくもりが、まだほんの少し、淡い香りと一緒に、残っていた。
——すっかり卒業した、なんて言ったバカはどこのどいつだ。
カッとなって、急ブレーキを踏んだ。入り江の見える丘の上で、きしみながら車が止まる。まっすぐ家に帰るはずが、うろうろと走り回って、いつの間にか日がとっぷり暮れてしまった。サイドブレーキを引いて、窓から顔を出してみる。しょっぱい風が頬を撫でて、振り向いた西の空に、三日月と宵の明星が、肩を並べて光っている。
あんなに長い間離れていたのに、結局僕は、アルファをちっとも忘れてなんかいなかった。振り向いた瞬間の眼差し一つで、捨てたはずの想いが、こんなにも容易に蘇る。
車を降りて、道ばたの草むらに腰を下ろした。そのまま寝転がって、群青の空を見上げる。明るい星がいくつか、またたきはじめている。もう少し待てば、湧き上がるような星々に埋め尽くされ天球は光に満ちて、僕の想いも、また……。
いずれ、抑えられないところまでふくれあがるのだろう、そう思った。
もしも、——万に一つもないだろうけれど——、もしもアルファが僕の想いに応えてくれたとして、その先はどうなる?
僕はあの人を追い越して、大人になって、どんどん老いていくだろう。彼女と一緒に歩みたいとどんなに願っても、永遠に変わらないあの人はただ、老いて死んでいく僕に、いつか置き

去りにされる。人間が減っていく一方の、この寂しい世界に。
――いや、そうじゃない。僕が本当に恐れているのは……。
力任せに、かたわらに生えていた草をちぎり取る。一瞬、鋭い青の匂いがする。
先に死んでいく僕を、アルファはいつか忘れるだろう。アルファが何年生き続けるのかは分からないけれど、確実に、僕が生きていたことさえ、忘れ去られる日が来るだろう。アルファの頭がどれだけの記憶を貯めておけるとしても、その記憶の中に僕が存在するとしても、僕を思い出さなくなる日は、確実にやってくる。確実に。
僕には、それが耐えられない。
一緒に季節を刻んでいけば、同じ船の上に乗ったことにならないか？　そんな子供じみた思いつきに満足していた昔の自分が、滑稽だと思った。
アルファは決して、僕を同じ船の上に乗せられないというのに。
――あの人から離れなければ。取り返しがつかなくなる前に。
引きちぎった草を、思い切り噛み潰した。苦い汁に、舌が痺れる。痛みにも似た苦みは、もっと大きな痛みをごまかしてくれて、むしろ、心地いいくらいだった。
例年に輪をかけて、暖かい正月がやってきた。前の正月にアルファはいなかったから、初日の出を一緒に迎えるのは二年ぶりだ。

夜明け前、軽トラでアルファを拾いに行った。助手席に乗って、なんだか変な気分だと、しきりに首をかしげながらアルファが言う。無理もない、と思う。バイクの後ろで、背中にしがみついているしか能のなかった坊主が、今年は車に乗って迎えに来たのだ。なんだか化かされてるみたい、とおどけてみせるアルファに、化かしてないよ、と笑い返した。これがおとぎ話ならば、葉っぱ一枚外すだけで簡単に少年の姿に戻れるだろう。僕はもう、戻れない。
東の岬の人出は年々減っている。今年はとうとう、地元の人の炊き出しがなくなった。集まっているのも、せいぜい二十人がいいところだ。後始末が面倒なのか、焚き火をする人もいない。
じっと立ったまま待っていると、冷えが地面から這い上ってくる。ブルブルっと小さく震えて、アルファが腕を抱くような仕草を見せる。
「寒くない？」
背中から、声をかけた。細い肩越しに、アルファがちょっと振り向く。
「そうだね……。日が出るまで車に戻ってた方がいいかなぁ」
「もうすぐだよ。もう空がだいぶ明るい」
「じゃあ、もうちょっとだけ我慢しようかな……」
何も言わずに、上着の前を開いて、背中からアルファを包み込んだ。
腕の中で、アルファが一瞬、息を詰めたのが分かる。

「……ちょっとね、前が、寒くてね」
あさっての方を見ながら、さりげなく嘘をついた。
「しばらく、こうしててもいいかな」
アルファは黙って、うなずいた。
最初にここへ来たときのことを、アルファは思い出してくれただろうか。
あのとき、僕の頭にぴったりと、アルファはあごをのせていた。もう何年も過ぎた今、アルファの翠の髪は、僕のあごのすぐ下で、薄明の光にうっすらと輝いている。柔らかに立ち上ってくる、独特の香りは昔と変わらない。僕は相変わらず、それがどういう香りなのか、上手く例える言葉を見つけられずにいる。
「あっ」
アルファが小さく声を上げた。日の出だ。
対岸の山並みの向こうから、堰を切ったようにあふれ出す、金色の光。光の風にさらされているような心地よい感覚が、僕ら二人を包み込む。
告げるなら、今だ、と思った。
「……アルファ」
「何？」
「僕、西の国へ行くんだ」

「へえ、すごいねぇ……。いつから？」
「……明日から」
「ずいぶん、急なんだね。帰りはいつ頃？」
少しためらって、それからきっぱりと、答えた。
「もう、戻ってこないと思う」
ぐっと、アルファが息を呑み込む気配が、背中越しに伝わってくる。
長い沈黙が、僕たちを静かな水のように浸してゆく。太陽の方を向いたまま、アルファが今どんな顔をしているのか、僕には分からない。
しばらく待ってようやく、アルファのかすれた声が聞こえた。
「どうして……」
できれば今は、アルファの顔を見たくない。細い体をしっかりと抱きかかえたまま、僕は言った。
「仕事を、見つけるんだ。飛行機とか、車とか、機械を触れる仕事」
それは半分本当で、半分嘘だった。アルファの、細く、長いため息。頼りない声が、独り言みたいにつぶやく。
「……バイクなんて、貸してあげるんじゃなかったかなぁ」
朝日が見る間に東の空を駆け昇る。日の光はますますまぶしく、僕たちを包み込んでいく。

新しい日々がはじまるのと入れ違いに、懐かしい日々が、遠ざかろうとしている。
「西の国の、どの辺に行くの？」
「ハママツっていう、大きな町。富士山よりも、ずっと向こうだよ」
「すごく、遠いね」
うん、とうなずいた拍子に、アルファの髪が、僕の鼻先をくすぐった。
「寂しくなるなぁ」
「できるだけ、暇見つけて、たまには遊びにくるようにするから……」
アルファが、小さく笑う。その振動が、抱きしめた腕に伝わってくる。
唐突にアルファが、僕の腕の中で器用に身をひるがえして振り向いた。あのむらさきの瞳を大きく見開いて、まっすぐな視線で見上げてくる。
少したじろぐ僕の脇の下に、細い両腕がするりと入りこむ。あっと思う間もなく、渾身（こんしん）の力で抱きしめられていた。
「そういうこと言うと、本気で待っちゃうよ？」
胸の辺りから、アルファのくぐもった声が響いてくる。
「ねえちゃん、待つ（つ）ことだけは、得意技だからさぁ」
その言葉に胸を衝かれたような気がして、僕は思わず、アルファを抱きしめ返した。
細い体の線が、いつになく、頼りなげに思えた。薄い背中にあてがった手のひらに、我知ら

新しい日々がはじまるのと入れ違いに、懐かしい日々が、遠ざかろうとしている。
「西の国の、どの辺に行くの？」
「ハママツっていう、大きな町。富士山よりも、ずっと向こうだよ」
「すごく、遠いね」
うん、とうなずいた拍子に、アルファの髪が、僕の鼻先をくすぐった。
「寂しくなるなぁ」
「できるだけ、暇見つけて、たまには遊びにくるようにするから……」
アルファが、小さく笑う。その振動が、抱きしめた腕に伝わってくる。
唐突にアルファが、僕の腕の中で器用に身をひるがえして振り向いた。あのむらさきの瞳を大きく見開いて、まっすぐな視線で見上げてくる。
少したじろぐ僕の脇の下に、細い両腕がするりと入りこむ。あっと思う間もなく、渾身の力で抱きしめられていた。
「そういうこと言うと、本気で待っちゃうよ？」
胸の辺りから、アルファのくぐもった声が響いてくる。
「ねえちゃん、待つことだけは、得意技だからさぁ」
その言葉に胸を衝かれたような気がして、僕は思わず、アルファを抱きしめ返した。
細い体の線が、いつになく、頼りなげに思えた。薄い背中にあてがった手のひらに、我知ら

ず力がこもる。
けれども、今、僕を失うことを、アルファがどんなに悲しんでくれたとしても、今のアルファがどんなに、去っていく僕を惜しんでくれたとしても。
――あなたは、いつか僕を忘れるだろう。確実に。
せめてこの瞬間の記憶だけでも、アルファの胸にしっかり刻まれるようにと祈りながら、僕は、二度と会うことはないだろうその人を、ただ静かに、抱きしめ続けた。

私を西の岬に送り届けると、タカヒロはあっさりと、車で引き返していった。
前庭に突っ立ったまま、小さくなる軽トラを見送る。エンジンの音がだんだん遠ざかって、やがて、岬をおおうのは、穏やかな波の音だけになる。
林の向こうに消えていく、でこぼこの土の道。朝日がつくる轍（わだち）の影を見つめながら、私は、もう二度とその道を引き返すことのない、少年のことを思う。
たまには帰ってくる、と言われたあの瞬間、もう帰ってこないのだということが、びっくりするくらい鮮やかに分かった。
ハママツ、というのは、とてもにぎやかな町なんだと、いつだったか聞いたことがある。き

っとそこに、タカヒロの新しい生活があるだろう。私が旅に出ていた間そうだったように、毎日毎日新しいことに触れて、知らない人に出会って、きっと、はるか東にある田舎のことなんて、思い出す暇もないに違いない。そのうちに、帰る場所があったことさえ、すっかり忘れてしまう。
……それでいいんだと、思うことにした。景気づけに思いっきり伸びをして、何気なく、店の方を振り向く。
店をきちんと建て直すには、まだ資金も材料も足りなかった。冬もどきが来ているとはいえ日中は暖かいので、簡単に柱を立てて波板の屋根をのせただけのテラスで営業している。
ぼんやり眺めていると、波板の下に、壊れる前のお店の姿が、うっすらと浮かび上がって見えるような気がした。
二つのテーブル、大きな窓、カウンター、カウベルのついた、重たい木のドア。ベルを鳴らして、入ってくるお客さんたち。
……タカヒロ。
まだ子供の頃の、タカヒロ。
二人、テーブルで向かい合って、いろいろなことを話した。ミサゴのこと、釣りのこと、おじさんのこと……、とりとめのないことをしゃべりながら、かけがえのない時間を、この場所に積み重ねた。あの頃、お店のコーヒーは、八割方タカヒロが飲んでいたような気がする。い

つの間にかテーブルに突っ伏して、寝入ってしまうこともよくあった。子供らしい、無邪気な寝顔。目を閉じればまざまざと蘇る、少年の日の、タカヒロ。

「早いなぁ……」

ひとりごちた声が、少しかすれていた。ゆっくりと、朝露に濡れた芝の上に座り込む。

「早すぎるよ……」

そのまま、抱きかかえた膝に、顔を埋めた。鳴き交わす鳥の声と、相変わらずの波の音を聞きながら、私はもうしばらく、行ってしまった少年を惜しむことを、自分に許してやろうと思った。

それきり、オメガを強く引きつけ続けていたタカヒロの意識は、アルファの記憶の中から、跡形もなく消えた。

あれほど強かった想いが、まるで、初めからなかったもののように、あっけなく消え去ってしまったのを、オメガは少しの間、呆然として眺めていた。どこか裏切られたような気分にさえなった。

身勝手なタカヒロの残していった波紋の中に、オメガだけが、取り残されてしまったのだ。

なす術もなく、たったひとりで。

記憶の霧の中から、オメガはそっと、残してきた体の方を見上げてみる。

薄靄の向こうに、カウンターを挟んで、唇と唇を触れ合わせている、二人のロボット。抜け殻になったオメガと一緒に、頬杖をついて少し傾いた、アルファの姿が見える。

あの場所へ戻っても、待っているのは、もう二度と動くことのないアルファだけだ。

夕凪の記憶が、いつまで続くのかは分からない。生きて動いているアルファの側にいられる時間も、そう長くはないだろう。

どっちにしたって、もうじきアルファには、会えなくなるのだ。

それでもオメガには、タカヒロが放り投げていった強い感情の揺らぎを、投げ棄ててしまうことができなかった。

タカヒロの意識に同調するたび、驚くほどに心が大きく揺さぶられたことを思い出す。経験したこともないような切実さで、誰かを本当に好きなのだと感じたことも。

ただそれだけのことが、自分にとっては何よりも尊かったのだと、抜け殻になった自分の姿を見上げながら、オメガは思った。

『人の夜』を生きていた頃の自分には、本当に、何もなかったのだから。

いっそこのまま、アルファの記憶の中に溶け込んで、記憶の最期と共に、自分も消えてしまおうか？

オメガは本気でそう思った。夕凪の時代を一緒に生きた、オメガにとってはすでに懐かしささえ感じる、あの人々と混ざり合って消えていけるのなら、こんなに幸せなことはない。

それは可能なことだろうか？

オメガはアルファの記憶の中へ、一層深く、入り込む。二度と戻ることができないように、深く、深く、記憶の底深い靄の中を、どこまでも分け入っていく……。

やがて見えてきたのは、初めて夕凪の世界へ潜ったときに見たのと同じ、青い空と海、その真ん中へ頼りなく突きだした、岬の全景だった。風に波打って踊るような緑の樹々、広がる野原に呑まれかけた、小さな白い家。空の高みからゆっくりと降りていきながら、アルファの感情も、残された他の人々の思いも、何もかもが手に取るように感じられることに、オメガは気づいた。今、オメガの意識は、完全に夕凪の日々の中にあった。初めから、こうしようと思えばできたのかもしれない、オメガはそう思う。理由は未だに分からないけれど、アルファの記憶には、アルファの想いだけでなく、周囲の人々の感情までが、鮮やかに記録されていて、オメガは自在に、全ての記憶を読み出すことができるのだから。

7　宙(そら)を行く者

「晴れてくれてよかったわ」

子海石先生はそう言って、コーヒーカップを受け取った。見上げれば、ウルトラマリンのペンキで塗り込めたような、目に痛いほどの青い空。

今日は前庭に出て飲もう、と言い出したのは先生の方だった。どうしても私に見せたいものが現れるから、と言うのだけれど、それがいったい何なのかは、もったいぶって教えてくれないのだ。

「テラスがあればよかったんですけどね。手が回らなくて」

前庭から、真新しいカフェを眺めてみる。半年ほどかけて少しずつ建て直してきた店が、最近やっと形になってきた。とはいえ、使ってみるとあっちこっちにボロが出るものだから、最近はコーヒーを淹(い)れるよりも、金槌(かなづち)を握って修理している時間の方がずっと長いのだけれど。

岬を、爽(さわ)やかな風が吹き抜けていく。汗ばんだ首筋や背中に、心地(ここち)よい感触。こうして日に当たっていても不思議と暑さは感じない。足下に吹き寄せられてきた紙くずを、子海石先生がそろそろとしゃがんで拾い上げた。ふと、最近の先生は、何をするにも動作がゆっくりになっ

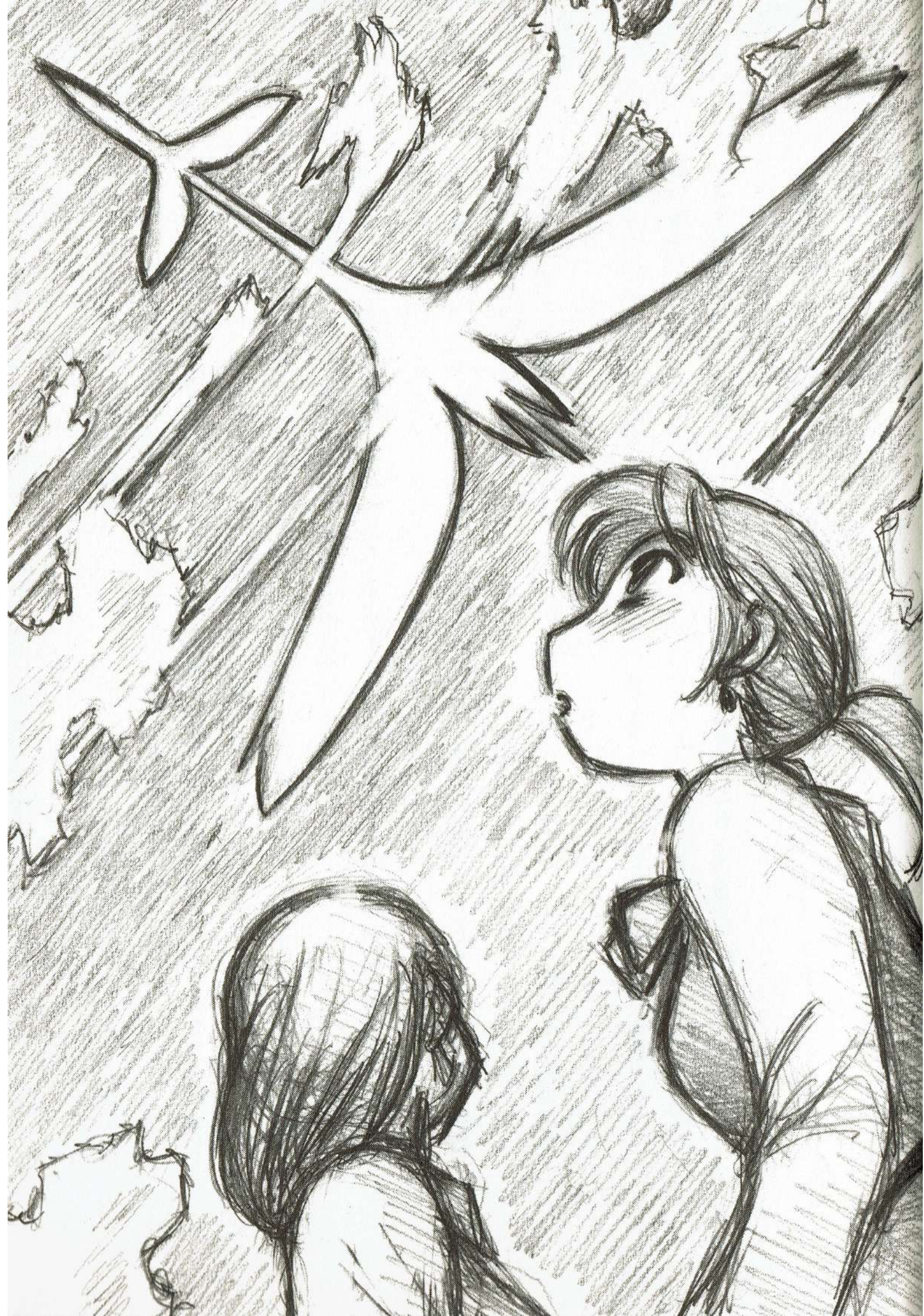
たな、と気付く。
「この頃、よく買い出しに出るのね」
先生が拾ったのは、この前店を留守にしたときに使った、ドアの貼り紙だった。
「はい。時々、お店がお休みになっちゃいますけど……、すみません」
「いいのよ。でもなんでわざわざヨコハマまで？」
「だんだん、南町に豆が入らなくなってきてるんです」
「そう……」
先生はかすかに眉を曇らせた。
「たまたま、畑やってる人たちが忙しいだけですよ。飲む方のコーヒーなんて、なくても全然困らないものですし……」
冗談めかしてそう言ってはみたけれど、先生は笑わない。
「畑も、作り手も減っているのね」
少しためらってから、うなずいた。ここ何年かで、なじみの農園が次々に消えている。今のところはまだ二、三軒残っているけど、そこのオーナーも、みんなお年寄りだ。この先どうなるかは分からない。
「でも、なんとかなりますよ、きっと」
私は唇の端をきゅっと上げて、ウルトラマリンの空を見る。コーヒーがなくなったとして

も、たぶん別の、美味しい何かが現れる。私は、それを出せばいい。飲み物がなくなったら、美味しい水でも探しに行こう。カフェを続ける方法は、きっといくらだって見つけられる。
「あなたがそう言うと、本当になんとかなりそうな気がしてくるから、不思議ねえ」
先生は微笑みながら、カフェの屋根の向こう、北の空を見上げた。
「もうそろそろのはずなんだけど……」
私は先生の視線の先を追って、目を凝らす。
北の空の果てに、ふいに現れた、小さく光るもの。青い空をくりぬいたように真っ白な何かが、翼の端を時々光らせながら、こっちへ向かってくるのが見える。
「……あれは、飛行機？」
「アルファさんにはもう、はっきりと見えてるのね。まあ、飛行機みたいなものよ」
だんだん近づいてくる、鳥によく似た不思議な影が、遠い記憶の鍵を、かちりと回した。
「あれ、一度だけ見たことがあります。もう、何年も前だけど……」
富士山の向こう側を、南から北へ横切っていった、白い影。あのとき、おじさんも一緒にいたのだけれど、気のせいだ、雲がそんなふうに見えるんだって、笑われておしまいだった。あんまり遠すぎて、おじさんの目では、はっきり見えなかったのだろう。
「たぶん、南半球から帰ってきたところを見たのね。ちょうど、航路の変わり目だったんでしょう」

ああ、やっと見えてきた、と先生は背伸びして、懐かしそうに目を凝らす。
「今度は、さかさまよ。北の大陸の方をずっとまわっていたのが、南航路へ降りていくの。あれが、こんな辺境を通るのは、航路を変えるときだけだわ」
その飛行機に似た不思議なものは、ゆっくりと空を滑りながら、よほど高いところを飛んでいるのか、まったく音を立てることがなかった。空をおおうようにして近づいてくるそれは、地上にあったなら、どれほど大きなものだろうと想像して、私はため息をつく。
「あれは……、いったい、何なんですか」
「ターポン、って呼ばれているのよ」
「ターポン……」
まるっこい、愛嬌のある響きは、頭上にせまってくる、巨大で、荘厳な影には、なんだかふさわしくないような気がする。
「あの中には、かつて地上にあったありとあらゆる生命や、文明の情報が乗っているの。地球の記憶を、圧縮したようなものかしらね」
「地球の、記憶……、ですか？」
「人間の創り上げた世界が、潮の引くように、ゆっくり消えていくんだと分かったときに、せめてその記憶のひとかけらでも残そうとして、打ち上げられたものなのよ」
ふと、昔読んだ、海の向こうの国の物語を思い出した。世界中が水底に沈む前に、あわてて

方舟を作った男の話。たくさんの動物のつがいと、一握りの人間を乗せて、豪雨の中を漂った、大きな舟のこと。
「どうして、空に打ち上げたんでしょう？　地面がみんな沈んだわけでもないのに」
「地上に置いておくより、空をめぐらせておく方がずっと安全だったから。そういう時代だったのよ。アルファさんには、想像もつかないかもしれないわね」
そう言われて、昔、オーナーに持たされた拳銃のことが思い浮かんだ。私は使ったことがないけれど、あれを使うのが日常茶飯事だった頃もあったのだと、オーナーが少し寂しそうな顔で話してくれたのを憶えている。
「でも、今なら？　今なら、降りてきたって大丈夫なんじゃ……？」
ターポンを見上げたまま、先生はゆっくりと、かぶりを振った。
「降りてきたとしても、あそこに乗っている情報を、生命の形に再現する技術が、もう地上にはないのよ」
「それじゃ、なんのために……」
「そう思うでしょうね、あの子も」
一瞬の沈黙を、風がさらう。裏庭のススキがざわめく、かすかな声。
「あの子って……？」
「たった一人の乗組員よ」

「……人が、乗ってるんですか!?」
「もう交信の手段もないから、どうしているのかは知りようがないけれど……」
先生は静かに笑った。
「ロボットが一人、乗っているの。A7M1。アルファ型の、最初の一人よ」
驚いて、声も出なかった。
自分以外のロボットの話を聞くのは、これが初めてだ。他にロボットがいるかもしれないなんて、今まで、考えてみたこともなかった。
「あなたの、ごく近い親戚(しんせき)……。そうね、あなたのお姉さん、って言ってもいいかもしれないわ。初瀬野さんがあなたを教育したように、私もあの子を育てたの。たぶん、今でもあそこからずっと、地上を見守り続けているでしょうね。今となっては、地上の観測が唯一の仕事だろうから」
「……降りたいとは、思わないんでしょうか」
「本当のところは分からないけど、あの子ならたぶん、ターポンに残って、見つめ続けることを選ぶでしょうね。それが自分の仕事だと、分かっているから」
そう言って先生は、遠い眼差(まなざ)しで、ターポンを見上げた。
その凛(りん)とした横顔を見つめながら、胸の奥深いところでずっと渦巻き続けていた疑問が、急に浮かび上がってくるのを、私は感じていた。

「……人が、乗ってるんですか!?」
「もう交信の手段もないから、どうしているのかは知りようがないけれど……」
先生は静かに笑った。
「ロボットが一人、乗っているの。A7M1。アルファ型の、最初の一人よ」
驚いて、声も出なかった。
自分以外のロボットの話を聞くのは、これが初めてだ。他にロボットがいるかもしれないなんて、今まで、考えてみたこともなかった。
「あなたの、ごく近い親戚(しんせき)……。そうね、あなたのお姉さん、って言ってもいいかもしれないわ。初瀬野さんがあなたを教育したように、私もあの子を育てたの。たぶん、今でもあそこからずっと、地上を見守り続けているでしょうね。今となっては、地上の観測が唯一の仕事だろうから」
「……降りたいとは、思わないんでしょうか」
「本当のところは分からないけど、あの子ならたぶん、ターポンに残って、見つめ続けることを選ぶでしょうね。それが自分の仕事だと、分かっているから」
そう言って先生は、遠い眼差(まなざ)しで、ターポンを見上げた。
その凛(りん)とした横顔を見つめながら、胸の奥深いところでずっと渦巻き続けていた疑問が、急に浮かび上がってくるのを、私は感じていた。

「……先生」
　今なら、答えをもらえるような気がする。
「オーナーは私に、なるべくたくさんのものを見て、味わいなさいって、そう教えてくれました」
「そうでしょうね」
　見上げたままの横顔が、ほのかな笑みに和らぐ。
「もしも……、私にも仕事があるんだとしたら、それはやっぱり、見つめ続けることなんでしょうか？」
　先生がゆっくりと、視線を戻した。私を見すえる、凪の瞬間の空気のように、静かな眼差し。
「ロボットは、なんのために創られたんでしょうか？　……何かを、見つめ続けるために、ですか？」
　先生は、北の空にはっきりと姿を現した真っ白なターポンに目をやって、それからもう一度、私を見つめた。
「その話をしたかったのよ。……少し辛い話になるかもしれないけど、聞いてくれるかしら？」
　潮風がふいに強く吹き込んで、白い綿のシャツをはためかせる。私は、唇をしっかりと結ん

だまま、うなずいた。
「世界がこんなふうになってしまうより、ずっと前の話よ。数え切れないほどの人間たちが、狭い地上にひしめき合って暮らしていたわ。あの頃の人たちは、世界の繁栄が永遠に続くと信じ込んでいたから、寿命を延ばすことに夢中だったの。にぎやかで享楽的な世界に留まって、ずっと楽しんでいたかったんでしょうね。
　けれども、元気なままで長生きするのは、とても難しいことなの。年を取れば誰もが、体のどこかを病んでしまう。使えなくなったパーツを取り替えなければ、生きていけなくなってしまうの。
　そのために作られたのが、最初のロボットなのよ。
　人間と同じ構造をした生身のロボットを作ることは、当時の技術ではとても簡単なことだったの。大まかな構造は同じでも、ロボットの体の方がずっと性能がよくて長持ちすることは、あなたの方がよく知っているわね。ただ、ロボットがものを思ったり考えたりすると、人間との区別がつきにくくなるから、脳の機能は……、最小限に抑えてあったのだけど。
　ロボットは大量に作られたわ。それこそ、蛇口をひねって水が出てくるくらいの勢いでね。そうして人間たちは、体のあちこちをロボットの高性能で長持ちするパーツと取り替えたの。ロボットは、バラバラに切り刻まれてね。……ごめんなさいね、ひどい話でしょう。一つ一つ

のパーツを作ることよりも、一体のロボットを作ってしまうことの方が簡単で、安上がりだったのね。そんなことが平気でまかり通ってしまう時代だったの。

ロボットたちには中途半端な脳しかなかったけれど、それでも恐怖だけは感じられたらしいわね。中には、身の危険を感じ取って、逃げ出すロボットもいたのよ。人気のないところまで逃げ切れたものは、野生化して、今でも、生き延びていると思う。……そう。あなたの思ったとおりよ。小網代の入り江のミサゴは、間違いなく、あの頃のロボットでしょうね。ロボットなら一代で進化することだってできるから、入り江の環境に適応して、話に聞くような姿になったんだと思うわ。

そうやって、人類はうんと長寿になって、もっと繁栄するんだと、あの頃は誰もが思っていたの。

でも唐突に、あの日が……、『怒りの日』が、やってきた。

何が起こったのか、詳しいことは何も報道されなかったわ。ただ私たちに見えていたのは、空をおおい尽くす真っ黒な雲と、灰色の牡丹雪。せり上がってくる海、沈んでいく都市。それから、未知の疫病の、アウトブレーク。

子供はほとんど助からなかった。大人も半分は死に絶えたわ。そして残りの半分は、ほんの少しの例外を残して、命を生み出す力を失ったの。

世界はパニックにおちいったわ。混乱の中で、せっかく生き残った人たちさえ、つまらない

諍いのために命を落とした。人類は滅びるんだという恐怖に、誰もが震えおののいた……。

その一方で、人類がこの世界に生きた記録を、なんとかして残そうとする人々も現れたの。初瀬野さんも、そういう人たちの一人。

初瀬野さんはね、もともと、人間に備わった六つの感覚を保存する方法を研究していたのよ。あの人はよく、六根、という言葉を使っていたわね。目で見る、耳で聞く、鼻で嗅ぐ、舌で味わう、肌で触れる、その五つの感覚にくわえて、心で思う、ということ。感覚保存の研究のためにロボットのパーツを切り出して道具を作ったりしていたから、私は実のところ、初瀬野さんとは反目し合っていたのよ。決して、憎み合っていたわけではないんだけど。アルファさんのお気に入りのカメラ、あれ、レンズのところにあなたたちの目と同じものが入っているでしょう? ああいうことを、平気でする人だったから。

Aの1、つまり視覚の保存からはじまって、Aの6の、意識の保存まで、初瀬野さんはロボットのパーツを巧みに使いながら、ものすごいスピードで研究を完成させていったの。全てを統合したAの7を創ろうと言い出すまで、そう時間はかからなかったわ。……つまり、ロボットたちに完全な脳を与えて、六つの感覚を記録させよう、ということなんだけど。

………。

アルファさん、大丈夫?

……ええ、分かったわ。続けるわ。

そうして初めて、人間とまったく同じ、いえ、人間を超えたロボットが創り出されたの。A7M1、子海石アルファー。さっき話した、あなたのお姉さんよ。たとえ完全な脳を与えても、ロボットが人間と同じように物事を見たり感じたりできるのか、意思の疎通は図れるのか……。その時点ではまだ未知数だったの。私が教育者として選ばれたのは、私がその頃、あなたたちと同じ、舌のインターフェースを持っていたからなのよ。……驚いたでしょう？　私は私で、人間に近いロボットを創るために頑張っていたの。人工知能というのだけれど、そういうものを創るために、私自身の脳を、サンプルに使っていたのね。インターフェースはもうずいぶん前に外してしまったけれど、当時の私はあの子……、アルファーに、直に接続することができた。言葉からはじまって、人間として生活すること、豊かな感情を持って生きること、何もかもを教えたの。えび茶色の髪と目に、少し大人びた顔立ちで、でも中身は、赤ん坊同然だったのを憶えてるわ。服を着るのが大嫌いで、でも青いものが大好きだったから、青い布地のワンピースを買ってきて、少しずつ慣らしていったの。初めて会話が成立したのは……、預かって三ヵ月もした頃かしら。あんなに嬉しかったのに、何を話したのかはどうしても思い出せないのよ。

　アルファーが人間並みに生活して、ものを考えられるようになって……。あの子はすぐに連れていかれたわ。膨大なデータを初瀬野さんに残して、アルファーはターポンに乗ったの。人間よりはるかに長い時を生きるロボット。空からこの世界を見守り続けるには、これ以上ない

くらい適役よね？　……そうね、少しの間寂しかったけれど、私はもともと、そういうタイプの人間ではないから、案外平気だったわ。今でもあの子のことは、折に触れて思い出すけれど。

　とにかく、A7M1型機は成功したということで、今度はA7M2型機が三体創られたの。分かるわよね？　……そう、そのうちの一体が、あなた、アルファさんよ。他の二人がどこへ行ったのかは、私には分からないんだけど。M2型機には初めから、ちゃんと言語でコミュニケートできる機能があったから、今度は初瀬野さんが直接あなたを教育することになったの。

　初瀬野さんが、どれだけあなたを大切に育てたか、今のあなたを見ていると、よく分かるわ。豊かな感情も、鋭敏な感性も……。それだけじゃないわね。あなた自身の手で美しいものを創り出して、生きることを楽しもうとする力まで、身につけてしまうなんて。正直に言って、ロボットがこれほどの存在になりうるとは、私にも想像できなかったわ。あなたはもうとっくに、人間をはるかに超えてしまっているものね。あなたの見事な成長ぶりを見て、どんなに嬉しかったか……。そうそう、私の、この喜びの感情も、実はあなたの中に記録されているのよ。

　……信じられないのも無理ないわ。驚いたでしょうね。でも、本当よ。あなたは無意識のうちに、近くにいる、あなたとつながりのある人たちの感情を読み取って、それを記録しているの。人間たちが華やかに生きていた時代の終わり頃に、そういう能力のある子供たちが、あち

こちで生まれたのよ。ほとんどみんな、短命だったのだけれど……。人間が持てば辛い能力ですもの、耐えきれなかったんでしょうね。それでも彼らのおかげで、精神感応のメカニズムがいくらか明らかになって、A7M2型機には、周囲の人々の思考や感情を記録する能力が搭載されたの。一人でも多くの人々の記録を残すためにね。……ええ、不思議に思うでしょうけど、あなたが知らなかったのは当然なの。あなたが読み取って記録した他人の感情は、あなた自身からは決してアクセスできないようにブロックしてあるのよ。そうでもしないと、あなたまでパニックになってしまうわ。あの子供たちが、そうだったように。他人の考えることなんてね、なんとなく伝わってくるくらいがちょうどいいのよ。何もかも分かっちゃったら、きつくって仕方がないわ」

そう言って先生は、ふわりと笑った。

「私は……」

両手の間で、カップがことりと震えた。半分ぐらい残ったコーヒーに映る私の顔が、細かくさざめき立つ。

「記録のための、装置、なんでしょうか」

違う、と先生が大きく首を振るのが、目の端に映る。普段なら、人の笑顔を疑うなんて思いつきもしないけれど、今は先生の表情でさえ、ただの気休めにしか見えない。

「オーナーが私にいろんなことを教えてくれたのは……、いろいろなものを見せて、いろんな話を聞かせて、このお店を、与えてくれたのは……。私を、記録装置として、使いこなすためだったんでしょうか。記録装置がちゃんと働くようになったから、オーナーは、私をここにおいて旅に出て、もう、帰ってくる必要も……」

褐色の水面に映る自分が、ひっそりと微笑んでいる。まるで何かを諦めて、かえって楽になってしまったときのような顔。

先生の手がそっと、両肩に触れるのが分かった。温かな気配が、手のひらから体の中へ流れ込んでくる。

「私には、初瀬野さんの心中を想像することしかできないけれど……」

先生の、優しいのに揺るぎない声は、雷に打たれて病院に担ぎ込まれたときの、あの声に似ていた。

「あなたが今みたいに、この世界を丸ごと愛して信じられる存在になったのは、それだけ、強くて豊かな想いを受け取ったからだと思うの。初瀬野さんが人間以上に、あなたを大切に想っていたことだけは、確かだと思うわ」

肩にかけた両手に、ぐっと力を入れて、先生は言った。

「今のあなた自身が、何よりの証拠よ」

ふいに日の陰る気配がして、私は空を見上げた。

ターポンはいつの間にか、岬の真上の空に達していた。その姿は、とても大きな鷺に似ている。すらりと細い首、両側に大きく広げた翼、無機物とも有機物ともつかない、真っ白な機体。音もなく、紺碧の空を鋭い白に切り抜きながら、はるかな高みを通り過ぎていく。その輪郭の縁から漏れる、白熱した光、金の色。

「なんて、きれい……」

海から上がってくる心地よい微風の中に、ぽつんと放り投げた私の言葉が流れていく。いったい幾度、繰り返した言葉だろう。そのたび、私の中に積み上げられていく、美しいものの記憶たち。

愛おしいものなら、たくさんある。どんなにささやかなものでも、それを全部忘れずにいられるのなら、記録のための装置でいることだって、そう悪くはないのかもしれない。

「アルファさん、あなたがいてくれてよかったわ、本当に」

額の上に手をかざして、空を見上げたまま、先生はつぶやいた。

「……どうしちゃったんですか？　いきなり」

先生は答えない。カップとソーサーをそっと芝生の上に置くと、首の後ろに両手を回して、肌身離さず身につけていた、七宝焼きのペンダントを外した。

「先生？」

丸く、滑らかに光るそれを、先生はごく自然な動作で、――まるでそうするのがずっと前か

ら決まっていたかのように――、私の首にかけてしまった。

「そんな、もらえないですよ、これ、先生の大切な……」

あわてふためく私をなんだかまぶしそうに見て、先生は言った。

「そのマーク、なんて名前だったか、憶えてる？」

少し考えて、思い出した。病院の下の砂浜で、名前を尋ねたときのこと。

「見て、歩き、よろこぶ者……ですか？」

「そうよ。……あなたにぴったりだと思わない？」

うなずくことも、かぶりを振ることもためらわれて、そっと手に取ったペンダントを見つめたまま、黙り込む。

「ターポンに乗ったあの子にも、ここを発つ前に、同じものをあげたのよ。たくさん、見て、歩いて……、もっともあの子の場合は、歩くわけじゃないんだけれど……。そうして、喜べるように。今も持ってくれているのかどうか、確かめようがないけどね」

私はそっと頭上を振り仰いだ。白い巨鳥はゆっくりと、雲一つない青の中を滑っていく。

「私は地上に残って、この、少しずつ消えていく世界を、自分が行けるところまで、見て、歩くつもりだったの。このペンダントは、私の若い頃の、もう一つの目だったのよ。でもね、私は人間だから、……時間が限られているでしょう」

はっと、ペンダントを握りしめた。先生の微笑みは揺らがない。淡々と、語り続ける。

「だからアルファさん、あの雷の日にあなたに会って、私には思いも寄らなかったほど、あなたが素晴らしい存在に育っているのを知って……、私は本当に、救われたような気がしたの」
穏やかな眼差しが、私を見すえた。凪の海のように、静かで、澄み切った瞳の色。
シワにおおわれて、少し震える先生の指が、私の手のひらでまどろむペンダントに、そっと触れる。
「未来へ、連れていって」
何か言い返そうとして、ぐっと、喉が詰まった。胸の底からせり上がってくる感情の塊に、両目の奥が、かっと熱くなる。押し流されてしまいそうだ。
滑りかけた脚を踏ん張るみたいに、私は笑った。オーナーがいつだったか、ひまわりみたいだと言った笑顔を、先生に投げつけた。ひまわりの盾があれば、自分を守ることだってできる。
「何言ってるんですか！　時間なんて、いくらだってありますよ。ほら、私たち、こんなに暇なんですから！」
先生は、ただ微笑んでいる。時間の流れの中に立ち止まって、そのまま遠ざかっていく人影のように、ふっと、先生の姿が揺らいで、不確かに見える。
「時間なんて、いくらだってあるんですから……」
笑っていたはずの頬が歪んだ。散りはじめる、私のひまわり。踏ん張っていた心が、手がか

りを失って、流れに呑まれる。
私はゆっくりと、膝を折って、芝の上にしゃがみ込んだ。飲みかけのコーヒーに、絶え間ない波紋を刻み続けるのは、たぶん、私の涙なんだろう。自分の泣き声が、どうしてだか、私の耳に届かない。世界は、音という音を全部失ってしまったように、静かだ。
先生の手が横から伸びて、私のカップをそっと取り上げると、脇によけた。私たちは並んで、日のぬくもりを帯びた芝草の上に、腰を下ろす。先生はじっと、私の肩を、優しい手で抱いていた。
「一応は、医者だからね。こういうことは、自分で分かるもんなのよ」
静かな世界に、先生の声が滑り込んでくる。鳥の声、風の音。様々な音が、少しずつ自分の耳に戻ってくるのが分かった。
「あなたの感覚からすれば、ずいぶん短い命に見えるのかもしれないわね」
私は膝を抱いたまま、黙ってうなずいた。
「私もね、昔、研究室で保護してたマウスたちが、たったの一年や二年で死んでいくのを見て、同じように思ったもんよ。こいつらの一生って、いったい何なんだって。短すぎるじゃないかって」
先生は、はるかな昔を眺めるような目で、どこか遠いところへ視線を投げた。その眼差しは、海の底の螺鈿の光みたいに、静かに揺れている。

「私だって、決して一生に与えられた時間が十分だと思って満足してるわけじゃないわ。やることが多すぎて、一生ってたぶん、一回だけじゃ足りないものなのよ。だから昔の人たちは、あんなひどいことをしてまで、必死で寿命を延ばそうとしたんだろうし……」

先生の手が、そっと私の肩を離れた。空の両手を胸の前に差し出して、手のひらを見つめている。大勢の人を、ロボットを、治し続けてきた、特別な両手。

「私にはもう、この体しかないんだから、せめて、一つ、二つでも、何かやり遂げられたことが在れば、それでよし、ってことにしなくちゃね」

そう言って先生は、何かを振り切るように、空を見上げる。

悠然と空を行くターポンは、いつの間にか、頭の上を通り越して、南の海へ向かおうとしていた。

たった一人であそこにいる、私によく似た、誰か。

空から見続ける目と、地上から見つめ続ける、私の目と。

一瞬、交わりあったような気がした。それはもちろん、気のせいに違いないのだけど。

——何も打つ手がないときは……

オーナーの声が、ふいに蘇(よみがえ)った。ずっと昔、枯れてしまった花を生き返らせたくて、茶色い亡骸(なきがら)に水を注ぎ続けていた私に、オーナーが教えてくれたこと。

——できることだけを、やればいいんだよ。

流れに、逆らわずに。ただ、できることだけを。

「先生、これ……」

私は、握りしめていた右手を、ゆっくりと開いた。手のひらの上のペンダントヘッド。丸い輪郭の中で、楽しげに踊る、誰かの姿。

「連れていきます。私の、行けるところまで」

私たちはそのまま、はるか南の空の彼方(かなた)を、じっと眺めていた。ターポンは静かに地上を見守りながら、大洋にかかる雲路の果てへ、今や姿を消そうとしている。

ありがとう、とつぶやく先生のかすれた声が、行き交う潮風に混じって、かすかに聞こえたような気がした。

8 鷺の十字

「本当に、こんなのでよかったんでしょうか」
淡い藤色の夕暮れの下、ひっそりとした水面は、迫ってくる群青の色に浸されていく。入り江を見晴らす丘の上で、私はおじさんの軽トラに寄りかかっていた。
「かまわねえよ。本人がいいって言ってたんだから」
目の前には、地面をならして白っぽい石を敷き詰めた、戸板くらいのスペース。おじさんは脇にしゃがんで、しぶとく生えてくる雑草をむしっている。
その奥に、私の作った木工細工が、ぽつりと立っていた。
一枚の板から切り出した、高さ一メートルほどの、手製のモニュメント。大きく羽を広げた鷺のような形は、いつか西の岬で見た、ターポンを象ったものだ。
長い首の先、ちょうど鷺の目の辺りに、先生のマークを刻んだあの日のことは、遠い昔みたいにも、つい昨日みたいにも思えて、なんだかはっきりしない。
病院の廊下に倒れている先生を見つけたときには、もうすっかり、冷たくなっていた。あの優しい手が——私を治してくれた、不思議な力を持った手が、ただの木切れみたいに、びっく

りするほど軽くなっていた。
その後のことを、私はほとんど憶えていない。気がついたときにはもうおじさんがいて、先生の体は、寝室のベッドに横たえられていた。記憶はないけれど、たぶん、自分でおじさんを呼びに行ったのだろうと思う。他にはもう、誰もいないのだから。
腰が抜けたように座り込んだまま、まるっきり動けなくなってしまった私の代わりに、おじさんが診療室からハサミを持ち出して、庭の花をありったけ切ってきた。香りの強い、真っ白なユリの花。先生には花を育てるような趣味はなかったけれど、おじさんが何気なく持ち込んで植えた数本から、あっという間に増えて、家の周りを埋め尽くしていたのだ。礼を言われたことはなかったけれど、絨毯みたいに咲いたユリの花を先生は気に入っていたんだと、おじさんは言った。
生前から頼まれていたとおり、丘の上の眺めのいい場所に掘った墓穴に、幾重にもシーツでくるんだ先生を、二人がかりで、そっと寝かせた。穴の底に横たわった、白い繭のような姿を見下ろしながら、棺を作ってやる時間もない、とつぶやいて、そのとき初めて、おじさんは静かに泣いた。
それから、山ほど切ってきたユリの花を、先生の姿がすっかり埋もれてしまうまで、言葉もなく、投げ入れ続けた。ユリの強い香りが立ち上る中、おじさんが一人シャベルをふるって土をかけ続けていた姿を、妙に鮮明に憶えている。

ターポンのモニュメントは、一年ほど前に、西の岬でターポンを見せてもらったお礼に作ったものだった。先生はとても喜んで、いつか時が来たら、自分の墓標に使ってほしい、と言い残していたのだ。そんなつもりで作ったわけじゃないのに、あんまりだ、とは思ったけれど、こうしてお墓の前に立ててしまえば、意外なくらいしっくりと収まって、そのために作られたようにしか見えない。

「アルファさんよぉ、そこに木箱が置いてあんから、持ってきてくんねぇかな」

　荷台の方を振り向くと、両腕にちょうど収まるくらいの木箱があった。抱えてみると、意外に軽い。お墓の側に下ろして、フタをどけてみる。

　中に入っていたのは、数え切れないくらいの、ロウソクの山だった。

「こんなに……」

「南町だの、きぬがさだの、あっちこっち回ってよ。集めるの、大変だったわ」

　おじさんが立ち上がって、伸ばした腰を叩きながら言った。一本だけ、手に取ってみる。ほとんどが白い無地のものだったけれど、それは装飾用のキャンドルらしくて、青や緑の染料で鮮やかに、朝顔の花と蔓が描かれていた。長さも太さもバラバラのものが一緒くたにされた中、よく見ればちょくちょくと、色のついたものや模様の描かれたものが交じっている。

「何に使うんですか、これ」

「何もしてやれなかったからな、せめてここらで、送り火でも焚いてやるかと思ってよ」

「送り火って……。何を送るんですか？」

「アルファさんには、なんて説明すればいいんだかなぁ」

　おじさんは困ったように笑って、腕組みした。

「心って言やあ、分かるかな。人が死ぬと、心が体を離れて、なんの苦労もないところへ行くんだと、昔っから、そう言われてんだよ。その道を照らしてやんのが、送り火だ」

「そうだったんですか!?」

「え？　いや、そりゃ、おめえ……」

　おじさんが何か言いかけたけど、構わず私はしゃべる。

「オーナーが、昔、教えてくれました。目で見て、耳で聞いて、鼻で嗅いで、舌で味わって、手で触れた感覚、それを一つにまとめるのが、心だって。手に取ってみることはできないけれど、それは確かに在るものだよって」

　おじさんは、苦い草でもかじったような顔で、こっちを見る。

「残念だけど、アルファさん、そりゃ、初瀬野先生の例え話だよ」

「……本当のことじゃ、ないんですか」

「そりゃ生きてるうちは、初瀬野先生が言ってたみてえに、誰にだって心は在んけどよ。入れ物がなくなりゃ、話は別だよ。体が死んだら、心も消えんだ」

「消える……」

「在るもんは、いずれ必ず消えてなくなる。……これはまぁ、子海石先生の受け売りなんだけどな。俺らの世代なんかは、跡形もなく消えていくものをいやってほど見てきたから、骨身に染みて分かってんし、諦めんのにも、慣れてんだよ。送り火ってのは、まあ、生きてる人間が自分のためにやるもんだ。逝っちまったもんのことを、諦めるために」
「そうでしょうか……」
どうしてだか、おじさんの言葉が、まっすぐに入ってこない。なんだか違う、という気がした。そんなの信じたくない、と、お腹の底で思っていただけかもしれないけれど。
おじさんは何も言わずに、無地のロウソクを一本手に取ると、煙草を吸うときいつも使う、大きなライターのフタを開いた。かすかにガスの灼ける匂い。ロウソクの先に、淡い金色の火が灯る。白い敷石の真ん中当たり、なるべく平らなところを選んで、おじさんはロウを少し垂らすと、そこにぐいぐいとロウソクを押しつけた。地面に突き立ったミニチュア・ターポンの白に、ほんのかすかだけれども、橙色の灯りが映って揺れる。
「アルファさんもやるかよ」
おじさんが木箱の底から、ロウソクに埋もれていた徳用マッチの箱を取り出してくれた。
「本当は、みんなでやるもんなんだけどよ。頭数少ねえから、一人分が多くてかなわねえな」
それから、おじさんも私も、何も言わずに、白い敷石の上に、少しずつ、ロウソクを立てていった。いつの間にか日は落ちて、空は瑠璃色、西の果てに、深い桔梗色に染まった残照の、

光の帯が消えていく。今にも闇に溶け込んでしまいそうな、儚い富士の輪郭。
消えていく空の光と入れ違いに、先生のお墓の上には、少しずつ、小さな光の輪が増えていった。墓の上に立てきれなかったロウソクは、おじさんがあちこちでもらってきた古い燭台に刺して、墓所の周りを取り囲むように並べた。
ロウソクを全部灯してしまうと、おじさんと私は、うんと腰を伸ばして立ち上がり、やっぱり黙ったまま、入り江と、墓標と、無数の灯りの風景に眺め入った。
紫の夕闇の中、灯されたロウソクの灯りが、入り江の蛍のように、かすかに揺れて、さやかな輝きを放つ。
何かに似てる……。
そう気付いた次の瞬間には、もう思い出していた。
いつか北の町で見た、海に沈んだ横須賀の、無数の町灯り。
記憶の扉が、堰を切ったように、いっぺんに開く。先生と二人、肩を寄せ合い、展望台の柵に腰掛けて、時が経つのも忘れて光の海に見入っていた。あの、地上に星が降りたような光景、胸にせり上がる、静かな祈り。それから、すぐ隣にいた先生の気配。白衣から立ち上る、消毒薬の匂いと、入り江から上がってくる、潮の匂い。二つが入り交じって、あの場面の、匂いになる。穏やかな声、布越しの優しい体温。感じ取ったあらゆるものが、後から後から、奔流のように蘇ってくる。

ターポンの墓標に向き合いながら、私は確かに、先生の存在をなぞっていた。まるで、今ここに立っている先生に、手で触れることができそうなくらいに、あの夜の記憶は、とびきり鮮やかだ。

「おじさん……」

「あによ」

「私、やっぱり、先生は消えてなんかいないと思います」

「気持ちは分かんけど……」

「だって、私が憶えてますもの」

墓標を見つめていたおじさんが、ゆっくりと振り向く。揺れる灯火が刻む、頬や額の、深いシワの影。

おじさんの姿に重なって、まるで幻灯を映すみたいに、数え切れない場面があふれかえってくる。病室の穏やかな陽射し、暑い日の砂浜、ターポンの下の青い芝生。先生のいる、たくさんの光景。

「私、先生と一緒の時間を、一つ残らず、思い出せますもの。目の前のことと、頭の中のことと、どっちが本当だか、時々区別がつかないくらい。だから、私がしっかり憶えてさえいれば……、消えてしまったように見える人だって、未来へ連れていけるんです」

おじさんは、何も言わなかった。

そっと、胸元のペンダントに触れてみる。先生の若い頃の、もう一つの目と足だった、大切なシンボル。今は私に託された、世界を見つめ続けて歩く者の、しるし。

「アルファさんにそう言われんと、そんな気がしてくんな」

いつだったか、まるっきり同じことを言って笑っていた先生の顔が、ふいにおじさんに重なった。

「たぶん、私の記憶は、私の船なんです」

羽織った半袖のシャツの裾を、パシッ、と音を立てて広げた。大きなヨットが、帆を広げる瞬間みたいに。

「私は、たくさんのことを、憶えていられるから、みんな、乗せていけるんです。……タカヒロのことも、先生のことも……」

その先を言いかけて、言葉を呑んだ。

おじさんだけは、乗せてあげない。そんなふうに茶化そうとしても、やっぱり、声は出ない。

どうしたって、その時は来る。子海石先生が、そうだったように。

一人一人の時計を、止めることはできない。

「遅かれ、早かれよ……」

おじさんが、ひとり言みたいにつぶやく。

「俺も、アルファさんの船に、乗っけてもらわなきゃなんねえ」
私は、唇をきゅっと結んだ。
「それに、もう気づいてんだろうけどよ、あんたんとこ……、西の岬も、そう長くない。いずれ、波にさらわれんと思うわ」
目を見開いて、なるべく遠くを見た。唇の両端をあげて、小さく微笑んだ。
「そしたら、うちのガススタンドに住んで、店やりゃあいい」
「……え？」
にっ、と笑ったおじさんの、細めた目の辺りで、灯火の優しい橙が揺れる。
「俺がいなくなったら、あのスタンド、丸ごとアルファさんにやんよ。あそこなら高えから、まぁ飽きんまで住んでられんべ。……アルファさんがやじゃなきゃよ」
何か言おうとしたけれど、言葉は一つも出てこない。
折れてゆくオジギソウみたいに、私はゆっくりと、しゃがみ込んだ。すぐ側に腰を下ろしたおじさんが、そっと、拳くらいの大きさの巾着袋を差し出す。
「プレゼントだ。開けてみな」
たぶんおじさんには分からないくらい、かすかに震える手で、もたもたと袋を開いた。中身を少しだけ、手のひらに受けてみる。
生豆だ。

「コーヒー豆、出回らなくなってるんだってな。南町で聞いた」
手のひらにのせた生豆をぎゅっと握りしめて、うなずく。
「なら、自分でコーヒー植えればいい。うちの畑、みんな好きに使っていいから。これだけありゃ、どれかは芽が出るべ」
「どうして……」
こんなに、よくしてくれるんだろう。問いかけたかったけれど、その先が声にならない。
「店、たたまれちゃ困るからよお。俺がいなくなっても、あの店があって、アルファさんがいると思えば、ちっとは安心できんからな」
巾着袋を握りしめたまま、両腕の間に、顔を埋めた。おじさんのごつごつした大きな手が、翠色の髪を、くしゃくしゃとかき混ぜるみたいに撫でる。
「……ありがとう」
数え切れない灯火の向こう、地面に突き立ったターポンの墓標が、淡い茜色に染まって、まるで生あるもののように浮かび上がる。その翼は、灯火の陽炎の中に揺らめいて、今にも、星があふれる夕闇の空へ、飛び立っていこうとしているように見えた。

二人の姿を少し間遠に眺めながら、夕凪の記憶の中に浮かんで、オメガは何かに打たれたように、息を詰めていた。

人体のパーツを切り出すために作られた、最初のロボットたちのこと。

用済みになったとたん、転用されて、滅びていく世界を記録するための装置となった、次世代のロボット――アルファのこと。

けれども、オメガが創り出されたのは、宇布見の墓を掘るためでもなければ、世界の末路を記録するためでもない。記録したところで、読み出す者は、もう誰もいないのだから。

ふと、脳裏に蘇ったのは、創られてからしばらくした頃、何度も目にした光景だった。

廃工場のある一室で、ジャンクを寄せ集めて組み上げた、何か通信装置らしいものに向かって、宇布見が必死で呼びかけている。ダイヤルを小刻みに回しながら、嵐の風の音によく似た、耳を引っかくようなノイズの中で、いるのかいないのかも分からない誰かに向かって、叫び続ける。その声はほとんど、悲鳴のように聞こえたものだった。

瓦礫と廃墟に埋め尽くされ、くすんだ灰色と錆の色に塗り込められたハママツの町で、最後の一人になるのだと分かったとき、宇布見はほとんど、壊れかけていたのに違いない。誰にも顧みられることなく、たった一人で消えていくことが、きっと耐えられなかったのに違いない。だから……。

だから、創り上げたのだ。自分以外の『最後の一人』、つまり、オメガを。

遠からず自分が味わうはずの、たったひとりで取り残される恐怖を、代わりに背負わせるために。そして、宇布見が存在したことの証を――おそらくは永遠に誰にも気付かれることのない証を――、遠い未来まで運ばせるために。宇布見は、永遠に生きるオメガという船に自分を乗せることで、永久の生命を得ようとしたのだ。

混乱しはじめた感情が勝手に、記憶のページをめくっていく。

怪我をしたところでなんの心配もしてくれなかった宇布見。いつも何かに苛立っていて、ささいなことでオメガを怒鳴りつけた宇布見。傷つけるばかりで、何一つ与えてはくれなかった宇布見。ただ自分の恐怖を和らげるためだけに、滅びていく一方のこの暗い世界に、あえてオメガを送り出した宇布見。それがどんなにひどいことだったのか、夕凪の世界を見るまで、オメガには分からなかった。この世界の温かみに触れるまでは、幸福というものの存在さえ、オメガは知らなかったのだ。

――いったい、どこまで……。

血を吐くような声が、胸の奥深いところから駆け上がって、オメガの内側に噴き出してくる。

――どこまで僕を踏みにじれば、気が済むんだ!!

それは、かつて感じたこともないような、純粋で、激しい感情だった。

誰もいなくなった墓地にひっそりと揺らいでいたロウソクの灯火は、にわかに燃え上がっ

て、大きな一つの炎になる。それは地をなめるように這い寄って、逃れる間もなくオメガを取り囲むと、いっぺんに、空までおおうような炎の柱となった。

視界が、赤黒く染まる。堰を切ったように噴き出した感情が、全身を包んだ炎に油を注いで、火勢はとどめようもなく強まってゆく。吸い込んだ空気さえも、胸を焼くように熱い。突然、喉が締めつけられて、息を継ぐことさえできなくなる。

火柱の中で生きながら焼かれて、それでも不思議に覚めている頭の片隅に、ふと湧いてくる声があった。

――これが、『怒り』。

ないがしろにされたことへの、見捨てられたことへの、この世界へ送り出されてしまったことへの、やり場のない憤り。これほど大きな宇布見への怒りを、自分は胸の底でずっと押し殺していたのだと、自分の炎に焼かれて初めて、オメガは知った。

けれども、もう遅い。当の宇布見は、とっくに消えてしまっている。この憤りをぶつけようにも、炎を逃がす先は、もうどこにもないのだ。

何もかもが、もうどうでもいいように思えた。オメガは炎の中で倒れ込み、小さな体を、コーヒーの種でも吐き捨てるように投げ出す。幼い皮膚は炭と化し、やがて炎の紅色の中に、黒ずんだ骨格だけが、影絵のように残る……。

いつしか、夕闇の丘は消え、無数のロウソクの光も、大きな火柱も消え、オメガの意識は記憶の濃霧の中に、疲れ切って、ぽつりと浮かんでいた。

胸の内に、月夜の水面のような静けさが、次第に戻ってくる。

力尽きるまで怒りくるったことが、バカみたいに思えて、オメガは少しだけ笑った。

ずっと胸の底に抱えていた、鉛のように重苦しい何かが消えたわけではないけれども、ハママツにいた頃より、それはずっと小さくて、無力になったように思えた。『怒り』というものを知らずにいた頃より、自分はずっと身軽になった、そんな気がする。

今はただ、静かに、心安らぐものの側へ、戻りたい。

――アルファのところへ、帰ろう。

灰色の霧の中で、オメガは感覚を研ぎ澄ませた。現実のオメガが幸福だろうが不幸だろうが、そんなことはもう関係ない。いずれにせよ二度と、夕凪の世界から出るつもりはないのだ。そうして、世界の終わりと共に、オメガ自身の存在も穏やかに消えていけるのなら、それ以上、望むものは何もない。

やがて、コーヒー花のかすかな香りに入り交じって、懐かしいアルファの気配が、どこからともなく漂ってくるのが分かった。オメガはわずかな気配をたどって、濃霧の中を進んでいく。突然辺りが晴れ渡り、視界は一面、真っ白い光に包まれる……。

9 天翔(あまか)ける瞳(ひとみ)

白い花を鈴なりにつけた、背の高い茎が、寂れたガススタンドの周りいっぱいに咲いて、強い風に揺れている。

真っ青に、はるかな高みまで突き抜けるような空の下の、白い花の波。そのうねりの中に見え隠れする、コンクリートの、小さな事務所。

一瞬、アルファの記憶から、現実の世界へ戻ってきたのかとオメガは錯覚しそうになる。けれども、壁に塗られた白いペンキの色は鮮やかで、目の前にある風景は、ずっと昔のものなのだと分かる。

自分の意識はまだ、アルファの中にあるのだと知って、オメガはほっと息をついた。

ふいに、事務所のガラス戸が開く音。

すっかり見慣れた、深い翠(みどり)に輝く髪。藤色(ふじいろ)のベストと揃いのパンツ。白いシャツに、薄紅色のネクタイ。

現れたのは、カフェの制服姿のアルファだ。

片手に、カメラだけを持っている。長いストラップをつけたそれを、たわむれに頭の上で振

り回すと、手慣れた仕草で受け止めて、自分に向けて構える。

アルファと、カフェが、画面の中に重なり合う。ちゅん、と、小鳥のさえずるようなシャッター音。

アルファはカメラに収めた笑顔のまま、軽やかなステップで、スタンドの外、コーヒー畑の中へと、歩き出した。

まだ、実がなる前のコーヒーモドキ。この白い花を見るたびに、おじさんのことを思い出す。

スタンドの周りの土地を、おじさんと一緒に整地して、種を蒔(ま)いた。一度目の花から実は採れなくて、次の年、二度目の花が咲いた頃に、おじさんは静かに亡くなった。先生の隣におじさんを埋めて、その後、初めて採れた果実からとった生豆(きまめ)を、二人のお墓の周りに蒔いた。だから今、おじさんと先生は、コーヒーモドキの芳香に囲まれて眠っている。

あれからいったい、何度目の花がめぐってきたんだろう。今となっては、この辺りに住んでいるのはもう、私だけだ。ここ数年は、カフェを訪れる人もない。

タカヒロからの連絡は、おじさんの生前に途絶えたきりだ。南町の集荷場が消えて、もう、

手紙を出すことも、受け取ることもできなくなった。タカヒロは、おじさんが亡くなったことも知らないのだろう。遠い西の国で、今頃、どうしているんだろうか。自分が生まれた東の国、潮の香る、草むらの中の遠い故郷のことなど、もう忘れてしまったろうか。

白い花々をかき分けながら、のんびりと畑の中を進んでいく。コーヒーモドキの匂いは、ジャスミンという花の香りにそっくりなのだとオーナーがいつか教えてくれたけれど、私はまだ、その花に出会ったことがない。

かき分けた頑丈な茎が一本、指先から零れて跳ね返ってくる。草の先が耳たぶをかすった拍子に、音もなく何かが落ちる気配がした。見下ろせば、足下で光る、深紅の涙形をしたイヤリング。西の岬へやってきたときに、オーナーが一番初めに、私に与えてくれたもの。

――アルファ。

拾い上げようとして石に触れた瞬間に、懐かしい声が、遠い場所から蘇る。穏やかに響く、深みのある、優しい声音。とても背の高かったその人に話しかけるたび、少しでも側に寄りたくて、私はいつも、うんと背伸びしたものだった。

目を閉じれば今でも、あの日の光景を鮮明に思い浮かべることができる。

とにかく外の景色が珍しくて、カフェの前に立ってきょろきょろと辺りを見回していたこと。絶え間なく鳴り響いていた波音が、なんの音なのか分からなくて、少しだけ怖かったこと。

――手を出してごらん。

言われるまま差し出した手のひらに、オーナーがそっと、イヤリングをのせる。

――見てごらん。

「……あかい」

そうとだけ答えたことを思い出して、拾い上げたイヤリングを眺めながらつぶやいてみる。その色や形を、美しい、と感じることが、ここへ来たばかりの頃には、まだできなかったのだ。

カフェに入って、真新しい制服を着せてもらった。研究所で着ていた膝丈の簡易服しか知らなかった私には、いろいろな形の服があるのだ、ということさえ、驚きだった。それからカフェの仕事を、一つずつ教わった。汚れたカップが、水につけてこするときれいになるのが不思議だった。モップで床をこすると、床板がじんわり輝き出すのが面白かった。毎日新しい何かがインプットされて、楽しくてたまらなかったのを憶えている。

夕暮れになると必ず、オーナーと二人でテラスに出た。日ごとに微妙に変わっていく夕焼けの空を眺めながら、数え切れないほどの色の名前を教わった。春の夕映えの、浅く淡い薔薇色から、秋の残照の、濃く深い桔梗色まで。毎日、あふれるほどの色や輝きに触れながら、私は長い時間をかけて、美しい、ということが、どういうことなのかを知ったのだ。

岬を囲む木々の若葉。草むらに咲く色とりどりの花。そうした美しいものを見つけては、オ

ーナーに知らせに行くのが日課になった。何かをきれいだと言うたびに、オーナーは手放しで喜んでくれた。きれい、と、面白い、は、オーナーを喜ばせるための、魔法のようなキーワードだったのだ。私は、家の周りを見て回ることに夢中になった。オーナーの嬉しそうな笑顔を見たいばかりに、宝物を探すことに必死だった。

だから、オーナーが、旅に出る、と言ったあのとき。

――一緒に来るか？

そう問われて、私は、いいえ、と答えたのだ。まだまだ、家の周りに見てみたいものがたくさんあるから、と。

――大切なことだね。

それだけ言い残して、オーナーは行ってしまった。

後ろ姿に手を振りながら、私は、オーナーが帰ってきたら、何から見せてあげようかと、そんなことばかり考えていた。明日にも、明後日にも、帰ってくるものだと思いこんでいた。あまりにも深く、深く関わってしまっていたから、オーナーがいなくなるということが、理解できなかった。オーナーのいない毎日なんて、想像することもできなかった。

明日はきっと帰ってくる、毎日そう思い続けて、ずいぶん長い時が過ぎてしまったことに気づいたのは、オーナーが旅立ってから、数週間も経った頃のことだった。一日、一日を生きることしか知らなかった私が、まとまった時の流れを把握できるようになった頃には、オーナ

ーはもう、手の届かないところまで、遠ざかってしまっていた。

今だったら……。

話しかける相手など、もう誰もいないから、高い空の彼方を流れていく、ちぎれた羊雲に向かって、つぶやいてみる。

今の私だったら、行ってらっしゃい、なんて、簡単に送り出したりするだろうか。

イヤリングをのせた右手が、思い出の石を、ぐっと握りこんでいた。強く目を閉じて、感情の波が、通り過ぎていくのを待つ。

しばらくして、ゆっくりと目を開いた。

イヤリングはすっかり温まっていた。耳たぶにつけ直しても、金具の冷たさは感じられない。しっくりと耳になじむ感触。イヤリングをつけはじめたばかりの頃、耳たぶの違和感が気になって仕方なかったのが、嘘のように。

何にだって慣れるものだと思う。こうして、ひとりぼっちでいることにさえ。

唇の端をきゅっと上げて、軽く微笑んでみる。虹の端っこでも追いかけるみたいに、私は花の海の中を駆け出した。茎をかき分けて走るうちに、笑顔はいつしか本物になっていく。心地よい香り、胸に染み透るような空の青。

畑の中に突きだした大きな岩に、勢いをつけて飛び乗った。動かすには大きすぎて、整地したとき、この岩だけは残したのだ。ここに上がれば、少し遠いところまで見渡せる。花々の白

が陽射しに映えて、まぶしいような草原の真ん中に、たった一人。この岩はまるで、コーヒー花の波を切っていく小舟みたいだ。
見上げれば、ひたすらの青、何もない空。衝動に任せて、思い切り叫ぶ。
「お――――い!!」
まっすぐな声が、甘い香りに満たされたしじまを破って、辺りに響き渡った。何度も、何度も叫び続ける。気の済むまで、どこかにいるかもしれない、誰かを呼び続けて、やがて力尽き、岩の上に、尻もちをつく。
もう、誰もいない。
呼んでも、応える者はない。
見上げた空の、吸い込まれそうな青の中に、大勢の人々の顔が、浮かんでは消える。どうしてだか、微笑んでいる顔しか、思い出せない。カフェを訪れてくれたお客さんたち、旅先で出会った人たち、……タカヒロ、おじさん、先生、そして、……オーナー。
もう誰かと、この風景を、空の色を、風の音を、分かち合うこともないのだろうか。大切に運び続けてきた記憶を、誰かに伝えることも、叶わないのだろうか。
凪の海のように、静かな心の奥から、ゆっくりと、ある言葉が、浮かんでくる。
そろそろ、眠ろう。
とたんに、すっと胸の辺りが、軽くなった気がした。

眠る、という言葉がアルファの意識に上った瞬間、オメガは息を呑んだ。
それはきっと、ただの眠りではないだろう。現実のアルファがどうなったのかを、オメガはこの目で見て知っている。
アルファの記憶は、もうすぐ終わるのだ。
アルファと一緒に生きた、夢のように美しかった時代が、終わってしまう。タカヒロと一つになって想い続けた相手、温かな記憶の世界を織り上げてくれたその人に、何一つ伝えることができないままに。
最期の時がくるのを、ただ見ていることしかできないんだろうか？　じりじりと灼けつくような焦りが、オメガの胸を締め上げる。いっそ記憶の一部になれないだろうか？　草むらの石ころでもなんでも構わない。なんとかして、アルファの近くにある物に、入り込むことができたなら……!!
強く念じた瞬間、つむじ風に巻かれるように、オメガは風景の中の一点に吸い込まれていった。
ひどい目眩が去った後で、ゆっくりと、目を開く。

オメガはいつの間にか、アルファの手のひらに、優しく包まれていた。
――カメラだ！
アルファのカメラに入り込んだのだと、オメガは気づいた。タカヒロがいた頃、しょっちゅう意識が溶け合って、タカヒロと自分自身の境目が分からなくなったように、今のオメガは、アルファのカメラと一体化しているのだ。ひょっとすると、カメラのレンズに――誰のものとも知れない、あの藍色の目に――呼ばれたのかもしれなかった。
カメラと向き合っているアルファの想いが、じんわりと、伝わってくる……。

レンズカバーを、ぱちりと開く。藍色のレンズが、私をじっと、見つめ返してくる。
眠る前の記念に、このカメラでコーヒー畑を撮ろうと思いついた。
長年使いこんできたせいか、もう舌先にコードをつながなくても、カメラがどこを見て、何を撮ろうとしているのか、勘で分かる。カメラに触れていなくても、意識のさじ加減一つで、シャッターを切ることだってできる。あちこちにレンズを向けたり、うんと背伸びをして遠くまで画面に収めようとしたり、いろいろ試してみるけれど、なかなか納得のいく絵にはならない。

遠くまで、はるか遠くまでを、一枚に収めたい。できることなら、自分の姿も一緒に。
少し考えて、閃いた。
カメラを真上に向かって思い切り放り投げれば、コーヒー畑の全景と、自分の姿を一緒に撮れるんじゃないだろうか。上手く投げ上げることができたら、そして上手いタイミングでレンズが真下を向いてくれたら、きっと、最高の絵が撮れる。
両手でカメラを握りしめ、静かに目を閉じて、私は祈る。どうか、全てが上手くいって、素晴らしい一枚が撮れるように。とても幸福だったこのときを、美しい一枚で、締めくくることができるように。
すぅ、と一筋、細い息で深呼吸をして、パッと、両目を開く。
私は渾身の力を込めて、カメラを、空に向かって放り上げた。

高く、高く昇っていく。
オメガは真上に輝く太陽へ向かって、宙を泳ぐように軽々と、ひたすらに上り詰めていった。
重力のくびきから解き放たれ、あれほど重たかった悲しみも怒りも、スパークする陽射しの

中にあっけなく消え失せて、永遠に滅ぶことのない体さえも、もう自分を、しばりつけることはできない。

これほど純粋な歓びを、オメガは知らなかった。自分は今、歓び、そのものなのだと、はっきり分かった。朝を彩る金色の陽射しのような、ただ歓ぶためだけにそこにいる、純粋で揺るぎない、影すらも知らない光。

次第に飛翔のスピードはゆるみ、やがて、頂点が訪れる。ここから先は、落ちてゆくばかりだ。まるで生まれつき飛び方を知っていたかのように、オメガは軽やかに体をひるがえし、藍色の瞳を地上へ向けた。その瞬間、一気に目の前に広がった光景の鮮やかさに、息を呑む。

一面の、まぶしいような白い花々の、あやなす輝き。

その中心に凛として立つ、美しい人。

むらさきの瞳が微笑んで、藍色の瞳を見上げている。二つの視線が、しっかりと絡み合う。藍色の瞳は、この光景を全身に灼きつけて、シャッターを切る。決して、消えてしまうことのないように。

地上へ向かって、落ちていく。白い花々の海がせり上がってくる。手を伸ばして待ち受ける、美しい人の輝くような笑み。風を切るカメラに重なって、オメガは自分の体が、確かに五感を取り戻したことを知る。頭を下に落ちてゆきながら、地上の美しい人に向かって両手を伸ばす。オメガは美しい人の上に舞い降りる。カメラがアルファの手に収まるのと同時に、オメ

ガの伸ばした指先が、アルファの指先に触れ、アルファがカメラに口づけるのと同時に、オメガの唇は、アルファの唇に重ねられる。その瞬間。

——アルファ!!

オメガは美しい人の名を、夕凪の世界に響き渡らせた。唇を合わせていてもなお伝わる音が、アルファの記憶の伽藍の中に、幾度も、幾度もこだまして、消えるどころか、次第に強くなっていく。

ほとんど耐え難いほどに音が高まった、次の刹那、アルファの意識が、目のくらむような閃光に満たされた。何かが爆発する感覚。オメガはあっけなく弾き飛ばされ、自分が今、どこにいるのかすら分からなくなる。闇の中で、オメガの本当の体に、ゆっくりと、感覚が戻ってくる……。

気がつくと、薄暗いカフェの中で、壊れかけた丸椅子の上に、オメガは一人、腰掛けていた。

向かいに座って、頬杖をつき、目を閉じている、一人のロボット。ほこりをかぶった、藤色の制服。うっすらとツヤを残した、翠の髪。鈍く輝く、深紅のイヤリング。

それはまぎれもなく、現実のアルファだった。

たった今まで、夕凪の世界の記憶の中で、溌剌と笑みながら生きていたはずの、美しい人。

――戻ってきてしまったんだ。

アルファの記憶から弾き出されたことに気付いて、オメガは愕然とした。

夕凪の記憶と共に、消えてしまうつもりでいたのに。あの優しい世界の中に、永遠に閉じこめられてしまおう、そう決めていたのに。

重いため息をつきながら、握りしめた右手に、オメガはふと、小さな異変を感じた。

土ぼこりに汚れたカウンターの上で、ずっと触れたままだったアルファの左手が、かすかに、温かく感じられる。

自分の体温で温まったせいだろうか？　いぶかしみながら、オメガはもう一度、アルファの手を、ぐっと握りしめた。そのとたん、びっくりして飛び上がりそうになる。

アルファの左手が、オメガの右手を、握り返しているのだ。

つないだ手のぬくもりが、見る間に増してくる。白かった頬に、かすかに赤みが差すのが、オメガの鋭敏な瞳にはっきりと映る。震える睫。うっすらと開いた瞳に、確かにあの懐かしいむらさきの光が宿っている。

「ア……、アル……」

驚きのあまりオメガの声は震えて、なかなか言葉にならない。喉をしばる何かを打ち破るように椅子を倒して立ち上がり、オメガは叫んだ。

「アルファ!!」

何かに打たれたように、アルファの大きな目が開く。

ゆっくりと頬杖を外し、前屈みになっていた体をそろそろと起こして、オメガを見る。桜色の唇が、何か言いたげに震えて、微笑みの形に広がる。

「……いらっしゃい……ませ」

少しかすれているけれども、それは確かに、アルファの声に間違いなかった。オメガはコンクリートの床に、崩れ落ちるように座り込んだ。涙腺が壊れたように涙があふれて、オメガは生まれて初めて、大声を上げて、泣いた。

エピローグ

それからアルファが不自由なく動けるようになるまで、三十分ほどしかかからなかった。すっかり意識が戻ったアルファは、自分が五十年もの長い間眠り続けていたことに、ずいぶん驚いていた。

『仮死睡眠』という状態に入っていたのだと、アルファは教えてくれた。A7M2型機を創(つく)った技師たちが、確実な寿命の分からないアルファたちを、少しでも遠い時代へ送るためにのせた機能で、記憶するようなことが何も起こらないときには、仮死状態になるまで深く眠ることで、眠った分だけ、寿命が尽きるのを先送りにできるのだという。次に何かが起こったときに、その衝撃をきっかけに目覚めて、記憶して、また眠る。それを繰り返しながら、記憶のための装置として創られたアルファは、長い、長い時を渡っていくのだ。

次に訪れる誰かのために、アルファは『起こし方』をメモした紙を置いておいたのだけれど、それはとっくにボロボロになって、床の上でもう紙とは思えない代物(しろもの)に化(ば)けていた。

「何か、ちょっとでも入力してくれればよかったのにね」

しゃくり上げるオメガの頭をぐしゃぐしゃと撫(な)でながら、アルファは苦笑いした。仮死睡眠

を解くには、大声で名前を呼ぶとか、直接接続して信号を送り込むとか、とにかくアルファの脳に、何かを思いきり強く入力するだけでよかったのだ。アルファは、夕凪(ゆうなぎ)の記憶の最後に口づけた瞬間の、オメガの叫び声をキャッチして目覚めたのだった。

ここへたどり着いて、初めてアルファの姿を見たあのとき、もしも素直に泣きわめいていれば……、オメガはすぐに、現実のアルファを呼び起こすことができたのだ。

そんなふうに悔やむ一方で、もし首尾よくアルファが目覚めていたなら、あの美しい時代の記憶を、あんなふうに切実な気持ちで読み出すこともなかったのだろうな、とも、オメガは思う。タカヒロの切羽詰まった想いも、アルファが抱き続けた愛(いと)おしい人たちへの温かい想いも、あれほどの鮮やかさを持って迫ってくることはなかったのだろうな、と、じんわり懐かしさをかみしめながら、思うのだ。

アルファは、現在、つまり、アルファにとっては五十年後の世界のデータを、ほんの数十秒でオメガから読み出してしまった。記憶を読むのに、何もずっと口づけている必要はないのだと知って、オメガは真っ赤になる。

カウンターに突っ伏したまま、アルファはいっぺんに増えた記憶を整理しているようだった。しばらくして、ゆっくりと体を起こす。ぼんやりと遠くを見つめて、ほんの少しだけ、微笑んでいる。特にがっかりしたような感じはない。むしろ淡々と、『人の夜』を受け入れてい

るように見える。
「死なない、ロボット……？」
アルファがぽつりとつぶやいた。
「宇布見さんって人は、ホントにそう言ったの？」
オメガがうなずくと、アルファは唐突にオメガの頭をつかんで、右耳の後ろ辺りを何やら探り出した。くすぐったさと恥ずかしさでじたばたしていると、ほら、やっぱりあった！　と、アルファの声が響く。
「触ってごらん。仮死睡眠のスイッチだよ」
自分の指で探ってみて、オメガは驚いた。耳のすぐ後ろの肌がほんの少しスライドして、その奥に、不自然なデコボコがついている。
「そ、そんなわけないよ。僕は死なないんだもの。そんなスイッチ、要るわけないじゃないか……」
戸惑うオメガを見つめて、アルファは少し、困ったように笑った。
「ねえ、オメガ。宇布見さんにだって本当は、オメガが永遠に生きられるかどうかなんて、分からなかったはずだよ。私を創った人たちと、同じように」
はっ、と、オメガは目を見張った。
言われてみれば、確かにそうなのだ。繰り返し言い聞かせられていたから、疑うことさえし

なかったけれど、オメガが本当に不死かどうかなんて、宇布見には確かめようがなかったはずだ。
「じゃあ……、僕が死なないって、嘘だったの？」
呆然として、オメガはつぶやく。
「たぶんね。宇布見さんもいつかは、本当のことをオメガに教えるつもりだったんじゃないかな。そのときが来る前に、亡くなってしまったんだと思うよ」
「なんで……」
なんでそんな嘘を、と言いかけて、ふいに、オメガの胸に閃くものがあった。
あれは嘘ではなくて、希望だったんじゃないだろうか。
宇布見の記憶を持ったまま、永遠の時の流れを旅するオメガ。自分が確かに存在していたことを知っている誰かが、永久に生きて、記憶を守り続けるという幻想。そんな夢を見ることで、あの鉄錆と灰色の廃墟に埋もれた場所にひとり取り残されながら、宇布見はかろうじて、崩れ落ちそうになる心を支えていたんじゃないだろうか。
「あんまりだ……」
オメガの声が、くぐもってかすれた。初めから嘘だと分かっていれば、あんなに恐ろしい思いをしないですんだのに。
「宇布見さんはいつだって、僕が辛くなるようなことばっかりするんだ……」

しょぼくれてうつむいたオメガの頭に、アルファはふんわりと手をのせた。
「ねえ、オメガ。あんまり辛くて仕方がないんなら、宇布見さんの記憶は、もう消しちゃってもいいと思うよ」
オメガははっと、藍色(あいいろ)の目を見開いた。
「そんなこと、できるの?」
翠色(みどりいろ)の頭が、こくりとうなずいた。
「消したい記憶を、アクセスできないところへ、しまい込めばいいんだって。要するに、思い出せなくなるってことだよね。私はやったことないけれど、方法だけは教わったから」
「でも……、でも……」
もじもじと指を絡ませて、オメガは口ごもる。
「僕は、宇布見さんの記憶を未来へ持っていくために、創られたんだ。もしも、記憶を捨てちゃったら……」
——それでも僕は、生きてていいのかな?
オメガの、声に出せなかったつぶやきを感じ取ったように、アルファの目が、優しいむらさきに光る。
「オメガは、ふかーく、考えちゃうタイプなんだねぇ」
オメガの髪をくしゃくしゃとかき混ぜて、アルファは笑った。

「あのね、オメガ。私たち、ロボットっていうのはね、人が見たり聞いたりして感じ取った想いを、積み重ねて創られたものなんだと思うな。私たちは、パッと見、人間によく似てるただの機械なんだけど、たぶんそれだけじゃなくて、人間の生きて感じるもの全部を集めて形にした、そういうものなんだよ、きっと」
アルファの胸元で、白いペンダントがかすかに光る。
「だからさ、あちこち歩いて、いろんなものを見て、そうやって喜んでるだけで、もう十分なんじゃないかな。それ以外に、ロボットが生きてくための特別な理由とか、べつに必要ないと思うよ」
アルファがそう言うと、本当に、そうなんじゃないかという気がしてくる。いつだったか、あの老先生や、おじさんが言っていたことを、オメガは温かな気分で思い返していた。
「ま、本当言うと、私にもまだ、よく分からないんだけどさ」
そう言って、むらさきの優しい目が、にやりと笑った。なんだよ、とオメガもつられて、はにかんだ笑みを零(こぼ)した。

濃い潮の香りを乗せた海風が、盛りを過ぎたコーヒーモドキの花を揺らす。細かな真っ白い

花びらが、風の刷毛目をなぞるように舞い上がって、灰色のコンクリートを、清らかな色に埋めていく。

二人並んで、カフェの上に広がる、はるかな青空を見上げた。羊雲が一列になって、南から北へ、隊列を組んだように流れていく。指差してはしゃいでいる、洗い立ての制服に身を包んだアルファ。

ずっしりと肩に食い込んでくるリュックサックの重みを感じながら、オメガは静かに、アルファと一緒に過ごした、この一ヵ月ほどのことを思い出していた。

毎日、やることはいくらでもあった。長い眠りの間に荒れてしまった、カフェの周りの道路やコーヒー畑を手入れしたり、小網代の入り江でミサゴを探したり、おじさんと先生のお墓に五十年ぶりの花を手向けたり、消えてしまった西の岬の跡を見に行ったり。アルファにとっての懐かしい場所は、オメガにとっても同じように懐かしかったから、笑うことも泣くことも一緒に味わううちに、あっという間に時が過ぎた。

旅に出よう、とアルファが言い出したのは、つい三日ほど前のことだった。オメガの記憶から、西の方には何もないらしいと当たりをつけたアルファは、むさしのとさいたまの入り江を回って、みちのくへ向かってみようと思い立ったのだ。

「こうしてオメガが来てくれたんだもの。旅に出れば、きっとまた誰かに会えるよね」

宇布見が本当に『最後の一人』だったかどうか、彼には確かめようがなかったはずだし、も

し人間がみんな消えてしまっていても、まだ他のロボットたちが、アルファやオメガのように生き残っているかもしれない。アルファは、わくわくと輝く瞳でそう言った。

初めは、アルファと一緒に行くつもりでいたオメガが考えを変えたのは、胸のポケットの中のガラス玉が、いったい何だったのかを、ようやく思い出すことができたからだ。

あれをくれたのは、宇布見だったのだ。

それは、オメガが創られて間もない頃の、ささやかな記憶だった。

宇布見が、やっと歩くことを憶えたばかりの、幼いオメガの手を引いて、潮の引いた磯を歩いていく。踏み出すオメガの一歩一歩を見守るように、何度も振り返りながら、ゆっくりと。

ふと、宇布見が腰をかがめて、岩の間から何かを拾い上げる。

その手に、潮に洗われてキラキラと光る、あのガラス玉があった。

きれいだろう、と、宇布見が言う。とっておけ、と、オメガの空いている方の手に、それを握らせる。柔らかい手のひらに落ちる、淡い碧色の影。

そのとき、見上げた宇布見の顔が、確かに微笑んでいたのを、オメガは思い出したのだ。

どうしてその記憶がしまい込まれていたのか、なぜ今になって出てきたのか、オメガには分からない。最近ずっと楽しい気分でいたから、つられて楽しい思い出が出てきたんじゃない？と、アルファは適当なことを言っている。けれど、案外そんなふうに、単純なことなのかもしれない、と、オメガは思う。

宇布見はきっと、どこかで道を間違えてしまったのだろう。廃墟の中に、ひとりぼっちで取り残された悲しみが、宇布見を押しつぶしてしまったのかもしれない。
けれども、オメガを創ったそのときにはまだ、宇布見は確かに、自分で創り上げたロボットへの慈しみを、手放してはいなかったのだ。
——ハママツに埋まっているのは、悲しい記憶ばかりじゃないのかもしれない。
みちのくへ旅立つ前に、ハママツへ一度戻ってみたいと告げたとき、アルファは少し驚いていたけれど、それも大切なことだよね、と、微笑んだ。そうして、一年だけ待ってあげるよ、と言ってくれたのだ。来年の今頃、コーヒーの花が散り終わるまでに、戻っておいで。それから一緒に、旅に出ようと。
「ごめんね。出発、遅らせちゃって」
しょぼくれたオメガの背中を、アルファのしなやかな手が景気よくはたいた。
「謝ることないよ。……あ、そうだ。これ、渡さなきゃ」
アルファは制服の内ポケットから何か取り出して、手のひらにのせた。オメガは、あっ、と小さく声を上げる。
見て、歩き、よろこぶ者。
アルファのペンダントと同じマークが刻まれた、親指の先ほどの、丸い木彫り細工。てっぺんに金具がついていて、麻紐が通してある。

「私のとおそろいにしようと思って、作っておいたんだ」
アルファは麻紐の両端を、オメガの首の後ろで器用に結んだ。胸の辺りで揺れる木彫りの細工を、オメガはギュッと握りしめる。
「ありがとう……」
「旅の、お守りだよ。ちゃんと帰ってこられるように」
アルファの声が、ほんの少しだけ切なげに響く。
その声がスイッチになったように、オメガの脳裏に次々と浮かんでくる、夕凪の光景があった。
行ってしまったタカヒロを見送ったまま、前庭にひとり座り込むアルファ。先生と二人、静かにターポンを見送るアルファ。丘の上のお墓の前の、数え切れないロウソクのきらめき。はるかに広がるコーヒー畑の真ん中で、遠い誰かに思いを馳せる、アルファの横顔。
「ねえ、アルファ」
オメガは思い切ったように顔を上げる。両足を踏ん張って、藍色の瞳に力を込めて、アルファの目を、しっかりと見すえる。
「何?」
「僕は、行ったっきりになったりしない。……ちゃんと、帰ってくるよ」
面食らったように丸くなる、むらさきの瞳。

その目が、すっと細められて、優しげな光を帯びる。
「分かってるよ」
その声と共に、ふわりと、柔らかい香りがオメガを包んだ。
オメガはいつの間にか、アルファの腕の中にいた。布越しに伝わってくる、自分以外の誰かのぬくもり。記憶を読んでいる途中に何度も感じ取った、あの花にも似た、果物にも似た、優しい、温かな香り。
――この感覚は、現実のものなんだ。
オメガは生まれて初めて、誰かに抱きしめられていた。誰かの記憶越しにではなく、本当に抱きしめられるということが、どんなことなのか、たった今、知った。
アルファが、腕をほどいて、一歩離れる。オメガは、顔を見られないように深くうつむいたまま、少しだけ笑ってみせる。
「気をつけてね」
アルファの声にうなずいて、まるでそれが合図だったかのように、オメガはスタンドの外へ、一歩を踏み出した。
潮風は次第に、強く吹き荒れはじめる。道の両側から舞い上がってくる、白い羽根のような無数の花びら。その向こうの、目に痛いような青い空。
背の高い草むらの中に道が消えてゆくその直前、一度だけ、と心に決めて、オメガは振り向

いた。

真っ白な花の嵐(あらし)の向こうに、大きく手を振り続ける、アルファの影。

五十年前、コーヒー畑の中にたった一人立ちつくしていたときと、まったく変わらないその姿を、シャッターを切るように脳裏に焼きつけた、その瞬間。

オメガは確かに、彼女の優しい声が、胸の奥に響くのを聞いた。

——またね。

（了）

あとがき

なんてきれいに滅びていくのだろう。
原作「ヨコハマ買い出し紀行」が完結したとき、そんなことを思いました。瑞々(みずみず)しく描き出された風景の中に展開する、静謐(せいひつ)で、情感に満ちた物語。緩慢(かんまん)な死に向かう世界が、これほど穏やかで美しいものならば、いっそ、その流れに乗ってみたいとさえ思わせる、強烈な魅力を感じたのです。
なかでも印象的なのは、主人公、アルファさんのキャラクターではないでしょうか。衰えていく世界の流れにけっして抗(あらが)わず、ただ、今あるものを力一杯愛(め)でて、楽しむ。そうした、たくましい脳天気さの向こう側にかいま見える、繊細な感受性。彼女の豊かな感覚は、夕凪(ゆうなぎ)の時代の温かな風景に、いっそうの輝きを添えていたように思います。
原作が終盤に向かうにつれて、私は昔読んだ小説の一場面を思い出していました。死を禁じられた男の物語です。
不死の呪(のろ)いをかけられた主人公は、悪夢の中に自分の未来をかいま見ます。皆、死に絶えて

しまった地球で、最後の一人になった自分が、同じく不死のハツカネズミと共に、ただ月に照らされている、荒涼とした風景。その物語の中では、長く生きれば生きるほど、男の生は意味を失っていくのです。

　完全に不死ではないにせよ、アルファさんもまた、人間から見れば、ほとんど永遠に近い時間を生きる人。けれども、アルファさんならきっと、どんなに長い時が経っても、生きることを頑として楽しみ続けるだろう、という確信めいたものを、私は感じていました。

　どうして、そんなふうに思えるのだろうか。

　そのあたりをひもとくために、アルファさんが、あのカフェで過ごした時間、大好きだった人々と交わした、数々の言葉や一つ一つの思いを、丁寧にたどってみたいと思ったのです。特に、アルファさんが大好きだった人たちとの、お別れの場面を。

　決して、生身の人間と同じ時の流れに乗ることができないロボットにとって、生きることは取り残され続けることと同義です。成長して去っていく者、寿命を迎えて去っていく者、誰もがどこかで、アルファさんに別れを告げる時が来ます。

　その、つないでいた手を離す瞬間、アルファさんの胸に、どれほど豊かな思いが湧いたのだろうか。

　夕凪の世界を愛して止まないアルファさんの、強さの源は、そんなところにあるのではないか、と思うのです。

　本作中では、「ヨコハマ買い出し紀行」の世界が、どんな事情で成立していったのか、そのあらましを、ごく簡単にですが述べています。けれども、これは無数に存在しうる筋書きの中の、一つにすぎません。夕凪の時代はいかにして訪れたのか、ロボットが創られた本当の目的はなんなのか……。その答えを私は知りませんし、答えが存在するのかどうか、それすらも分かりません。あくまで一例として、お楽しみいただければ幸いです。

　末尾になりますが、ノベライゼーションをご快諾いただき、数々の素晴らしいイラストをお寄せくださいました芦奈野ひとし先生と、講談社の皆様に、心よりのお礼を申し上げます。

「人の夜」を越えて、はるかに長い時を歩き続けるアルファさんとオメガに、幸多きことを願って。

香月　照葉

漫画「峠」（芦奈野ひとし）は、
講談社月刊アフタヌーン
２００６年７月号に
掲載された作品です。